
プロミスワールド

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロミスワールド

【Nコード】

N6459J

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

若くして父の遺した店を継ぎ、必死で家族を養う青年。感情の繋がらない家庭で育ち、学校でも孤立している女子高生。どうにもならない現実を抱えた二人に訪れる非現実。どうにもならない現実と、どうにでもなる現実。もしも選択肢を与えられたなら、人はどちらを選ぶのだろうか。

前編

どうにもならない現実と、どうにでもなる現実。
人はどちらを選ぶのだろう。

それなら簡単だ、悩むまでもない。

腕を組みながら、彼は考えていた。現実はどうにもならない。

「お客さん、来ないね」

「そうだな」

厨房と向かい合うカウンターの席に、Ｔシャツにエプロン姿の青年が座っている。

その横には学生服を着た少年。もちろん、客ではない。

昼時だというのに、店内に客は一人もいなかった。今ではそんな状態が当たり前になっている。

調理人のいない厨房。客のいない客席。イスが二十個並べられたカウンター席と、後ろには大きな座敷。

無駄に店が広いせいか、必要以上に店内は閑散としている。

エプロン姿の青年は、本来は厨房に居なければならぬ人物だ。

二十一才と年齢的には若い、この『ラーメン超壺』の店主である。彼は腕を組んだ姿勢のままで、天井付近に備え付けられたテレビを見上げている。

並んで座る学生服の少年が、切羽詰った様子で言った。

「このままじゃ、お店潰れちゃうよ」

「それは、困るな」

青年が気の無い返事をする。視線はテレビの画面から動かない。

「ねえ、兄ちゃん、真面目に考えてる？ お店どこかこのままじ

や僕ら生活できないよ」

「兄ちゃんはいつだって真面目に考えてるよ」

テレビの画面に映っているのは、名前も知らない外国の景色。薄汚れたレンガの建物。積み上げられたガラクタの山。

ボロボロの衣服を着た子供たちがガラクタをあさっている。売れるようなものを探しているのだろう。

時々、疲れ果てた目でカメラを睨みつけていた。

スタジオのアナウンサーが、世界の惨状を伝える。

『地球上で日々、八億の人々が飢えで苦しんでいるのです。この国の子供たちは教育も受けられず、日々の糧を得るために……』

「ほら、見てみる幸司。外国にはあんなに苦しんでる人が山ほど居るんだ。それに比べて俺たちは、餓死しないだけ幸せじゃないか？」

現実はどうにもならない。貧困は消えない。不景気は終わらない。給料も上がらない。消費は低迷する。外食なんてもつてのほか。

しかも地元の美味しくないラーメン屋なんて、わざわざ足を運ばない。店は儲からない。貯金は減る一方。

そういえば、貸してたゲームも戻って来ない。もはや現実はどうにもならない。

「日本に生まれたのに食う物に困ってたら十分不幸だよ」

冷めた目で弟は言った。

カウンターのの上に置かれた預金通帳へと視線を移す。

父の遺した貯金が、ほとんど底を突いている。現実を認めざるを得ない。このままでは生活もままならない。

本間修一は眉根を寄せた。世界中の貧困を嘆いたところで、貯金が増えるわけじゃない。税金が免除されるわけもない。

うるさい弟が黙るわけでもない。ゲームも帰って来ない。

どうにもならない現実を、どうにかするしかない。

どうしよう。

「兄ちゃん、しばらくは真面目に働いてくれるって約束したじゃないか。なのにもう店だってやばいし、どうすんのさ」

「わかった、わかってる。わかってるからそんな泣きそうな声を出すな」

二年前、修一はやりたい仕事を見つけるために上京した。本当は東京にずっと暮らして、自分自身のやりたいことを見つけるつもりだった。

だが、半年ほど前に父が急逝してしまい、病弱な母と高校生の弟を放り出しておくわけにもいかず、田舎へと戻って来た。

店を売り払って引越そうと修一は提案しているのだが、母と幸司が絶対に店は続けると言って聞かなかった。二人掛かりで説得され、結局修一が店を継いでいる。

調理師免許を持っているとはいえ、経験の少ない修一に美味しいラーメンなど作れない。元々繁盛していたわけでもない店はあつという間に客足が遠のいた。

駅から徒歩で三十分、立地条件の悪いこの店に自然と客が流れてくることはない。

今では、日に一人でも客が入れば良いほうだ。

「ま、家族三人くらい、なんとかなるだろ」

難しく考えるのは諦めた。考えただけで解決するような問題なら、たいした問題ではない。

結局、なるようにしかならないだろう。

「なんともなつてないから、今ピンチなんじゃないか」

呆れたように睨む弟。修一はその視線に気付かないフリをした。

「わかつてるよ。何もしないで上手くいくなんて思つてないぞ。今日から別の仕事を探してくる。店の収入はアテにできないからな」

「それは兄ちゃんの作るラーメンが不味いからだよ」

「わかつてても黙つとけ、そういうことは」

「でも兄ちゃん、店を潰すのはダメだよ」

「ちゃんと店は続けるって。約束だからな。なんだよ、夜の間だけ働けるような場所を見つければ、文句ないだろ？」

幸司は心配そうな顔をしていたが、修一は気付かないふりをした。

結局この日は、『ラーメン超売』に客が現れることはなかった。

翌日の夕方から、修一はアルバイトを探して面接に駆け回った。生活が出来る程度の給料が貰えて、なおかつ楽しそうな仕事を探す。最初の面接から一週間が過ぎた朝、郵便受けには五枚の封筒が入っていた。

居間のソファに座って、一つ一つ確認する。

水色の封筒は未払いの市民税の督促状。どうせ払えない。修一は丸めてゴミ箱へ捨てた。

薄茶色の封筒を見る。未払いの国民保険の督促状。封筒のままゴミ箱へ捨てた。どうせ払えない。

分厚い灰色の封筒は、駅のそばに最近出来たスポーツクラブの広告だった。

「なんと今なら、見学会に来ていただいた方に抽選で千円分の商品券をプレゼント！ おお、そりやすごい」

修一は呟いてから、広告を丸めてゴミ箱へ捨てた。

残り二つは、それぞれ会社名が書かれている。アルバイトとして面接した会社の合否通知だった。期待しながら中を見るが、中身は二つとも不採用。ビリビリと破いてゴミ箱へ捨てた。

「俺の魅力に気付かないなんて、日本の企業も未来は暗いな」

「魅力じゃなくて能力が必要なんじゃないかな」

食パンと牛乳だけの質素な朝食を取っている幸司。最近は一ヶ月がリンやジャムですら買うのを我慢していた。

そこまで切り詰める必要があるのか？ 修一がそう言えば、きつとまた幸司は渋い顔をするに決まっている。

「ねえ、いったいどこを受けてきたのさ」

無言で封筒を差し出す。一つはそれなりに有名なパソコンメーカー。もう一つもパソコン関係で、サポートセンターらしい。

「兄ちゃんってパソコン使えたっけ」

「使えるわけないだろ」

一家に一台パソコンがあるようなこの時代で、修一は高校時代の授業以外でパソコンに触ったことがない。

母が大の機械オンチでパソコンを買おうとしなかった。親父は興味本位で欲しがっていたようだが、結局母を説得できなかった。

幸司は高校入学祝いにノートパソコンを貰ったが、修一は今まで使う機会がなかった。

「面接でそういう人は落とすよ、僕が雇う側だったらね」

大袈裟に溜め息を吐く幸司に、修一はムツとして言い返した。

「でも、まだ使ったことないだけで、使ってみればすぐに覚える自信はある」

「じゃあ僕のパソコン使ってみる？」

「やめとく」

あっさり引き下がって、修一はまた求人雑誌で仕事を探し始めた。不採用通知が来た二社は、夜勤で給料も高く勤務先が家からも近い。受ければ文句なしの仕事だった。

「パソコンはどの程度使えますか」と聞かれたから、「インターネットは得意なのですべて出来ます」と答えたのに、やはり嘘だと見抜かれたのだろうか。

「だいたいお前、学校はどうしたんだよ。もう九時過ぎてるぞ。サボりか、不良息子」

「今日は日曜日でしょ」

聞こえなかったフリをして、ページをめくる。

「兄ちゃんこそ、店はどうしたのさ。もうすぐ開店時間だよ」

「時間になってから降りるよ。どうせ客なんて来ないんだから、急いで準備する必要ないだろ」

店と自宅は一体化した建物になっている。一階部分がラーメン屋で、二階が自宅。玄関を出て階段を下ればすぐに店の正面だし、直通的な階段もある。

「そりゃ、そうかも知れないけど。万が一ってこともあるのに……」
「万が一の可能性しかないから良いんだよ」

二人の会話を遮るように、携帯電話の着信音が響いた。

三年ほど前に流行ったロックバンドの着信メロディーが流れる。買った当初に設定してから、一度も変更をしていない。

操作方法が良くわからないと言ったら、幸司に馬鹿にされた。それ以来、意地になって変えないことにしている。

テーブルの上に置かれている携帯電話を手にとって、通話のボタンを押す。

「もしもし？」

「あ、もしもし先輩、俺です。黒田ですけど」

懐かしい声だった。高校時代、軽音楽部で修一と一緒にバンドを組んでいた、一つ下の後輩。黒田徹平。

修一は音楽を趣味としか考えていなかったが、黒田はプロを目指して音楽を続けている。なかなか芽が出ずに苦しんでいると、彼は笑いながら言っていた。

「おー、テツか。久しぶりだな」

興味深そうに修一の顔を見る弟を手で追い払う。黒田は幸司にとってもそれなりに親しい人物だ。

「何か用か？」

「いやいや、久々にシュウさんの声が聞きたいなあーって」

「気持ち悪いなお前。切るぞ」

「待って待って、冗談だつて。キチンと用事があつて電話しました、はい。実はお願いがあるんですけど、俺らのバンド、ギターが急に抜けちゃって、シュウさんに代わりをやってももらえないかなあーつと……」

「無理。じゃあな」

「待って待って、少しは考えてよ。即答じゃないですか。ボーカルも何曲がありますから、一回だけでもいいから、次のライブだけでも、ね。頼みます先輩、この通り。頭下げてますよ今」

冗談のように言うが、黒田は本当に困った時にしか人に頼らない。もう音楽をやっていない修一に頼むくらいだから、よほど緊急事態

なのだろう。力になりたかったが、友人の頼みを聞けるだけの余裕が今はなかった。

「親父が死んじゃってさ、仕事探してるんだよ。家族を養わなくちゃいけないから。悪いけど、音楽やってる時間がないんだ」

黒田が返答に窮したようで、しばらくうなっていた。

「マジっすか、それは……それじゃ仕方ないっつーか、なんかすんません。シュウさんの事情知らなかったもんで」

「ああ、別に俺も伝えてなかったし。気にすることじゃないだろ」

「今回は他あたってみます」

それから一瞬の間を空けて黒田は続けた。

「でも、シュウさん。落ち着いたらもう一度音楽やりませんか、俺たちと」

今度は修一が返答に困った。音楽は趣味でしかなかったから、バンド活動は高校の三年間できっぱりと止めた。

今でもギターを弾くことはある。プロになりたいと考えたのも、一度や二度ではない。それでも、人生を賭けるほどの熱意はなかった。だからこそ、修一は他に道を探そうとした。

黒田は本気でプロを目指している。高校の頃から一貫して、それは変わらなかった。彼らと再び音楽をやるというのは、プロを目指すということになる。

正直に言えば魅力的な誘いに聞こえた。やりたくもない（しかも金にもならない）ラーメン店にいたり、ただ稼ぐためだけに仕事をするよりは、よっぽどやりがいがあるだろう。

「そうだな、幸司が成人したら、もう一度考えてみるかな」

それでも今は、家族を食わせていく必要があった。幸司は調理の専門学校に行つて、技術を学んで店を継ぐつもりでいる。その後でも、自分のために生きるのは遅くない。修一はそう考えていた。

朝七時三十分。目覚まし時計が鳴り始めてから一時間経って、ようやく彼女は目を覚ました。

気だるげに布団を蹴り飛ばし、のそのそと立ち上がる。うるさく叫び続ける目覚まし時計を（何故かドアの辺りまで転がっていた）乱暴に止める。

半ば眠ったまま急な階段を降りる。踏み外さないように注意した。階段から転げ落ちて怪我をしたのは、一度や二度じゃない。

冷たい廊下を歩き、台所を覗き見る。六人程度まで囲める大きな木製のテーブルが置かれている。最後に使われたのはいつだろう。

テーブルの上には彼女の分の朝食が用意されており、ラップが掛けてある。

でも、朝から何かを食べる気分にはなれなかった。

そのまま通り過ぎ風呂場へと向かう。脱衣所に入って、鏡を見た。映っているのは、垢抜けない十八歳の少女。眠たげに半分まぶたの落ちた両目。への字に結ばれていた薄い唇。背中まである長い黒髪は艶やかでキレイだった。ただし今は寝癖で広がり、頭の上で所々跳ねている。

脱衣所に入ると、パジャマを脱ぎ捨てる。骨ばって貧相な体付きは、同年代の少女たちに比べて発育が悪い。胸が中学の頃から成長してない気がする。痩せすぎて肋骨が浮き出ている。白い肌は、余計に不健康さを際立たせているようで、好きではなかった。

熱いシャワーを頭から浴びる。上気した肌がお湯を弾く。こびりついていた眠気が排水溝に飲み込まれていく。冷えた体は温まったが、気だるさは彼女を捕らえて放さない。

シャワーから上がり、細身の体をバスタオルで拭く。髪はドライヤーで念入りに乾かした。どんなに忙しくても、これだけは欠かさない。容貌には自信がないが、母譲りのキレイな黒髪だけは自慢だった。

再び自分の部屋へと戻ると、制服に着替える。ブラウスに袖を通して、ボタンを止める。一つずつズレていた。すべて外してから留め

直す。

時計を見ると、八時十分。急げば遅刻しない時間だ。

部屋に置かれた鏡を見て、最低限の身だしなみを整える。化粧はしない。クラスメイトの多くは学校へ行くのにも化粧をしていたが、彼女はしたことが無かったし、興味も無かった。

どうせ、私の容姿なんて誰も気にしない。

後ろ向きな考えを、溜め息と一緒に吐き出す。色気のない黒ぶちの眼鏡を掛けると、彼女はカバンを手に取った。

学校までは歩いて二十五分。何の問題もなければ、遅刻せずに着く。

玄関を出た直後で、彼女は後悔した。寒い。十一月に入ったばかりだと言うのに、風はソックスを穿いた足を切り裂くような冷たさだった。

部屋へと取って返すと、クローゼットを開けてコートを探す。乱雑にハンガーに掛けられたたくさんの衣服の中から、紺色のダッフルコートをようやく見つけて取り出した。学校で指定されている地味な防寒着。一枚羽織るだけで、それなりの暖かさはある。

時計を見た。八時十五分。急げば、まだギリギリで間に合う時間。彼女は少し早足で歩いた。遅刻の常習犯なので今さら気にしても仕方がないが、いちいち教師の小言を聞くのは嫌だ。

学校へと続く、長い坂道のみもとへと着く。

すぐ前に会いたくない集団が見つけて、彼女は顔をしかめた。

「おはよう、今日寒くない？」

「有り得ないんですけどこの寒さ」

「もうサボりたい」

金や茶など、派手に頭を染めた三人の女子高生。みんな流行の最先端のような髪形をして、綺麗に化粧で整えた顔をしている。同じ人間で、同じ学校に通う生徒だというのに、まるで別の世界に生きているかのような華やかさだ。

このままのペースで歩くと、あの集団に追いついてしまう。今日

は遠回りをして行こうと決めた。

坂道を真っ直ぐ進まず、大きな公園を横切る道へ入る。

時計を見ると、八時二十分。この道を通れば、学校まで急いでも三十分は掛かる。

教師の小言を聞くことを覚悟して、彼女は溜息を吐く。気だるげに坂をのぼりはじめた。

公園を抜けて、ようやく学校が見え始めた時に、チャイムの音が響いた。

「井上千鶴、また遅刻か」

「はい。急ぎましたけどダメでした」

呆れたように言ったのは彼女の担任。名前は高木か赤木だ。忘れてしまった。

職員室の中は、エアコンが効いていて暖かい。教室には古ぼけたストーブしかないのに、不公平だ。

最低でも週に一度は、こうして職員室で遅刻の注意を受けている。授業に遅刻した生徒は、わざわざ遅刻した理由を用紙に書いて、提出しなければならない。誰が考え出したんだか知らないが、面倒くさい。職員室で遅刻の言い訳をして、教室でも遅刻の言い訳をしなくちゃいけない。二度手間だ。

教師も面倒臭い時は、適当に遅刻の理由を聞いて生徒を解放する。担任の高木（赤木？）も普段はそうだった。

特に、千鶴のような遅刻常習犯が相手ではお説教の言葉も使い果たしているだろう。

だけど、今日は違った。

「これから受験だったのに、今さら生活態度で注意されてるようかどうかするんだよ。お前、大学に行くんだろ？　だけど、このまま進学したって、真面目に受講しないのは目に見えてるじゃないか。今のうちから自分の生活を改めて、何のために大学行くのかしっかり考える」

担任の赤木（高木？）は珍しく本気の口調だった。

別に、好きで進学するわけじゃない。

そう思ったが、口には出さないでおいた。ここで相手の神経を逆撫でしても意味がない。適当にうなずいて、説教が終わるのを待てる。授業中の教室の扉を開くのに、もう慣れてしまった。教師の声だけが聞こえる教室に、ガラリ、と音が響く。妙に耳障りなその音で、一瞬だけみんなの視線を集めた。

古いストーブの熱気で、教室の空気は淀んでいるように感じる。

濁った空気がまとわり付くような不快感が、憂鬱な気分を強くした。
「井上、遅いぞ」

「寝坊しました、ごめんなさい」

適当に言い訳を考えて謝る。教卓の上に遅刻用紙を置くと、千鶴は自分の机へと向かう。誰も彼女とは目を会わせようとしないうし、存在を気にする様子もない。

それもいつものことだ。もう慣れてしまった。

家と同じように、千鶴は学校でも独りだ。親しい友人は誰もいない。誰も彼女を気にも留めない。孤立している。

辛いとも、寂しいとも感じない。昔からそうだ。独りでいることが多かった。誰とも話しが合わないのだから、仕方無い。

授業終了を告げるチャイムが鳴った。教師が出て行くと、途端に教室には音が溢れる。

みんな席を立って友達と話しをする。次の授業開始までわずか十分しかないが、生徒たちにとっては貴重な雑談の時間だ。

千鶴は席を立ち、教室を出て行った。騒がしい空間の中に居ると、息が詰まる思いがした。

休み時間はいつも教室から逃げていた。校舎の中で誰もいない場所を探すのは難しい。だいたいは、屋上へと続く階段の踊り場へ逃げ込む。扉に鍵が掛かっているので屋上へは出れないが、人が通り掛かることも無いので時間を潰すのにはちょうど良い。

時々、不良生徒や千鶴と同じように孤独な境遇の人間が居ること

もあるが、そういう時には他の場所を探す。

階段に向かう途中の廊下。偶然目の前から歩いてくる三人組を見掛けて、背筋がひやりとした。

朝、わざわざ避けたあの連中だ。名前は知らない。話したこともない、多分。

履いている上履きの色で同学年だということだけはわかる。爪先が一年は青、二年は緑、三年だったら赤だ。

一直線の廊下じゃ逃げ場がない。千鶴は諦めて、うつむきながら歩いた。

三人組とすれ違う。ジロジロとこちらを見ているのがわかる。三人はニヤニヤといやな笑みを浮かべながら、不躰に千鶴を観察していた。わざとらしく指を差し、小声で何か言い合っている。

「見た、またあいつ一人でいるよ」

「友達いないんじゃない、やっぱ。キモいんですけど」

「聞こえるってバカ、あはは」

千鶴は聞こえないふりをした。彼女たちに嫌われる覚えはない。きつと、誰かをバカにすること自体が遊びと変わらないのだろう。

彼女たちだけじゃない。小学校の頃も、中学の頃も、彼女を馬鹿にして喜ぶような連中はたくさんいた。

頭が悪く運動も苦手、愛想もない。他の人と大きく違うわけではない。気に入らない理由が一つでもある。攻撃されるにはそれだけで十分だ。

慣れているから、悲しくはない。ただイヤになる。見知らぬ他人に馬鹿にされて、知り合いに疎まれるような生活には。

こんな状況が、あと何年続くのだろう。卒業すれば、何か変わるのだろうか。

千鶴は溜め息を吐いた。変わるはずがない。自分が変わるわけではないのだから。

かつてたった一人だけ、友人と呼べる人物がいた。その頃は、もう少しだけ笑っていた気がする。だけど今の千鶴には誰もいない。

昔の自分は明るくなかっただろうか？ 彼がいなくなつて、話し相手もいなくなつてしまつたから、余計に暗くなつたと思うのは気のせいだろうか。

放課後だけが千鶴にとつて、心が安らぐ時間だつた。

すぐに家には帰らず、意味も無く街をぶらぶらした。都会とは違い、繁華街にでも出なければ好きなかだけ独りで居られた。家に引きこもっているよりは、ずっと気晴らしになる。

段々と日が傾き、太陽がオレンジの夕日に変わる。今の季節なら、暗くなるまであつという間だろう。

帰り道にある本屋に寄つて、今日はもう帰ろうと考えた。

薄汚れた壁面とサビついた看板。今にも潰れそうな雰囲気とは対照的に、店主の老人はまだまだ元気らしい。いつも背筋を伸ばして何十年も変わらない仏頂面で客を睨みつけている。

子供の頃は怖くて近寄れなかつたが、今では老人の視線も気にならなくなつた。何か欲しい本がある時や、ヒマな時は時間を潰すために使っている。

目的の本屋の前に、不審な人物が立っていた。睨み付けるようにガラス窓から店内をのぞいている。老人の顔など比較にならないほど、凶悪な目付きをしている。禿げ上がった頭、つりあがつた眉、小太りのスーツ姿の男。

なんだろう？ 店に用事があるなら入ればいいのに。開いてるんだから。

不思議に思つて男の背中を見る。右手が自然と制服の襟元を掴んでいた。不安を感じる時に、無意識に出てしまうクセだ。自覚はしているが、直せない。

突然男が振り返つて、千鶴と目が合った。慌てて目をそらすと、なるべく近付かないように早歩きで逃げた。

何をしているのかは知らないが、あの男の真横を通つて本屋に入りたいとは思わなかつた。

そのまま振り返らず、真っ直ぐ家へと戻った。帰り着く頃には、辺りは薄暗くなっていた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

台所から聞こえてきた声に、素っ気無く挨拶を返す。声の主は、彼女の保護者である叔母の佳代子。

帰宅の挨拶以外に会話もせず、千鶴は階段を上がり、自室へ戻った。

散らかった部屋にカバンを放り投げて、服を着替える。ブレザーとスカートはハンガーに掛けて、シャツは適当に放っておいた。あとで洗濯物のカゴに入れておこう。

夕食の時間も二人は無言だった。無言の食卓に、テレビの音だけが響いている。

「ごちそうさま」

手早く夕食を片付ける。部屋へ戻ろうとする千鶴に、一言だけ佳代子が伝えた。

「来週分のお昼代、引き出しの中入れといたから」

「うん」

今日一日の会話は、それで終わりだった。二人の間に血の繋がりは有っても、感情の繋がりは無い。

両親が亡くなったのが十三年前。千鶴は佳代子に引き取られて、それからずっと二人で暮らしていた。

まだ若く未婚の佳代子が、子供を引き取り育てるのがどれだけ大変なのか、千鶴には想像もつかない。

自分を育ててくれていることに感謝はしている。でも、相手も自分を家族だとは考えていないだろう。邪魔者だと思われていても、追い出されないだけありがたい。

佳代子はまるで腫れ物を扱うように、千鶴と必要以上の接触を持つとうとしない。昔からずっとだ。千鶴も自分から接触的に話しかけようとは思わなかった。

週末の休みも、千鶴にとっては心が休まるものではない。遊びに行くような友達もいないので、だいたいは一人きりでゲームをしたり漫画を読んだりして過ごしていた。

部屋にいる間は、彼女にとって安らげる時間だ。

でも、階段を降りればすぐに叔母さんがいる。顔を合わせれば気詰まりを感じてしまうから、出来る限り避けたかった。

きっと叔母さんもそう思っている。だけど、お互いに休みではどうしようもない。

どちらが悪いわけでもないのに、ぎくしゃくした関係を引き摺ったまま、気付けばそれは当然の状態になっていた。
今さら変えようがない。

月曜の朝も、千鶴は学校に遅刻をして行った。理由は寝坊。今回は本当だったが、担任の玉木（赤木でも高木でもなかった）は呆れたように今日もため息を吐いていた。

その日は、朝から体育の授業だった。教室にはきつと誰もいないだろう。

コートのポケットに手を突っ込んで、ぺたぺたと足音を鳴らしながら冷たい廊下を歩く。風が吹き込まないだけ外よりはマシだが、寒いのは同じだった。

階段を昇って、二階にある三年の教室へと向かう。廊下の先に、あの三人組の背中が見えた。彼女たちも遅刻だろうか。

それ以上、三人組のことは気にせず、がらりと教室の扉を開ける。無人の教室は寒々しく、生徒たちの代わりに脱ぎっぱなしの制服が出迎えてくれた。

千鶴は自分の席に座ると、眼鏡を外してケースへとしまう。カバンを枕代わりに、机に突っ伏した。

わざわざ寒いのに、着替えて校庭に出る気にはなれない。それに、体育の授業はあと十分程度で終わってしまう。ここで寝てた方がマシだ。

目をつぶってうとうとしていると、廊下がだんだんと騒がしくなってくる。生徒たちが少しずつ戻って来たようだ。

教室の人口密度と比例して、騒々しさが増す。生徒たちの話し声や椅子を引く音、様々な音が混じり合いうるさかった。

「あれ……財布が無い」

ざわつく教室の中で、その声は妙に良く聞き取れた。千鶴は寝惚けた顔を上げて、声の聞こえた方を見る。

「マジ？ 落としたんじゃない？ グラウンド見て来る？」

「いや、俺、制服のポケットに入れっぱだったし、絶対」

何人かの男子生徒が集まっている。一人は慌てたように机の中をのぞき込んだり、制服のブレザーのポケットを漁っている。

「ない、うわー何だよ、マジでねえよ、嘘だろお」

困惑したような声で男子生徒はカバンの中身をひっくり返し、何度も何度も同じ場所を探している。

周りの生徒たちも異変に気付いた。騒ぎ立てる男子生徒に注目している。

「どつか落としたんだろー。村松、こないだもそんなこと言ってたじゃん」

「ちげえし、今日は絶対ポケットに入れといたんだって。俺確かめたもん」

「お前の絶対はアテになんないからなあ」

体育の授業では、教室が空っぽになる。防犯のために、貴重品はすべて持ち出した上で担当教員に預け、授業中は金庫にしまっておく決まりだ。だが、面倒だからと制服やカバンに入れたままで授業に向かう者もいる。珍しいことではなかった。

「ひょっとして、パクられたんじゃない？」

誰かが何気なく言ったその一言で、教室の空気が変わった。

盗まれた。冗談のつもりで言ったのかも知れないが、その可能性は当然ある。体育の授業中、教室へは誰でも入れる。もしも財布を置いたまま出ていたのなら、本当に盗まれたとしても、おかしくな

い。

「最後に財布見たのっていつだよ」

「ホームルームの時間にはあったって、絶対。朝来てすぐに一組の河野に百円返したから」

「じゃあ、その後に誰かが？」

「体育の時間だろ、盗られるなら」

教室中の誰もが、彼らに注目している。窃盗なんて、今まで起こったことのない大事件だ。

財布を失った村松は顔を蒼白にしているが、直接の被害が無い者たちにとっては愉快的話題のネタになっている。

同じように財布を置いたまま出ていた者はみんな、自分の財布の無事を確認し、安堵の溜め息を吐く。それから同情の眼差しで村松を見ていた。

「一時間目居なかった奴は？」

みんなが顔を見合わせる。しばらくの沈黙。それから、誰かが呟いた。

「井上……？」

今まで存在に気付かなかったかのように、クラス中が一斉に千鶴を注視した。

困惑して、みんなの顔を見る。突き刺さるような疑いの眼差し。誹謗や中傷の視線に晒されることには慣れている。誰かに馬鹿にされるのなんて珍しいことじゃない。

だけど、今までとは違う、異質な雰囲気。みんなが敵意を持って千鶴を見ていた。

疑惑。嫌悪。軽蔑。

「私、何もしてない」

みんなの視線に耐えられず、訴えるようなささやき声で千鶴は言った。

「じゃあ他に誰がいるんだよ」

村松が怒鳴り声をあげる。千鶴は身をすくませた。完全に千鶴を

犯人だと決め付けている。

「そんなの……私、知らない」

男子生徒が一人、近づいて来る。よく村松と一緒にいる、彼の友人の秋田だ。顔を真つ赤にして、怒っているらしい。

千鶴の目の前まで来ると、吊り上がった目で睨み付ける。運動部に所属していて、体も大きな秋田に見下ろされるのは、とても怖かった。

いくら千鶴を犯人だと思っけていても、女子だから手が出せないのだろう。千鶴が男子だったら殴つてでも白状させる、そう感じさせる雰囲気だった。

千鶴は無意識に制服の襟元を掴んだ。

私は何もしてない。何も悪くないのに、どうして信じてくれないの？

秋田が口を開くよりも早く、教室の扉が開いた。

「いつまで騒いでるんだ。授業始めるぞ、席に付け」

教室に入るなり、担任が言った。口癖のようなもので、いつも教室の様子を見せずに言う。

教壇の前に立つてから、普段と違う雰囲気気付いたのか、不思議そうに生徒たちの顔を見回していた。

「先生、俺の財布が盗まりました」

「何だつて？ おい、どういうことだ」

噂好きでいつもうるさい奈良橋が、まるで当事者であるかのようにべらべらと経緯を語っている。とても楽しげな口調だった。

「それで、体育の時間は井上だけが居ませんでした。あいつんち、両親いないから金に困ってるって……」

「私は何もやってない！」

立ち上がった勢いで、イスが音を立てて倒れた。秋田が驚いたように後ずさった。

両親がいないなんて、そんなことは関係ない。私はお金に困ってなんかいないし、困ったって、人の財布を盗んだりしない。

こめかみの血管が脈打つ。頭が痛い。怒りで目の前がチカチカした。呼吸をするたびに肺が震えて、言ってやりたいことはたくさんあるのに、言葉が喉に張り付いたようにまったく出てこない。

こんなに腹が立ったのははじめてだった。唇を震わせて、必死で話そうとするが、ダメだった。

そしてまた冷たい視線にさらされる。何人かはあざけるように笑っていた。

「証拠も無いのに疑うのはやめなさい」

担任の玉木はそう言うが、それで納得する者は一人もない。

「奈良橋と村松、後で職員室まで来なさい。話を聞くから」

渋々といった様子で、ようやく教室中の生徒が席に付いた。村松は座る直前に、親の仇でも見るような目で千鶴を見てきた。

結局、その後の授業はずっと寝ていた。周りの目を見るのが怖かった。

誹謗も中傷も慣れた。それなのにまた、くだらない悪意で傷付けられる。一日が妙に長く感じた。いつそのこと、帰ってしまおうとも思ったが、自分は何も悪くないのに逃げ出すみたいで、出来なかった。

帰り際、机の中の教科書とノートのカバンに詰めている時に、一冊のノートを落としてしまった。軽い音を立てて、落ちた拍子にあるページが開いた。

拾い上げようとして、その落書きに気が付いた。誰が書いたのか、黒いマジックで思い付く限りの罵倒や卑猥な言葉が書かれている。

何ページにも渡って、ノートの後半いっぱい落書きがされていた。

千鶴は力任せに落書きがされた部分を破る。薄いノートは半分くらい厚さになってしまった。周囲の生徒が、奇異の目で千鶴を見る。恐ろしくて、誰とも目を合わせられなかった。

急いで教室から出る。廊下から昇降口に向かう途中で、また三人組の女生徒たちが居た。いつも一緒にいる。バカみたいに。

ニヤニヤと千鶴を見てくる。今日の出来事でも耳にしたのだろうか？ 攻撃するネタが増えて嬉しいのだろう。千鶴を指差して、またひそひそと何か言い合っていた。

「井上」

下駄箱で靴に履き替えていると、玉木が声を掛けて来た。

「今日のことなんだが……」

少し言いよどんで、続ける。

「何か知らないか？ 教室に入る前に、廊下で誰かとすれ違ったとか……」

何気ないことのように聞いてくるが、結局、疑っているんだろう。当然か、あの状況じゃ私が犯人だと思われても仕方がない。

「知りません。急いでいるので帰ります、さようなら」

玉木が何かを言っただけで来る前に、千鶴は昇降口を出た。本当に何も知らないし、今さら話す気などなかった。

シウちゃんだけだ、私を信じてくれたのは……。

一人きりの帰り道で思い出すのは、幼馴染のことだった。

家にじっとしていても、送った履歴書の返事は来ない。美味しいラーメンが作れるようになるわけでもない。何もすることがないのだから、自由に散歩ぐらいはしてもいいだろう。

散歩は気分転換としては良い方法だ。金も掛からないし時間も掛からない。

夕焼けに染まる街を眺めながらゆっくりと歩く。途中でCD屋を見つけて立ち寄った。何枚か欲しいCDを見つけたが、財布の中に千円しかないのを思い出して、諦めた。

目的も決めずに歩き続ける。駅前のロータリー。派手な看板のパチンコ店。居酒屋やファーストフード店が入ったビル。並んだバス停。小さい頃から見慣れた景色ではあったが、夕日を照り返し才

レンジ色に輝く街は美しく、感慨深いものはある。

夕暮れの町並みを見てみると、なぜだか物悲しい気分になった。金がないのが悲しいわけではない。断じて違う。

都心から電車で二時間。田舎というほど田舎でもなく、だからといって都会でもない。中途半端な街だったが、田舎と都会の両方の良さを併せ持っているとも言える。

買い物帰りの主婦や学生たちで駅前には賑わっていた。楽しそうに友達と歩く学生や、ベビーカーを押して歩く若い主婦。スーツ姿の男は外回りの仕事だろうか？ 不機嫌そうに喫煙所でタバコをふかしている。

たくさんの人々がいる。いったいこの中の何人が、美味しいラーメンが作れずに苦しんでいるのだろうか？

飢餓に苦しむ子供たちを知らないように、誰も修一の苦しみを知らない。世界はあまりにも冷たい。

互いに相手を思いやり、苦しみを分かち合えば世界は平和になるはずだ。だから誰か店に来てくれ。

物思いに耽っているとポケットの中で携帯が震えた。液晶画面を確認する。幸司からだった。

「もしもし？ 兄ちゃん、帰りにスーパーで卵買ってきて」

逃避していた現実に一気に引き戻される。

「なあ幸司。お前の兄ちゃんは今、世界平和には何が大事かを考えているところだ」

「兄ちゃんが何考えたって世界は平和にならないよ。でも卵を買って来てくれたら僕らの食卓は救えます。よろしく」

ビツ、と可愛げの無い音を残して、電話が切れる。ロマンのかけらも無い弟との電話に気分をぶち壊しにされてしまった。

世界平和は諦めると、修一はまた歩き出した。

駅前の広場に備え付けられた時計台を見る。時刻は十六時を回ったばかり。帰るにはまだ早い。急いで卵を買って帰らなくても、家庭の食卓は救えるはずだ。

昔、良く利用していた古本屋が近くにあったことを思い出す。まだ残っているだろうか。外見は古臭く、並んでいる本も黄ばんだり傷んだようなボロボロのものが多かった。潰れていてもおかしくない。

記憶を頼りに細い路地を歩いて行く。大きな通りに出て、道路を挟んだ向かい側に、まだ古本屋は立っていた。くすんだ壁も、サビついて判読できない店名の看板も、すべてそのままだった。

「おー、懐かしい」

多分、最後に行ってから四年ぐらいだろうか。入り口へと近付き、横開きの扉に手を掛ける。動かない。鍵が掛かっているようだった。

閉店しているのだろうか？　だがそれなら、シャッターもしまっているはずだ。不思議に思っただけ扉を強く引くが、やはりビクともしない。

くもりガラスの向こうは確かに薄暗い。壁にある窓から中を覗き込むと、電気が消えていて中には誰もいない。

四年前には、愛想の悪い老人の店主がいつもカウンターに立って仏頂面をしていた。

やはり、閉まっているのだろう。諦めて立ち去ろうとすると、覚えのある制服が目にとまった。道の向こうから、下を向いて近付いてくる一人の女生徒。四年前まで通っていた高校の、女子の制服だ。懐かしさを感じたのはその制服ではなく、生徒の顔だった。

寒そうに身を縮めて歩く、黒の長髪を背中まで伸ばした少女。こちらには気付いていないらしい。うつむいたまま歩いている。咄嗟に修一は声を掛けた。

「千鶴！」

呼びかけられて驚いたのか、一瞬肩を震わせて顔を上げた。

風貌は以前にも増して大人びて、真っ黒な髪は二年前よりも長くなっている。それでも見間違えるはずがない。黒ぶちのメガネ、化粧つきのない、自然な白い肌。それなりに整った顔立ちをしている。

だが目つきが悪くいつも背を丸めて俯きながら歩くから、暗い印象を与えてしまう。もっと背を伸ばして歩けといつも教えてたのに、彼女はいつも下ばかり向いていた。

「え、シュウちゃん？　なんで？」

井上千鶴は目を丸くして修一を見返した。

その呼び方も小さい頃から変わらない。ずっとやめると言っているのに、彼女は呼び方を変えようとはしなかった。

「この後、誰かと約束とかしてんの？」

「ううん。今日は、一人でぶらぶらしてる」

「暇人なんだな」

「そっちこそ」

このまま立ち話を続けるくらいなら、どこかに入ろう。修一がそう提案し、二人は歩き出した。

しばらく歩いて、駅の南側の喫茶店に入ることにした。元々は白かっただろう木製の壁は薄汚れ、店の正面にすえられた看板もペンキが剥げてしまっている。

北口の周辺には大きなビルやデパートが立ち並んでいるのに、対照的に南側は全く栄えていない。

本当に同じ地域なのか疑いたくなるほどに寂れている。それは昔から変わらなかった。

「もう東京から戻って来たの？」

「ああ、半年ぐらい前だけだな」

愛想の悪い中年のウェイトレスが、二人の座るテーブルに注文した飲み物を運んでくる。修一の前にコーヒーを、千鶴の前にオレンジジュースを置いた。ウェイトレスが立ち去ってから、千鶴はオレンジジュースとコーヒーの位置を入れ替えた。

「俺の親父が死んだって、聞いたか？」

うん、と千鶴がうなずく。

「二ヶ月くらい前に。シュウちゃんのお母さんに外で会って、聞い

た」

「そつか。それで、母さんと幸司を養わないといけないから、しばらくこっちで働くことにしたんだよ」

修一がコップに入れられたストローを外し、直接オレンジジュースを飲む。昔からコーヒーは苦手だった。

せつかく久しぶりに会ったのだから、暗くなるような話しはしたくない。話したいことはたくさんあった。とりあえず、先ほど気になったことを千鶴に聞いた。

「そういや、あそこの本屋って潰れたのか？ 真っ暗だったけど」

「うん、あそこのお店やってたおじいさんも死んじゃったんだって。結局、故人の話題になる。だが二人にとって親しくない他人の話しなら、まだマシだろう。」

店主の老人は一年ほど前に病気で他界したらしい。大概の若者よりも頑丈そうだったから、病気で弱っていく姿は想像が付かなかった。

人はこちらが覚悟するよりも早く亡くなってしまふ。親父もそうだった。

もつとも、本間一郎が死んだのは病気ではなく、泥酔した拳句に転倒して頭を打ったからだ。覚悟する時間なんてあるはずもない。

「そういえば、一昨日かな、変な人があの本屋の周りうろろしてた」

「変な人？」

コーヒーにミルクと砂糖を溶かしながら、千鶴が続ける。

「何か、スーツ着ててサラリーマンみたいな格好してるんだけど、目付きとかすごい悪くて、ヤクザみたいな顔してる。ハゲてたし」

「ハゲは関係ないだろ、別に。で、その人が何かしてたのか？」

「ううん、何かしてたってわけじゃないけど、窓から店の中覗いてた」

「それだけなら、俺もしたぞ。店がやってるか確認しただけじゃないのか？ シャッターも閉まってなかったしさ」

「うん……あれ？」

カップを口へと運ぼうとして、千鶴の手が止まった。

「どうした？」

「なんか、あの本屋、一昨日と何か違った気がするんだけど。なん
だろ……」

首をかしげて、何かを思い出そうとしているのか、視線を宙にさまよわせる。

「思い出せないなら、どうでもいいことなんだろう、多分」

「そうかも、でも気になるなあ。シュウちゃんわからない？」

「わかるわけないだろ、アホか」

千鶴は一口コーヒーをすすると、苦そうな顔をして、角砂糖をも
う一つ加えた。

カラン、と入り口のドアベルが鳴って、店内に客が入ってくる。

染め抜いた金色の長髪に、色白の肌。高級そうなスーツを着込んで、
新宿あたりだったらホストと間違われかねない格好の若い男だった。
ちょうど修一の座っている位置は、店から入る客と向き合う場所
にあった。男から視線を感じて、ちらりと見ると、目が合った。男
は修一を見て、馬鹿にしたような薄笑いを浮かべた。

不快に思ったが、別に気にするほどでもないので無視をした。

「どうしたの？」

「別に、何でもない」

制服姿の女子高生を連れているのが珍しく見えたのだろうか。カ
ップルだと思われたのかも知れない。ただの幼馴染だなんて、傍目
に見えていてわかるものではないので仕方がない。

「お前今年で十八だろ？ 彼氏の一人ぐらい出来たのかよ」

聞かれると、千鶴は不機嫌そうに口をへの字に曲げた。

「何それ、急に聞くこと？」

「じゃあ前置きして聞くか？ それとも、高校卒業したらどうする
つもりなんだ、とか、将来の夢は、とか。そんな話が良いか？」

「ヤダ。久しぶりに会った親戚のおじさんみたい。そっちこそ、東

京に恋人とかいないの」

切り替えされ、言葉に詰まる。どちらがきつかけになって付き合っても、長続きすることは一度も無かった。

「いたよ。何人かな。でもみんな別れた」

「私だつてぼちぼちと」

「いたのか？」

「いない。一人も」

「だろうな」

修一が覚えている彼女の母親は、いつも笑顔でとても美人だった。千鶴にも、母譲りで生来の美しさがある。

だが、外見を補って余りある愛想の悪さのおかげで、男も寄って来ないだろう。しかも千鶴は人見知りで、自分から他人と仲良くすることができない。半ば予想していた答えだった。

「もつと姿勢よくして、そんで愛想笑いで良いから笑えよ。そしてらモテるぞ、もつと」

「めんどい」

四文字で否定され、修一は苦笑するしかなかった。

結局、日が暮れるまで二人は喫茶店で話し続けていた。

駅前で千鶴と別れて、薄暗くなった帰り道を歩く。駅周辺はコンビニも多く明るかったが、住宅街に入ってしまったえばほとんど真っ暗だ。街灯が無ければ何も見えない。

信号待ちをしていると、真横に男が並んだ。

わざわざこんな近くに立たなくてもいいだろう。

そう思つて、チラリと隣を見る。金髪にスーツ姿の男。喫茶店の入り口で見掛けた男だった。

少しずつ横にずれて、男と距離を開ける。

「招待状、受け取りましたよね」

「え？」

男はこちらを見ずに言った。電話はしていないし、独り言でもないらしい。信号が青になつても男は渡らない。修一の返事を待つて

いるようだ。

「拒否しますか？ 選択は自由ですから、強制するつもりはありませんよ」

今度はこちらへと向き直った。やはり、修一に何かを問い掛けている。

まったく話の内容が掴めない。誰かと間違えているのだろうか。それとも何かやばい人間だろうか。

困惑する修一の様子を見て、男はバカにするように鼻で笑った。

「いえ、理解していないなら結構です」

不可解な言葉を言い残して、男は行ってしまった。

係わり合いになりたくない。怪しい人物だ。修一は心からそう思った。だから何も聞き返さなかったし、男の後も追わなかった。

何かを忘れている気がする。歩きながら修一は考え込んだが、結局思い出せなかった。

「だからさ、謝っただろ、怒るなよ」

「別に怒ってないってば。ただ兄ちゃんが弟との約束も守れない男だなんて、僕はショックだった」

「忘れてたんだって。いいだろ、卵ぐらい」

思い出したのは幸司の顔を見た時だ。卵を買い忘れたおかげで、本間家の食卓は救えなかった。

その日の夕食は、ニラを塩胡椒で炒めただけの、シンプルかつ質素なものになった。

家事全般は母が行う。体調が悪い日は幸司が手伝い、食事の準備は主に幸司の仕事だった。

料理好きな弟は、自分の望みどおりの調理方法ができないといつても不機嫌になる。

普段は何があってもわがままひとつ言わないクセに、料理だけは譲れないらしい。修一は調理師免許持っていたが、金にならない料理をするなんてゴメンだと思っている。

「その卵ぐらいがないせいで、夕飯はニラ炒になっただんじやないか。これがどれだけ僕らに取って辛いことか……」

「食わないならもうぞ」

「あ、取るなバカ！」

「二人とも、ケンカしないでご飯は食べなさい」

子供のようにたしなめられる。

居間でテーブルを囲んで、家族三人が食事を取っていた。

「幸司、そんな小さなことで腹を立ててどうする。譲り合いの精神が世界平和を生み出すんだぞ」

「人の食事を奪うような人ばっかになったら、また戦争が起こるよ」にらみ合う兄弟を横目に、母はハシを置いた。

「ところで、ここに百万円あります」

突然、母が預金通帳を手にとっていった。この前確認した時は、限りなくゼロに近い金額しかなかったはずだ。

ケンカしていたことも忘れて、二人で母が持つ預金通帳を凝視した。

「どっから出て来た、こんな大金」

「おじいちゃんに借りてきた。お母さんは働けないし、修一にばかり面倒見てもらうわけにいかないもの」

母方の実家は、それなりに裕福な家らしい。修一は小さい頃に何度か行ったつきり会っていないので、詳しくは知らない。

ただ、祖父が親父を良く思っていないだろうというのは、その当時から感じていた。

修一も祖父のことはあまり好きではない。自分の娘とはいえ、簡単に百万円も渡すような神経が知れなかった。

分かりやすいえば、金持ちは妬ましい。

「ただ、これつきりにしろって。自分たちで生活ができないなら、息子を連れてすぐに家に戻って来いって、怒られちゃった」

母さんは笑っているが、疎遠になった実家に金の無心をするのは簡単ではないだろう。ただでさえ体が弱いのに、心労までかけたく

はなかった。

「そんなことしなくたって、すぐに俺が仕事見つけるって」
少しだけ憮然としながら、修一は言った。

自分が不甲斐ないせいとは言え、そうやって誰かに頼らなければならぬのは嫌だ。だいたい、誰かが援助してくれるなら、自分が無理をしてまで家族を養おうとしている意味がなくなってしまう。

色々と文句は言っているが、父が亡くなった今、家計を支えるのは自分の役目だと考えている。

「ごちそうさま」

物足りない食事を終えたあと、すぐに職探しを再開するために自分の部屋へと戻った。

これ以上、情けない真似はしてられない。もう自分は子供ではないのだ。法的にも肉体的にも完全に大人だ。

精神的には未熟かも知れないし、まだどこかで甘えがあると思っている。

それでも、頼りになることを証明してやる。誰にも文句は言わせない。

修一の部屋は物がゴチャゴチャと置かれている。壁に立てかけられたアコースティックギター。埃だらけの机の上には、スコアブックとピックが無造作に並べられていた。

最後にギターを引いたのは、三ヶ月ほど前だ。棚にはたくさんの書物が並んでいる。少年向けの漫画から、古典的な小説、海外文学、果ては絵本や、何故か女性向けのファッション雑誌まで。他にも、一度も開かれなかったコンピューター関連の参考書。資格の本。

タンスの横に適当に積み上げられているのは、彼が一時期熱中していた絵画を描くための数々の道具。

油絵は家族からの非難が激しくてすぐに止めさせられた。それから水彩画を試してみたが、すぐに熱が冷めてしまった。

今、自分が無理をしてまで家族を養おうとしているのは、親父への反発が根底にあるのかも知れない。

親父は昔から自分の店を持つために努力を続けて来た。修一は正反対で、たくさんのことに挑戦したが、結局進みたい道が見つからなかった。

それは東京に出ても変わらなかった。

親父と同じように家族を養っていければ、死んだ父も自分を認めてくれるかも知れない。だから意地になっているのだろうか。

ベッドに横になり、手足を投げ出す。今はごちゃごちゃと考えるより、仕事を見つけるのが先だ。

枕元に置いてあった求人誌を取ろうと手を伸ばす。指先に慣れない感触が触れた。

不思議に思つて掴むと、それは見慣れない封筒だった。

また税金の催促だろうか。だとしても、何でこんなところに？

疑問に思いながら、その封筒を裏返す。宛名も何も書いていない、オレンジ色の封筒。

乱雑に封を切ると、中に入れられた便箋を取り出した。

無視されることは何度もあった。バカにされることにも慣れていく。

だけど、ここまで直接的な悪意を受けたことはなかった。

置き忘れて帰った世界史の教科書に、昨日と同じような落書きがされている。いや、昨日よりも酷い。

目を覆いたくなるような罵倒の言葉、意味もわからない単語や卑猥な落書き。表紙や裏表紙にもびっしりと、黒いマジックで書かれている。もう使える状態じゃなかった。

ノートと違って、教科書は捨てるわけにはいかない。

周囲の生徒たちは、誰も千鶴を見ようとしていない。担任が来るまでの朝の短い時間を、騒がしく過ごしている。気付いていないのか、気付いていないフリをしているのか。この中の誰かが、こんな陰湿

なことをしたんだろうか。

ひょっとしてコレが、イジメというやつだろうか。

今まで考えたこともなかった。無視されるのも慣れているしバカにされても平気だ。誰かに疎まれるのなんて、もう当たり前だと思っている。だけど、イジメと言えるほどに酷い目に遭った記憶はない。

指が震えた。怒りか悲しみか、目の奥が熱くなって泣きたくなくなった。

意地を張って、なにこともなかったように振舞う。傷付いた素振りを見せるだけでも悔しい。泣き出すなんてもつてのほかだ。

机にひじを立てて、うつむかないように手のひらに顔を乗せる。ただ黒板の辺りを見つめていた。

千鶴の席は教室の最後列。注目されにくい位置にいるのは幸運だ。誰とも目を合わせなくて済む。

斜め前に座っている女生徒が、チラリと千鶴のほうを見た。目が合うと、慌てて前に向き直る。

たしか、西村さんだ。記憶の中のほとんど使わない部分、クラスメイトの名前をようやく引っ張り出す。いつもおとなしくて、一人で本を読んでいる姿を良く見かける。自分と良く似たタイプだと、千鶴は勝手に思っている。千鶴と違って友達がいなわけではないと思うが。

まさか、彼女が？

千鶴は疑心暗鬼に駆られた。そんなわけがない。たまたま後ろを振り向いただけだろう。それで偶然、自分と目が合った。それだけで疑うなんて、よくない。

でも、この中の誰かがやったんだ。

そう考えると、教室中が敵のように思えた。今までは『その他大勢』でしかなかったクラスメイトたちが、千鶴を貶めようと結託する悪人の群れに見えてくる。

一時間目の授業が終わるまでは教室に居た。それ以上は、耐えら

れなかった。目に見えない悪意が圧迫してくるようで、休み時間に教室を出た。その日はもう、教室に戻らなかった。

カバンの中に、すべての教科書とノートを詰めてある。気にしない風に装っていても、また明日もあんな落書きがされていたらと思うと、怖かった。

歴史の教科書は悩んだ末に、コンビニのゴミ箱に捨てた。誰のものかわからないように名前の書かれた部分は切り取って。

新しいものを買うお金もないし、叔母さんにも相談できない。これから歴史の授業がある時は教科書なしで受けなければならない。友達なんていないから、誰かに借りることも出来ない。先生になんて良い訳すればいいんだろう。一度や二度なら見逃してくれるかも知れないけれど、卒業までずっとは、きっと無理だ。

それに、エスカレーターしたらどうしよう。昨日はノートの半分。今日は教科書。明日はわからない。学校へ行くのが怖い。もつと酷い目に遭うかも知れない。今度は耐えられないかも知れない。逃げ場もない。助けてくれる人もいない。

どうして私がそんなことを考えないといけないの？ 私は、悪くないのに。どうしてこんな目に……

千鶴は溜め息を吐いた。自分を憐れんだところで、誰かが助けてくれるわけでもない。どうすればいいだろう。

何気なく携帯電話を開いた。電話帳の登録件数は五件しかない。叔母さんと、自宅と、良く使う美容院と、ゲーム屋と、本間修一。

千鶴はためらいながら修一に電話を掛けた。頼れるのは彼だけだ。他には誰も彼女の心配なんてしない。

修一は四年前まで千鶴の高校に通っていた。ひよっとしたら、当時の教科書をまだ持つてるかも知れない。

三度目のコール音が鳴る。まだ修一は出ない。

四度目。気付かないのだろうか。

五度目。ひよっとして、忙しくて出られないのかも知れない。

六度目。もうそろそろ切った方がいいのかな。しつこいと思われ

るかも。

七度目。やっぱり切ろう。それに、何て話したらいいのかもわからない。

その一瞬の躊躇の間に、電話のコール音が止まった。

「もしもし？」

電話越しに修一の声が聞こえてきた。何て言おう。何を言えはいんだろう。

心臓がどきどきした。言葉に詰まってしまふ。

「千鶴？ 何だ、聞こえないぞ」

「歴史の教科書、持ってる？」

用件だけを短く伝える。一度言葉を発すると、心臓が落ち着きを取り戻したように鼓動が正常に戻っていく。

大丈夫だ。自分はいつもと変わらない声で、いつもと同じように話せている。

「なに？ 歴史の教科書？ 何の話だよ」

「そう。歴史の教科書。世界史A。高校で使うやつ。持ってる？」

「持ってるって……多分持ってるな。教科書は一応、全部取ってるし。それがどうかしたのか」

「ちようだい」

「はあ？」

「ちようだい。お願い。ダメ？」

「いや、ダメじゃないけどよ……でも、四年前に使ってたやつだぞ？ 今って教科書変わってるんじゃないの？」

「大丈夫、多分きつと」

そこまで考えていなかった。とりあえず世界史の授業中、教師の目を誤魔化せばいい。どうせ、教科書に載っている内容がどんなものだろうと、千鶴がそれを覚えることはない。

「だから、ちようだい。タダとは言わない」

「いくら出す？」

「五十円までなら」

「いらねーよアホ。学校終わったら取りに来いよ、探しとくから」
電話を切ると、千鶴はほっと息を吐いた。

本当は今すぐにでも行きたかったが、きつと色々聞かれるに決まってる。こんな時期に学校をサボったなんて言ったら、心配させてしまっただろう。

それに、これ以上甘えるわけにはいかない。

制服のまま歩き回っていたら怪しまれる。人通りの少ない道を選んで進んだ。夜まで歩き回っていればいい。

寒いのは辛いけど、その程度の辛さだったらいくらでも耐えられる。本当に辛いのはそんなことじゃない。

修一と電話をして少しだけ気が楽になったが、憂鬱とした思いは簡単には拭えなかった。

不採用を通知する封筒が三通。全部まとめてゴミ箱に捨てる。もちろん、採用を告げる郵便は一枚も来ない。

「どいつもこいつも俺の魅力がわかってない。くそ、こうなりや狭い日本は捨てて世界進出でもするか」

ぼやいてみたところで、ストレスが軽減されなかった。それどころか、ツツコミの入りようがない一人で言っても、むなしいだけだ。昼前に千鶴と電話をしたつきり、やることもない。夕方まで店を開いていたが、その日の来客は二人だけだった。

スーツ姿の二人組みだったが、特に親しい仲でも無さそうだった。二人は黙々で食事をして、金だけ払うと無言で出て行った。

店を閉じると、建物の裏にある物置に向かった。使わなくなったものは手当たり次第に詰めて、物置へ放り込んである。高校時代の教科書も、きつと中にあるはずだ。

物置の中はかび臭く、チリや埃が層を作っている。物を動かそうとすると埃が舞った。

修一はむせ返りながら、物置の手前からダンボール箱を引きずり出した。すでに外は薄暗くなってきた。

明かりの下まで持つていかないと中身も確認できない。店の軒下までダンボールを運ぶ。

「おー、懐かしい」

中を開けてみると、小さい頃に修一が使っていたオモチャが次々と出てきた。変身ヒーローのベルト、怪獣の人形、ロボットに変形する車。オモチャを取り合って幸司を泣かせたことを思い出して、つい口元がほころんだ。

「うわ！ RXだ、こんなの持ってたなあ」

気付けば三十分ほど、詰められたオモチャをいじって遊んでいた。こんなことをしていたら、朝になってしまう。

まだ昔を懐かしむような年でもないと自分に言い聞かせて、出したオモチャをすべてしまった。

目的の教科書探しを続ける。何でも取っておく母の悪癖のおかげで、物置にはガラクタが溢れていた。

車輪の外れた自転車なんて、どうして置いてあるのだろうか？

たしか教科書類は、中学、高校とまとめて一つのダンボールに詰めた記憶がある。それらしいサイズのダンボールを抱えて、店の玄関先に積み上げる。

「何やってんの？」

幸司が好奇の目で兄を見た。制服のままで、手にはカバンを持っている。学校から戻ってきたところなのだろう。

「おう、おかえり。お前もちょっと手伝ってくれよ。探し物」

「いいけど、何を？」

「教科書。俺が高校時代に使ってたやつ。世界史Aだってよ」

「はあ？　なんで今さら？」

小さなダンボール箱の中からもう集めなくなったマンガの単行本が出て来た。

「やつべ、これも懐かしいなあ」

つつい手を止めて読み出してしまふ。今も週間雑誌で連載されている漫画の一卷目だった。表紙が色あせて、ページも変色している。

「げ、これ始まったの十五年前かよ。俺小学生だったもんなあ……しかも絵がヘタクソだな最初」

「兄ちゃん、探し物してるんじゃないの」

「そうだった」

誘惑を押さえ込んで、入っていたダンボールへと戻す。ただし、後で読むためにその箱だけ別にわけておいた。

「あのさ、歴史の教科書なんて何に使うの？ 僕のなら部屋にあるけど」

「それじゃダメなんだ。よくわからんけど、千鶴が欲しがっててさ」その名前を聞くと、幸司は少しだけ表情を曇らせた。深く追求しようともしない。なるほど、と小さく呟いた。

「学校終わったら取りに來いって言つといたから、多分もうすぐ來ると思うんだ。だからさっさと見つけないと」

どうやら手伝ってくれるらしい。幸司は店の中にカバンを置くと、物置へと向かった。

「幸司さあ、最後に千鶴に会ったのいつよ」

小さなプラスチックのケースを引っ張り出して來た。中身を点検する弟に、修一は聞いた。

「最後……何年前だろ。覚えてないよ、もう」

幸司は昔から千鶴との仲が良くなかった。他人というほどの仲ではないが、幼馴染と呼ぶには距離がありすぎる。

小さい頃は良く三人で遊んでいたのに、幸司と千鶴は中学に上がる頃には話しもしなくなっていた。同い年で異性の幼馴染だと、やはり親しくするのは気恥ずかしいのかも知れない。

修一は中学になっても高校になっても、千鶴と二人で遊びに行くこともあつたし、それに対して何かを思うこともなかった。

「あ。あつた」

何個目かのダンボール箱を開けると、中からたくさん教科書が入っていた。世界史Aの教科書は一番上に乗っている。

「見つかった？　じゃあ僕はもう戻るね」

「何だよ、片付けるのも手伝ってくれよ」

「夕飯の準備しないと。母さん一人に任せちゃダメでしょ」

どうせ千鶴と顔を合わせるのが気まずいだけだろう。

口には出さないでおいた。人間関係なんて誰かに言われて直すものではないし、親しくなれないなら無理にそうする必要もない。

すべてのダンボールをしまい終える頃には、すっかり辺りが暗くなっていた。

寒さに身を震わせて、店に戻ろうとする。玄関近くに人影が見えた。暗くてはつきりとは見えないが、千鶴ではない。身長が違う。

近付いて見ると、山高帽をかぶったスーツ姿の老人が立っている。杖を地面に突いているが、腰は曲がるどころか背筋はピンと伸びて、まるで軍人のような立ち方だった。

どこかで覚えがあるが、思い出せない。老人は、じっと『ラーメン超壱』の看板を見上げている。

「あの、何か用ですか？」

背後から声を掛けると、特に驚いた様子もなく老人が振り返った。身長は修一よりも少し大きいくらいだ。

日本人じゃない？　青みがかった瞳を見て、修一は思った。柔和な微笑みを浮かべているが、これで不機嫌そうな顔をしていたらかなりの迫力があるだろう。

「用事？　そうだな、キミに用があつて来たのかな」

「俺？　……えっと、すみません、どこかで会ったことありますよね」

どうしても思い出せなかった。小学校時代の教師？　クラスメイトの親？　それとも親父の知り合いだろうか？

「いいや、もういいんだ。どうやら私の思い過ごしだったようだ」

老人はそう言って、嬉しそうに笑った。

「もう会うこともないだろう。お邪魔したね」

帽子を手で抑えて、軽く一礼する。

そつだ、思い出した。あまりにもイメージが違いすぎてわからなかったが……

「シユウちゃん？」

背後からの声に振り返ると、千鶴が立っていた。寒そうに身を縮めている。

「一人で何やってるの？」

「え？」

周りを見渡すが、千鶴しかいない。

「何って……」

何をしていたんだっけ？

思い出した直後に忘れてしまったような、言いようの無い不快感が残る。

「お前が今さら教科書が欲しいとか言うから、探してたんだよ。感謝しろ、感謝」

物置の片付けも終わったから、寒いし家に帰ろうとしたところだった。何かを忘れた気がしたが、忘れるくらいなら重要でもないだろうと、自分を納得させる。

「ありがとう。とってもありがとう」

「誠意って言葉知ってるか？」

軒先に置いていた教科書を拾い上げ、土を払う。

「見つかったけど、こんなもの貰ってどうする気だ？」

「前使ってた教科書、失くしたの。だからコレで誤魔化す」

カバンの中に世界史Aをしまいながら、千鶴が言った。

「失くしたって……どうやって教科書なんて失くすんだよ。足でも生えて出て行くのか？」

「そんなわけないじゃん。バカなの？」

「お前泣かすぞ、生意気な」

千鶴が少しだけ笑った。

「何したんだか知らないけどよ、もう失くすなよ。次に教科書失くした、なんて言ってもやらないからな」

「うん。ゴメン。ありがとう」

そこで少しだけ、会話が途切れた。二人の吐く白い息が、冬の冷たい空気に混じって消える。

「寒いな。中入るか？ 不味いお茶ぐらい出すけど」

すぐには返事が返って来ない。少しうつむいて、何かを躊躇っているようだった。

「うん……でも、今日は、いいや」

「そっか。ああもうこんな時間だしな」

時計を見ると、七時を過ぎていた。

「おばさんが心配するだろ、早く帰れよ」

千鶴が頷いた。その時になってようやく、彼女の顔色が少し悪いことに気が付く。

掌を彼女の額に当てる。冷たい。ビクリと千鶴が体を引いた。

「なに」

「顔色悪いから、熱でもあるんじゃないかと思ったんだよ」

「ないよ。びつくりするからやめて」

「あつそ。悪かったな。帰ったらちゃんと暖かくして寝ろよ」

「子供じゃないんだけど」

「わかったわかった」

千鶴は不満そうな表情だった。何かを言いたそうな顔をして、それでも黙っている。

「どうした？ 送って欲しいのか？」

「そんなんじゃない」

「じゃあ、なんだよ」

何も答えずに、千鶴はむつつりと黙り込んでいた。

しばらく黙っていたが、何も言うつもりはないらしい。

「やっぱ熱でもあんのか？」

「何でもない。大丈夫だから。ありがとう。じゃあね」

短く別れの言葉を告げると、小走りで離れていく。修一はその後姿が見えなくなるまで見送った。

天井が高く、広々とした工場。それなのに、妙に圧迫感があるのはなぜだろう。

もう十一月だというのに、暑い。暖房の効き過ぎた工場内での勤務。真赤になった顔に汗の粒が浮き上がる。こんな季節に熱中症にでもなったら、笑えない。

「なあ本間くん、きみ、いくつだっけ？」

竹中が尋ねた。頭のとっぺんには綺麗な円形のハゲが出来ている。短足で低身長、丸々とした腹を作業着に押し込んだ、妙に愛嬌のある人物だった。

「二十一っす。早生まれなんで、一月で二十二ですけど」

「うわ、若いね。羨ましいわ。何かやりたいこととかあんの？」

一抱え二十キロ程もあるブリキ缶を軽々と二つ持ち上げて、竹中は続ける。修一も体力には自信があるほうだが、二十キロの物体を何度も持ち運ぶのは、一苦勞だった。

「いや、特に今は」

息が上がる。余計に疲れるから黙ってて欲しかったが、余裕のある表情で竹中は喋り続けていた。

「まあ若い時は好きなことやってた方が良いよ。でないと僕みたいに大人になってから後悔するし」

二重になったアゴを震わせながら、ケラケラと笑った。修一は笑っていられるほど余裕もなく、無理矢理浮かべた愛想笑いは引きつった。

業務用のコピー機に入れる、大型のトナーを製造する工場での仕事。何十社と受けて、採用通知が来たのはこの工場だけだった。

勤務時間は夜から朝まで。節約すれば何とか食っていけそうな

給料。求人広告で見た時は、仕事も楽そうだと思った。

運ばれてくるブリキ缶を種類ごとに並び替え、古い物と入れ替える。大半の作業はフォークリフトで行うのだが、一つ一つの細かい並び替えは人間が手でやらなければならない。

考えが甘かった。何度も何度も重量のあるブリキ缶を持ち上げて運ぶ作業は、両腕も足も痛いし、腰にも疲労が溜まる。

「よいしょ」

竹中は軽く声を出すと、缶を落とさないように指定された場所へ降ろす。

修一も抱えた缶を降ろそうとする。足元がふらついて、危うく倒れこみそうになった。真後ろにはフォークリフトが走っている。ただでさえ重いものを抱えているのだから、下手をしたら大怪我だ。

修一の指導を担当する竹中は、勤務中に疲れた素振りすら見せなかった。その弛みきつた体のどこにそれだけの体力が隠されているのか。年齢も四十近いと話していたが、とてもそうは思えなかった。根性がないと思われるのはイヤだ。そう思い必死で働いたが、勤務が終わる頃にはフラフラになっていた。

「お疲れ様。いやあ、疲れたね」

竹中はそう言いながらも余裕の笑顔を浮かべている。人は見かけによらないと強く思った。

「この仕事さ、すぐに辞めちゃう子が多いんだよね。本間くんはなるべく長く続けてもらえると助かるなあ」

咄嗟には返事が出来なかった。これだけキツければ、誰だってすぐイヤになるだろう。

「だけど、母と幸司のことを思えば、音を上げるわけにはいかない。大丈夫です。家族を食わせていかなきゃならないんで」

「え！？ 結婚してるの？」

「いや……違います。母と、弟です。親父が死んだもんで」

「あ、なるほど」

竹中は聞いてはいけないことを聞いたと思ったのか、神妙な顔付

きをした。だがその顔は崩れたブルドックみたいでおかしかった。工場勤務の終わる時間は、朝の七時。家に帰ってから、ゆっくりと眠ってしまったかった。だが、十一時にはラーメン屋を開店させなければならぬ。

下ごしらえなどの準備は、学校に行く前に幸司が終わらせてくれていた。それでも、二時間程度の仮眠しか取れない。

店を開いている時間、何度も飛びそうになる意識と戦いながら（途中、何度も敗北した）十八時までは耐える。

店を開くのはその時間までと決めた。それから四時間眠って、二十三時からの夜勤に出掛ける。ほぼ一日中働き詰めになるが、ラーメン屋では客が来ない間はいくらでも居眠りが出来るので、何とか耐えられた（客が来ないことを喜んでいる自分に嫌気は差した）。とにかく、二年だけは我慢だ。そう覚悟を決めて、修一は働き続けることにした。

面倒な誤解を受けるのが嫌で、体育が一時間目にある月曜日と水曜日だけは遅刻をしないようになった。

先週引いた風邪が治っていないので、体育の授業は見学をした。一日中外にいたのが、やはりマズかったらしい。

「見学をさせてください」と千鶴が言うと、体育教師は理由すら聞かなかった。サボりの常連だったから、きっとまたそうだと思われるているのだろう。

相変わらず誰も千鶴とは目も合わせようとしない。それでも、この前のようにじろじろ見られるよりは、ずっとマシだ。

まだ何人かは千鶴を軽蔑するような目で見て来たが、授業中は我慢すればいいし、休み時間は適当にぶらぶらと時間を潰せばいい。そうして一人でいれば、誰かに煩わされることがない。

例の落書きも、今のところはエスカレートせずに止まっている。

それでも、いつまたあんな目に遭うのかと思うと恐ろしい。

放課後になると、重苦しい圧迫が少しだけ解かれる気がした。わざわざ帰り道に千鶴を気にする人間はいない。だから安心して帰れる。そう思っていたのに、例外が三人だけいた。

「ねえねえねえねえ、二組の井上さんでしょ？」

突然声を掛けられて振り向くと、あの女たちだった。いつも一緒にいる三人組の女子高生。名前は知らない。

金髪と茶髪と茶髪。三人の区別がいまいち付かない。同じようにケバケバしい化粧をして、背格好も似ている。

「なに？」

不機嫌さを隠しもせずに千鶴は言った。いつもバカにしている人間に、良く平気で話しかけられるものだ。相手の気が知れなかった。「こないださあ、男と一緒に居たでしょ？ 駅前の潰れかけのカフェに。なにに、カレシなの？」

見られていた。よりによってこんな連中に。

心拍数が跳ね上がる。頬が熱を帯びるのがわかった。

動揺を悟られないように言うが、声が上擦ってしまう。

「別に、ただの知り合いだけど」

「ただの知り合い、だって！ 超ウケるんですけど！」

何が可笑しいのか、茶髪の一人がゲラゲラ笑っている。三人が前を塞ぐように位置を移動していたので、立ち去ることも出来なかった。

「あなたたちには関係ないじゃない」

「ないね、ないけど。教えてくれたって良くない？ 楽しいじゃんそういうの」

私は楽しくない。

反論する気さえ起きず、溜め息だけが漏れた。

バカにして遊ぶ対象が誰かと一緒に居た。それだけで彼女たちにとっては愉快な話しのタネになるのだろう。

楽しいから。それだけで他人をバカにして、楽しいから他人のプ

ライバシーに平気で踏み入ろうとしてくる。

自分たちにとっての楽しみが最優先で、相手の心なんて考えよう
ともしない。

傷付いた様子を見せるのは余計に彼女たちを笑わせるだけ。

だから、千鶴は何も感じない風に装った。

「どいてよ、私急いでるんだから」

「え？ デート、今日も？」

一番背の低い、ビーバーみたいな顔の女がバカにするように言っ
た。良く見ると彼女だけ不細工だった。

「そっか、どおりでいつも一人で居るわけだよね、カレシさえいれ
ば他には誰もいららないんだ」

三人が一斉に笑う。

修一といた時間は、久々に楽しいと感じられた。それなのに、そ
んな些細な幸せですら踏み躪られる。

イライラしながら、無理矢理彼女たちの間を通り抜けて駆け出し
た。これ以上関わっていたくない。

千鶴の背中に、誰かが言葉を投げかけた。

「彼女が泥棒だって知ったら、彼氏どんな顔するかなあ」

足が止まった。今までどんなにけなされても、面倒臭いからいつ
も無視してきた。そんなのは一瞬で過ぎ去ってしまうことだ。

終わってしまったえば、言った本人も言われた本人も忘れてしまう。

だから、いつも無視してきた。

「教科書も新しいの買わなきゃいけないもんねえ、お金ないんでし
よ？」

誹謗と中傷だらけの教科書。捨ててしまったのを、どうして彼女
たちが知っているのだろうか。

「両親居ないんだって？ 金に困ってるんなら、あたしらがもつと
稼げる方法……」

千鶴はそれ以上耐え切れなくなり、走ってその場所を離れた。な
んであんな連中に、ここまで言われないとならないのだろう。ただ

放っておいてくれれば。それで良いのに。

背後で三人が、大声で笑っていた。

腹が立って、我慢出来ない。殴ってやりたいとさえ思った。

それだけ怒っているのに、行動に移せない自分の臆病さにも余計に腹が立つ。

前も見ないで走った。途中、誰かに勢い良くぶつかり、倒れこんでしまう。

「おっと……悪いね、大丈夫かい」

尻餅を付いて倒れた千鶴に、男が手を差し伸べた。千鶴はその手を取らずに立ち上がると、カバンを拾ってスカートに付いた砂埃を払う。

そこまでしてから、謝ろうとして男の顔を見る。

禿げ上がった頭に、釣り上がった両目。太り気味の肉体をスーツに押し込んだ男。

獲物を追い詰めた肉食獣のような笑顔を浮かべている。何日か前に、本屋の前で見かけた男だった。

恐怖のあまり、言うべき言葉も忘れてしまった。ただ掠れたような声が、喉の奥から漏れる。

「う、ごめんなさい」

ようやく言葉を搾り出すと、また慌てて走り出す。

走り続けたのと怖かったので、心臓がバクバクしていた。

やがて落ち着いてくると、またあの三人の声が脳裏に蘇った。いくら忘れようとしてもダメだった。あざ笑うような声がこびり付いて離れない。

誰もいない家の中。静まり返った空間。

散らかった部屋の中で、布団にうずくまる。泣くのは嫌だ。自分を哀れんで泣いているなんて、想像するだけでイライラする。

何も考えずに目を閉じていた。このまま眠ってしまえばいい。夢の中では悲しいことは起こらない。

夢の中なら、現実を忘れられる。誰の嘲笑も聞こえない。悪夢は

悪夢でしかない。目を覚ますまでの彼女だけの世界。現実から消え去れる大切な時間。

そのまま本当に消え去ってしまえたら、どれだけ幸せだろう。目を覚ますと、窓の外は暗くなり始めていた。

昨日は綺麗な夕焼けだったが、今日の空はどんよりと曇っている。まるで彼女自身の心を映しているようだ。

時間を確認しようと、携帯電話のディスプレイを開いた。画面の光が目痛い。時刻は十六時二十分。新着メールが二通来ていた。

またスパムメールだろうか。メールを開いて確認すると、一通目は佳代子おばさんからだった。

「今晚は帰りが遅くなるので、夕飯は何か買って食べておいってください」

返事を出そうか考え、やめた。どうせ事務的な連絡のやり取りだ。必要は無いだろう。

リモコンを取ってテレビの電源を入れた。静か過ぎると、またイヤな考えばかりが浮かぶ。若手のお笑い芸人が楽しそうな笑顔で話していた。千鶴は少しも笑う気分になれなかった。

テレビの音を聞き流しながら、もう一通のメールを確認する。登録していないメールアドレスだ。いや、メールアドレスの欄が意味を成さない文字の羅列になっている。

「何、これ？」

壊れたのだろうか。不思議に思い、メールの内容を見ると、ただ一言「机の上」とだけ書かれていた。

机の上。自分の勉強机だろうか。わけもわからず、千鶴は立ち上がり、机へと近付いた。

ただの散らかった机。電源を消し忘れたノートパソコン。読みかけの漫画雑誌、良くわからないチラシ。やろうと思って諦めた宿題のプリント。食べかけのお菓子。

その中に似つかわしくない、色鮮やかなオレンジ色の封筒が置かれていた。手に取り、裏返してみても、宛名も何も書いていない。

封を破り中を開くと、一枚の便箋が入っていた。

工場での仕事にもようやく慣れ始めた。体力が付いたのだろうか、今日は数時間の仮眠だけで、昼間も頭がすっきりとしていた。

今なら、親父に負けないラーメンも作れそうな気がする。客が来ないので試す機会は無かったが。

「ねえ修一、お母さん懐かしいものを見つけちゃった」

店の奥の階段から、母が降りてくる。やけに楽しそうだった。

珍しい。病弱な母さんは、昼間でも寝ていることが多い。今日はずいぶんと体調が良さそうに見える。

「俺、仕事中なんだけど」

「良いじゃない、お客さんなんて来ないんだし」

「わかってても黙っとけよ、そういうことは」

店として立ち行かない状態だというのに、母は全く危機感が無い。修一に店を継ぐように強く説得したのは母さんなのに。いまいち

釈然としないものを感じていた。

「客来ないんだから、店畳んだって良いじゃないか」

「ダメ。このお店は開いてることに意味があるの」

「店潰せばみんな楽できるのに？」

「それでもよ。継続は力なりって言うでしょ？」

確かに言う。だがこの場合適切な言葉かどうかは、修一には判断できなかった。

「そんなことより見てよ、ほら」

家庭の危機をそんなこと呼ばわりする母。慣れきってしまい、もはや言葉を返す気にもなれない。

子供のように後ろ手に隠していた本を見せる。ビニールの光沢の、赤い表紙の本。

「何？ アルバム？」

「修一と幸司の小さい頃の写真よ。あの頃は、こんなに可愛かったのにねえ」

わざわざそんな物を見せに来たのかよ。苦笑しつつ、心の中でだけ呟いた。

開店した日の写真を母は眺めている。店の前で撮った一枚の写真。両親は幸せそうに笑っている。

親父と手を繋いでいる修一は素知らぬ方向を見ていた。母の腕に抱かれた幸司は目を瞑っていた。眠っていたのだろう。

母さんがアルバムのページをめくると、次々と懐かしい写真が出てくる。修一もおぼろげにしか覚えていない、昔住んでいた家や、店が開店したばかりの写真が多かった。

アルバムの後ろの方で、綺麗な海と砂浜の写真が現れた。

「あ、ほらこれ、沖縄行った時の写真」

波打ち際で遊んでいる三人の子供。修一と、幸司と、千鶴だ。

「千鶴ちゃんも連れて行ったのよね、懐かしい」

本間家と井上家は、随分と昔から家族ぐるみの親交があった。親父と千鶴の父が学生時代からの親友だったらしい。

沖縄旅行のことは、まだ覚えている。たしか、修一が九歳の頃。十二年前だ。井上吾郎と、妻の千絵子が交通事故で他界してから、一年後。

「まさか、千鶴ちゃんが亡くなっちゃうなんてねえ」

親父も母さんも千鶴を自分の子のように可愛がっていたから、こ
とあるごとに面倒を見ていた。家族旅行に行く時は、千鶴も一緒だ
った。修一も両親に習い、暇さえあれば千鶴を遊びに連れ出したし、
用が無くても呼び出して一緒に居た。勉強も見てあげた。両親を同
時に亡くした千鶴に、子供心に同情していたのかも知れない。

昔のことを思い出したのか、母さんは少しだけ涙ぐんでいた。修
一は気が付かないふりをした。

「お母さん、上に戻るね。仕事の邪魔しちゃ悪いし」

「どうせ客なんて来ないじゃないかよ」

「それでもよ。真面目に働きなさい。お父さんとお母さんが頑張つて開いたお店なんだからね」

「はいはい、そうですね」

また一人になったところで、何もすることが無い。

いつものように、店に備え付けのテレビを見ていた。

歌手が離婚したあの、芸能人の不倫騒動だの、くだらない番組をだらだらと眺める。

時計を見ると、時刻は十二時半。客が来るならこれぐらいの時間だ。一時を過ぎて来ないようなら、その日の来客は見込めない。

ふと、違和感を覚えた。

何かがおかしい。しばらく腕を組んだり、頭を捻ったりするが、思い出せない。でも、何かがおかしい。

思い出したはずの出来事が消えてしまう感覚。ここ最近、何度も同じことを感じている。

ガラリ、と、音を立てて立て付けの悪い戸が開くいた。思考を中断され、向き直る。

「なんだ、お前か」

入り口に軽薄そうなにやけ顔の男が立っている。直接会うのは半年ぶりぐらいだろうか？ 相変わらず何が楽しいのか、いつもへらへらと笑顔を浮かべている。

「なんだ、はひどくないっすか、先輩」

黒田徹平はへらへらと笑いながら言った。

「客かと思つて期待したのに」

「俺だつてお客様ですよ。お客様は神様ですよね」

「うるせー、帰れ。塩撒くぞ」

そう言いながらも、修一は懐かしい顔に会つて頬がほころんでいく。

「いやいやいや、シュウさんがたまには店に来いって言ったんじゃない」

そつといえば、電話でそんな話しをした気がする。本当に来るとは

思っていないかった。

修一は仕方なく立ち上がると、厨房に立った。

「わかったよ、特別に俺が腕を振るった料理を食わしてやる。何が良い？」

「じゃあ、チャーハン」

「うちはラーメン以外のメニューはない」

「なら聞かないでよ」

手際良くラーメンを作り始める。素人がはたから見ていると、若いながら腕の立つ職人に見えるだろう。無駄のない動作で麺を茹で上げ、程よく熱したスープを入れ、具を盛り付ける。刻んだねぎをバランス良く加え、短い時間で美味しそうなラーメンが出来るのだ。

「シウウさん、これ何か色々足りてない気がする」

一口食べてから、黒田が言った。へらへらと笑いながら続ける。

「わかりやすく言うと美味しくないっていうか。不味い」

「お前な、そういうのは面と向かって言わないだろ、普通」

「あ、麺と面を掛けたんすか？ うまいっすね先輩。いや不味いっすけど」

「泣かすぞこの野郎」

同じようなことは、散々言われてきた。

『作り方間違えてるんじゃないの？』『親父さんのラーメンは美味しかった』『年季が違ふよ、熟練すればもっと上手になる』

父の手伝いをしていた時からそうだった。金を取らずに常連客にだけ修一が作ったラーメンを食べさせたことが何度かあるが、みんな似た反応を示した。いつも父は、何が悪いかは教えてくれなかった。

「こんなところで不味いラーメン食ってるヒマがあったら、バンドのメンバー探した方がいいんじゃないか」

「ま、そっちはなんとかなりそんな感じで。俺以外のメンバーも知り合いに掛け合ってますし。それに、新メンバーが見つからなかつ

た時の助っ人は目処が付いたし」

「ふうん」

「シユウさんは最近どうなの？ この店、繁盛してるんすか？」

「わかつて聞いてるだろ」

「もちろん」

黒田はへらへらと笑った。空気を読まずに突っ込んだ質問をしてくる奴だが、常に浮かべている笑いと生来の人の良さで、誰からも嫌われることのない男だった。

話を聞きながら（時々味に文句を言いながら）黒田はラーメンをスープまで飲みきっていた。

食事を終えた後も、客が来ないのいいことに二人は話し続けた。いた。

高校の頃も、よく日が暮れるまで話し込んでいた。修一や黒田をはじめとする仲の良いメンバーだけで、いつまでも部屋に残って。

あの頃は本気で歌手になりたいと考えていたかも知れない。

お互いに近況について話しているうちに、千鶴から聞いた話を思い出す。

「そうだ、駅前の本屋あるだろ？ あのずっと潰れそうだったやつ。あそこのじいさん去年死んだんだってさ」

「へえー。何十年もくたばらないと思ってたのになあ」

街の子供たちにとって「本屋のジジイ」は恐怖のタネだった。年齢は八十を超えている、と十年前から言われていた。ハーフだかクオーターだとかで、日本人離れた長身、彫りの深い顔にもじやもじやのヒゲ。ガラス玉のような目。ぶすつとした顔に直立不動の姿勢でカウンターに立っているのだ。怖くてたまらない。

「そっぴや、何でしたっけあの子、千鶴ちゃん？ あの子も亡くなったの去年くらいですよ」

予期していない名前が突然出て来る。修一が不可解な顔をしたことに気付かなかったようで、黒田が続ける。

「田中いるじゃないですか。あいつんちもおじさんが去年の春に亡

くなつたらしいですよ。なんか、厄年つてやつですかね、去年は」

「田中は知らないけど、千鶴がいつ死んだんだよ」

「え？ ほら、二組の田中ですよ。シュウさんの一個下。メガネ掛けててガリガリの。ホネカワつて一時期呼ばれてた」

「そっちはどうでもいいんだよ。千鶴だよ千鶴。勝手に殺すな、アホか」

修一が少しだけ不機嫌そうに言うと、黒田は困つたように首をかしげた。

「あれ、すみません間違えました？ 井上ナントカちゃんですよ」

「俺の知ってる井上ナントカちゃんとは千鶴しかいねーよ。バカな冗談言つてると殴るぞ」

「え、マジっすか？ おかしいなあ。俺、誰かと間違つてんのかも」

「だいたい、本屋のじいさんの話しだつて、千鶴から聞いたんだ。死んでるわけない……」

さつきまでの母さんとの会話が、突然頭をよぎつた。

なんと言つていた？ 千鶴が、亡くなった？ 確かに母さんはそう言つた。いや、言つた気がする。

何故その言葉を聞き流したのだろう。

「お前も帰れ」

「ちよつと怒らないでよシュウさん。マジで間違つただけなんだから」

「違つて、怒ってるわけじゃない、急用思い出したんだよ」

黒田を追い返してから、店の奥にある階段を上がつて実家へと戻る。店は放つておいても問題ない。どうせ客なんて来ない。

母は居間で雑誌を読んでいた。慌てて駆け上がつて来た修一を、不思議そうに見ている。

「あのさ、母さん……」

何と言えはいいのだろう。まさか、「俺、この前千鶴と会つたんだけど、あいつ死んでないよね？」とでも聞けばいいのか。

バカバカしい。きつと聞き間違いをしたのだ。亡くなつたのは、

千鶴の両親だ。

ついこの前、千鶴と再会したばかりだ。それは間違いない。死んでるはずがない。

間違いない、はずだ。

「ん？ どうしたの？」

「いや、さつき……話してたじゃん。千鶴のこと」

修一が言葉に詰まっていると、母が言った。

「うん、そうね。アルバム見たいの？」

「そうじゃなくて、千鶴が、ほら……」

上手い言葉が見つからない。

ただ避けているだけかも知れない。その言葉を口に出すことを。

「なあに？ 思い出したら、悲しくなっちゃった？ まだ、一年だもんね、千鶴ちゃんが亡くなってから……」

からかっているようには見えない。母さんは悲しそうに微笑んでいた。

心臓を締め付けられるような、不愉快な痛みが走る。修一は無意識に胸を抑えた。

千鶴が亡くなった？ 一年？

そんなわけがない。バカげている。冗談でもそんなことを言うのはやめてくれ。

だが、否定の言葉は、一言も発することができなかった。

母が正気であることは疑わなかった。

正気を失ったのは、むしろ自分かも知れない。

千鶴が亡くなった時の記憶が、確かにあった。

はつきりとは覚えていない。去年の夏だ。母が電話で伝えてくれた。千鶴が交通事故に遭った、と。

電話越しで、母はきつと泣いていただろう。実の娘のように可愛がっていたのだから。

その日、自分は泣いたのだろうか。

地元の友人も、何人か心配して電話を掛けてくれた気がする。誰

が初めに電話をくれたんだろう。思い出せない。

修一はその時、まだ東京に居た。父が亡くなってから、数ヶ月しか経っていない。自分の周りで立て続けに人が亡くなるなんて、想像したこともなかった。

どうして葬式に参加しなかったのかはわからない。仕事を抜けられない用事があったのかも知れないし、単に千鶴の死を受け止めたくなかっただけかも知れない。

二ヶ月後、修一は東京の仕事を辞めて実家に帰った。

一度も千鶴の墓には行かなかった。仏壇に線香を上げにも行かなかった。

彼女のことを、思い出そうとしなかった。

その日の夜、修一は仕事を休んだ。職場には、風邪を引いたと電話を入れた。

もちろん嘘だ。中学校以来、風邪は一度も引いていない。

考えがまとまらない。千鶴は一年前に死んだ。つい先日、死んだはずの千鶴と再会した。その時にはただ懐かしいとしか感じなかった。当たり前だ、彼女は死んでなんかないのだから。

だったら、彼女が死んだことを覚えているのは何故だ？　いくら考えても、何もわからない。

結局一睡も出来ないまま夜が明けた。朝になるとすぐ、誰にも行き先を告げずに家を出た。

オンボロの原付にまたがり、車通りの少ない車道を走る。途中で右折し、並木道と家々で挟まれた道を進む。

木々の立ち並ぶ右手側には、柵を挟んで道路よりも低くなったところに川が流れている。五十年以上前に、用水路として作られた川だ。昔は泳げるほどに綺麗だったらしい。用水路としての役目を終えた今は、生活排水とゴミですっかり汚れてしまっている。

十五分ほどバイクを走らせたところで、目的地へと辿り着く。裏道に入っすぐ。標準的な大きさの、二階建ての家屋。

クリーム色の壁は、昔見た頃に比べて少しだけくすんで見えた。庭は小奇麗に片付けられていたが、芝生が無秩序に伸びている。

こげ茶色の表札には、丁寧な字で「井上」と書かれていた。

腕時計を見る。七時十分。流石に早すぎる。だが不安でじつとしていられない。辺りをうろつくと歩き回って時間を潰した。時間が流れるのをこんなに遅く感じたのは初めてだった。

駅前まで歩き、商店街を一周して、自宅の前を何度も通り過ぎ、また彼女の家まで辿り着く。

十時二十分。土曜日の朝とはいえ、この時間なら大丈夫だろう。

修一は苦い思いで笑った。相手への迷惑なんて、子供の頃は考えもしなかった。

チャイムを鳴らし、しばらく待つ。返事はない。もう一度チャイムを鳴らした。やはり返事はない。

舌打ちすると、昔のように直接玄関を叩いた。相手に迷惑だとか失礼だとかは、考えなかった。

玄関の向こう側で、ドタドタと足音がする。乱暴に鍵が開けられて、扉が開いた。

現れた女性は、不機嫌そうに眉をしかめて修一を見た。寝不足なのか、目の下にはクマが出来ていたが、それでも十分に美人といえる顔立ちをしていた。歳もたしか、まだ三十の前半だったはずだ。羽織ったカーディガンの前を握り、修一を胡散臭そうに見た。

相手が口を開くよりも早く、修一は言った。

「おはようございます、おばさん」

更に不機嫌になったのは間違いないようだ。不審者を見るようなほとんど睨みつけるような目付きで修一を見た。無言で扉を閉められることのないよう、矢継ぎ早に言葉を続ける。

「久しぶりです、修一です。あの、覚えてないですか？ 昔、千鶴と良く遊んでた……」

修一がそう言うと、呆気に取られたような顔になった。修一のことを思い出したのか、先ほどとは打って変わった表情で、機嫌が良

さそうに佳代子は笑う。

「あら……シユウちゃん？　おー、久しぶり。何か雰囲気変わったわね。全然わからなかったわよ」

シユウちゃん。初めて会った日から、佳代子おばさんは修一をそう呼ぶ。懐かしい。おばさんがいつまでもシユウちゃんと呼ぶから、千鶴も真似してそう呼び始めたんだ。幸司までシユウちゃんと呼び出した時は、叩いてやめさせた。

「東京に行ってるってアナタのお母さんに聞いてたから、びっくりしちゃった。戻って来たの？」

「半年くらい前に。今、俺が働いて母さんと幸司を養ってるんですよ」

嘘は言っていない。養いきれていないことは伝える必要もないだろう。そんな話をするために来たわけではないのだ。

「まあ、立派になっちゃって。とにかく、入りなよ。寒いでしょ、ここじゃ」

「そうですね、お邪魔します」

数年ぶりに足を踏み入れる。台所と繋がった居間は、比較的綺麗に片付けられていた。佳代子おばさんは千鶴と違って綺麗好きだ。

ただ、一箇所だけが汚れていた。大きなテーブル。ビールの空き缶が何本も上に置かれている。床にも、空になった缶が転がっている。「ごめんね、すぐ片付けるからさ。適当に座ってて」

つい何時間か前まで飲んでいたのでだろうか。佳代子おばさんは元々酒好きだ。でも、朝まで飲んでる姿は見たことがなかった。

「まだ気持ちの整理が付けられなくて。もう一年も経つのにな」
一年。いったい、何から一年経っているのか。

それを確かめに来たのだ。おかしくなったのが自分なのか、正しい現実がどちらなのか。

「シユウちゃんも、たまにはお墓に行ってあげてね。千鶴、ずっとあなたに懷いてたでしょ？」

半ば覚悟していた言葉を言われ、修一は心臓に冷たいものを感じ

た。

「結局私は、最期まであの子のために何もしてあげられなかったから」

だけど、俺は千鶴と会っている。千鶴は確かに生きているはずだ。それなのに、彼女と一緒に暮らしているはずの佳代子まで、千鶴が死んだと認めている。

やはりおかしくなったのは自分なのだろうか。彼女の死が受け入れられず、幻でも見たのだろうか。

自らの考えを否定するように、小さく首を振った。そんなわけがない。

現実が矛盾している。一体何が起きているのか、修一には理解が出来なかった。

どうにもならない現実と、どうにでもなる現実。

人はどちらを選ぶのだろうか。

それなら簡単だ、悩むまでもない。

朝六時三十分。目覚まし時計が鳴り始めた直後に、彼女は目を覚ました。

大きく伸びをして起き上がると、枕元に置かれた目覚まし時計を止める。今日はいつもより目覚めが良い。

軽やかな気分で階段を降りる。台所では、エプロンをつけた母がお弁当の準備をしている。

「おはよう。今日は早いね」

「うん、おはよう。何か早く目が覚めちゃって」

台所には六人程度まで囲める大きな木製のテーブルが置かれてい

る。父がイスに腰掛けて、新聞を見ながらコーヒーをすすっている。テーブルの上に、父の分と母の分、そして彼女の分の朝食が用意されていた。フライパンの上では卵が音を立てて焼けている。トースターからは、トーストの焼ける良い匂いがただよってくる。

「冷めちゃう前に、食べようか」

父が笑って言った。

こんがりと焼けたトーストに、マーガリンをたっぷり塗る。甘く味付けされた玉子焼きは、彼女の好物の一つだ。ほとんど毎日食べているのに、とても懐かしく感じる。

「今日は遅くなるの？」

「いや、今週は仕事もはかどってるからな、七時には帰るよ」

両親の会話を何気無く聞き流していると、何故だか不意に目頭が熱くなり、涙が零れそうになった。

寝惚けているから、頭がちゃんと働いてないんだ。彼女はそう思った。

「ごちそうさま」

顔を見られたら恥ずかしい。朝食を食べ終わると、すぐに洗面所へ向かった。

鏡をのぞき込む。大きく、ぱつちりとした黒い目。自然と笑みの形を作る血色の良い唇。背中まである長い黒髪は艶やかで美しい。母譲りの髪は彼女の自慢だった。

風呂場の電気を付けて、パジャマを脱ぎ捨てる。お世辞にも発育が良いとは言えないが、女性特有の膨らみと、日々の運動で程よく引き締まった肉体、すらりと伸びた両足。同年代の少女たちに比べて、スタイルの良さは際立っていた。

熱いシャワーを頭から浴びる。眠気を洗い流した。上気した白い肌が水を弾く。

シャワーから上がり、細身の体をバスタオルで拭き、ドライヤーで念入りに髪を乾かす。どんなに忙しくても、これだけは欠かしたことは無かった。

再び自分の部屋へと戻ると、ブラウスに袖を通し、ボタンを止める。手早くスカートを穿いて制服に着替える。

部屋に置かれた鏡を見て、最低限の身嗜みを整える。化粧はしない。クラスメイトの多くは学校へ行くのにも化粧をしていたが、彼女はしたことが無かったし、興味も無かった。

自惚れとも取られかねないが、彼女は自分の素のままの容姿を嫌いではない。

メガネを掛ける。オレンジ色のフレームをしたメガネは彼女のお気に入りだった。

時計を見ると、時間は七時二十分。学校までは歩いて二十五分。どれだけ遠回りして歩いたって、遅刻はしないだろう。

「いつてきます!」

玄関から大きな声で両親へ伝える。廊下から父が低い声で「気を付けろよ」と返す。

家を出た直後で、彼女は後悔した。寒い。十一月に入ったばかりだと言うのに、風はソックスを穿いた足を切り裂くような冷たさだった。

「ただいま!」

苦笑いをしている父の横をすり抜けて、部屋へ取って返すと、クローゼットを開けてコートを探す。丁寧にハンガーに掛けられた衣服の中から、紺色のダッフルコートを取り出した。

時計のデジタルは七時二十五分を表示している。時間なんて心配する必要もなかった。

今朝は妙に足取りが軽い。わざと遠回りして、家の近くを流れる川沿いの道を歩いて行った。本来は反対方向だから、この道を通って行けば、学校までは一時間ほど掛かってしまう。それでも、朝から散歩して歩くのは気分が良い。

冬は寒いから苦手だ。でも空気が澄んでいるから綺麗な青空が見れる。今日のように晴れた朝は好きだった。ただ歩いているだけで気分が良くなる。

川の水も澄んだ色をしていた。用水路として作られたその川は、昔から泳げるほどに綺麗だったらしい。何十年も過ぎた今でも、同じ状態を保っている。

時間がゆつくりと流れているように感じた。歩き慣れない道、普段は見えない景色。通ったことの無い道を選んで進むと、やがて学校へと続く長い坂道へと辿り着いた。

「おはよう、今日寒いねえ」

「有り得ないんですけどこの寒さ」

「もうサボりたい」

目の前を三人組の女子高生が歩いていった。金や茶など、派手に頭を染めている。みんな流行の髪形をして、綺麗に化粧で整えた顔をしていた。

「おはよう」

彼女が明るく声を掛けると、三人は一樣に明るい笑顔になった。

「おはよう、千鶴」

口々に挨拶を交わす。彼女たちとは特別に親しい間柄ではない。クラスは別々だし、共通の友人がいるわけでもない。登下校の時間、一緒になることが多いだけだ。それでも千鶴は、時々話し掛けて、彼女たちと学校へ向かうことがあった。

千鶴は昔から、誰にでも気軽に声を掛けて、簡単に仲良くなることができる。意識してそうしているわけじゃない。ただ自然と、彼女の周りには人が集まり、友人も多かった。

勉強も運動も得意で、ともすれば僻みの対象にもされかねないが、生来の明るさで周囲から嫌われることがない。

彼女は幸せだった。何もかもが思い通りで、何も心配する必要が無かった。

明日からも幸福な日々が続く。彼女が望む限り永遠に、幸福な日々は続く。

佳代子おばさんと向かい合うように、ソファに座っていた。修一はほとんど相槌を打つだけで、佳代子おばさんが千鶴の話をしている。

千鶴と佳代子おばさんの仲は、傍目からも決して良くは見えなかった。仲が悪いのではないが、修一と千鶴を同じように扱っていた気がする。つまり、千鶴も他人の子として接しているように見えたのだ。それでもやはり、いなくなってしまうえば悲しいのだろう。

会話が途切れた瞬間を見計らって、修一が口を挟んだ。

「おばさん、俺、お線香上げてきても良いかな」

一人になる口実で、修一はそう言った。

仏間には、千鶴と彼女の両親の写真が置かれている。

マッチを取り出すと、擦って火を付けた。ロウソクにその火を移すと、線香の束から一本抜き出して先端を近づける。赤い光が線香に灯った。

仏壇に手を合わせる。千鶴の両親に対してだ。千鶴が死んだなんて、信じたくない。

一年前に千鶴が死んだと、誰もが口裏を合わせたように言う。修一自身も、曖昧に覚えている。

それでも、彼は千鶴と再会をしたし、彼女からの電話も受けている。着信履歴だって残っているんだ。

自分が異常なのか、周りが異常なのか。何にせよ、何かがあるはずだ。修一と周囲の現実がズれている要因が、何か。

千鶴の両親が亡くなった後、かつて二人が使っていた部屋はいつの間にか片付けられてしまった。

まだ子供だった修一は、その光景を見てはじめて、二人の死を実感した。

そうだ、あいつの部屋。

ふと、思いついた。もしも本当に千鶴が死んでいるのであれば、彼女の部屋にはそれを実感させる何かがあるはずだ。綺麗に整頓さ

れた部屋でも、空っぽになった部屋でも良い。誰かの言葉だけじゃない、目に見える形で受け止められる何か。

仏間を後にして、こっそりと階段を上がる。悪いことをしているつもりはなかったが、なるべくおばさんに気付かれないように、修一は足音を立てないように歩いた。

千鶴の部屋の前で、修一は深呼吸をした。いくら昔から知っている仲とは言え、無断で部屋に入るのは流石に気が引ける。

ごめん。

頭の中で謝っておく。罪悪感との折り合いはこれで付いた。

だけど、もし部屋の中が本当に空っぽになっていたら、どうするのだろう。今は他の部屋として使われてる可能性だってある。考えれば考えるほど、バカバカしい真似をしている。本当に、頭がおかしくなったのだろうか。

千鶴が死んだ、その言葉が理解出来なくて、彼女の実家まで訪れた。誰からその話を聞かされても、いまだに実感が湧かない。

もしここで、彼女が死んだことを証明する何かを見つけてしまったとして、自分はそれを受け入れることが出来るのだろうか。

結局受け入れられずに、また苦しむだけじゃないのか？

しばらく悩んでいたが、考えても仕方が無い。もし自分がおかしくなっているなら、それこそ悩むまでもない。手遅れなのだから。

意を決して、扉を押し開ける。

カチャリ、キィ。乾いた音を立てて、扉はあっさりと開いた。

床に脱ぎ捨ててある服。本棚からはみ出したたくさんの本。ビール袋のゴミ。小さなテレビは電源が入ったまま。ハンガーに掛けられた制服は、適当に掛けたせいでシワがついてしまっている。

机の上には、読みかけのまま放置されている雑誌が置かれている。くしゃくしゃになった数学のプリントと、食べかけのスナック菓子。まるで、昨日までここで誰かが暮らしていたかのような痕跡。

この部屋の主が一年前に死んでいるなんて、有り得ない。現実との齟齬がここにある。

机の上に、一枚の封筒を見つける。どこかで見たことのある、オレンジ色の封筒。差出人不明の招待状。

「……招待状？」

無意識にそう考えてから、思い出す。そうだ、自分のところにもこれが来ていたじゃないか。

たしかにあった。開けた覚えがある。封筒の中身が何だったか、思い出せない。中には、何が入っていた？

中身を探すが、彼女の机の上にそれらしきものは見当たらなかった。

封筒を開いた後、自分がどうしたのかも思い出せないが、捨ててはいない。それなら、自分の部屋を探せば見つかるはずだ。

死んだはずなのに、生活の痕跡がある部屋。

覚えていないのに、招待状だと覚えている封筒。

何かの手掛かりだと思えた。不可解な現実の、ほつれた糸を解くポイント。パズルのピース。

急いで部屋を後にする。階段をすばやく降りると、興奮を顔に出さないように気を付けて、居間へと向かった。

「おばさん、俺、今日はそろそろ帰るね」

佳代子おばさんはまだ、ソファーに腰掛けたままで物思いに耽っていたようだった。

「うん、またお線香でも上げに来てね、きっとシユウちゃんが来てくれたら、あの子も喜ぶから」

挨拶もそこに井上家を後にすると、門の前に止めてあった原付にまたがる。

法定速度を越えて、ギリギリ身の危険を感じない程度のスピードで中古のバイクを飛ばす。

店舗の裏に作った駐輪場にバイクを止める。心が急ぎ立てられるようで止められない。自室まで駆け上がるように戻った。

ガラステーブルの上、ゴミ箱の中、本棚、机の引き出し。思いつく限り、ひたすら部屋中を探る。

「ちょっと、修一、騒がしいけど、どうしたの？」

「何でも無い、探し物してるんだ」

母の声に振り向きもせず応える。オレンジの封筒が見つからない。そもそも、アレはどこに置いてあった？ 部屋のどこに……

「一応、風邪引いて休んでるって言い張ってるんだし、せめて病人らしく振舞った方がいいわよ」

「次にサボる時からそうするよ」

「あ、そう」

呆れたような母の声。足音が離れていく。部屋へと戻ったようだ。ベッドの下をのぞき込んで見る。紙くずのゴミはたくさん落ちていたが、目的の封筒が見つからない。行方不明になっていた小さな置時計を見つけて、ついでに救出する。十一時十分を差している。掛け時計を比べて見るが、ずれてはいない。どうやら電池は生きているらしい。

一旦落ち着こうとベッドの上に腰掛ける。手を伸ばした先に紙の感触に触れて、枕元に置いてあるソレに気が付いた。

「見つけた！」

思わず声に出す。オレンジ色の、何も書かれていない封筒。

普段の何倍もの速度で心臓が鼓動している。不思議な緊張で手に汗が滲んだ。恐る恐る封筒に手を伸ばす。封は開けられている。覗き込むと、中に一枚の紙が入っているのが見える。まだ取り出していないかったのだろうか。

一瞬の躊躇いの後、封筒から紙を引き出した。

「兄ちゃん、起きろって、兄ちゃん！」

誰かに揺すられて、意識が現実と繋がる。

夢を見ていたからか、寝覚めが悪い。体が重く、起きる気になれない。

もう少しゆつくり寝ていよう。修一はそう考え、何も答えずにま
た目を閉じた。

「みんなもう来てるよ、兄ちゃん待ちだって、遅刻するよ！」

だが、相手がそれを許してくれなかった。

「わかった、わかった起きるから叩くのを止める、バカ」

バシバシと背中を強く叩かれ、渋々起き上がる。カーペットの上
で横になったまま眠っていたらしく、体の節々が痛かった。

「下でテツさんたち待ってるって。急いで準備しなよ」

「あー、はいはい。もう少し待ってて伝えといて」

幸司を追い出すと、修一は大きく伸びをした。だんだんと意識が
はつきりとしてくる。まだ眠いが、そうも言ってられない。今日は
大事な日だ。

プロデビュー後、初のテレビ出演が今日だった。リハーサルの時
間まではまだ余裕があるが、万が一にも遅刻は出来ない。ここで名
前を売って、プロとしての成功を掴む。そうすれば、親父ももうバ
ンド活動に反対したりはしないだろう。

高校時代からずっと、音楽で生きることが夢見て活動し続けてき
たのだ。このチャンス逃すわけにはいかない。

準備を済ませて部屋を出る。居間では親父が新聞を読んでいた。
母さんがいないのは、主婦仲間と駅前のスポーツクラブに行ってい
るのだろう。ここ何週間かは、日曜になるといつも数人で連れ立っ
てスポーツクラブへ出掛けている。人一倍の元気と頑丈さが取り得
の母だが、飽きっぽさも人一倍だ。運動の習慣がどれだけ続くかは、
兄弟の賭けの対象になっていた。

「おはよう」

「おう、おはよう」

通り際に挨拶をすると、こちらを見ようとせず親父は返事をし
た。修一は特に気にせず、台所へ向かう。冷蔵庫から牛乳を取り出
して、中身が少なかったのでパックのまま飲み干した。幸司に見ら
れたらまたうるさく言われそうだ。

「修一」

「……なに？」

声を掛けられ振り向くが、新聞で隠れて、親父の表情はわからなかった。

親父は咳払いをして、一瞬躊躇した後、続けた。

「これから仕事か。ほら、つまり、音楽の」

「ああ、うん。テレビに出るんだ、今日。番組の後も、ライブの打ち合わせとかあるから、帰るの遅くなる」

父にバンドの予定を話す時に、いつも気詰まりを感じていた。頭ごなしに言われているわけでは無いが、反対されているのは事実だ。だからといって反発して喧嘩をするほど修一は幼くもない。結果、何とも言えない気まずい雰囲気を感じてしまう。

「下でみんな待ってるから、俺そろそろ行くわ」

顔を見ないように背を向けて、玄関で靴を履く。背後から、親父の声が聞こえる。

「頑張つて来いよ」

思わず靴紐を持った手が止まる。たった一言だけだったが、少しだけ理解を示してくれている気がして、嬉しかった。

「まあ、それなりに頑張ってくる。行つてきます」

外の階段を降りると、裏手にある駐車場に白いバンが止められている。運転席に一人、助手席に一人が座っていた。車の外で、黒田が楽しそうに幸司と話しをしていた。

「来た来た、シュウさん遅いつて」

「約束の時間には遅れてないだろ、行こうぜ」

「兄ちゃん、サイン貰って来てね。タモさんの」

「はいはい、覚えてたらな」

弟を適当にあしらって、後部座席に乗り込む。運転席の男が笑いながら「遅い」と言うと、助手席からは「昼飯はおごりだな」と追従の声上がる。黒田が笑った。バンドメンバーは普段以上に明るかった。

走り出した車は渋滞にも巻き込まれず、順調にスタジオへと到着した。

修一が夢見ていた成功が、今日から始まる。それは確信に近い。メジャーデビューのCDはまだ販売前だというのに、世間で高い評判を受けている。有線で毎日のように流れ、コマーシャルにも使われている。仕事の量も今までの十倍以上に跳ね上がった。今日のテレビ出演で良い印象を残せば、また別の仕事もやってくるだろう。プロとして軌道に乗り始めている。長い冬が終わって、ようやく春が巡ってきたのだ。このまま成功を収めるために、今日のチャンスは無駄にできない。

控え室へと向かう途中、廊下でスタッフの一人と目が合った。

いや、スタッフではない。別の番組の収録だろうか？ その男の格好は妙に浮いている。

「どうですか？ こんな人生は」

男は修一に向かってそう言った。

若い男だ。自分と対して年は変わらないだろう。染め抜いた金色の髪に、色白の肌。高級そうなスーツを着込んで、ホストと間違われかねない格好だった。

さっきまで、こんな男はいただろうか？

「今見ているものはすべて、貴方が掴むことができ、選ばなかった人生です」

全ての時間が止まったように、その場所で動いているのは修一とその男だけだった。

異常に気が付いたのも、この瞬間。

父が生きている。母が健康で、俺がバンドをやっている？

何もかもがおかしい。現実と異なる現実。あらゆる面が、修一にとって都合の良い現実だった。

「本間修一さん、十五歳の時にギターを始めましたよね？ 高校の文化祭で演奏をして、当時の貴方はヒーローだった。本格的にプロを目指さないかとも、ご友人に誘われたでしょう。でも貴方は選ば

なかった。この人生はね、貴方が捨てていった希望で出来ているんですよ」

修一は警戒をするように、一步退いた。

この男は何だ？ 何を言っている？

確かに、一度は修一が夢見たものばかりだ。母が健康だったら。

音楽を続けていたら。父が生きていたら。

「どうでした？ 将来の心配なんて何もいらない、ご両親は健在で、貴方は自分の将来だけを考えれば良い。すべてが上手くいって、成功だけが待っている。今からでも遅くありません。すべての願いが叶う現実を掴む気はありませんか？」

「いったい、あんたは何なんだ？ 宗教なら間に合ってるぞ」

舌が乾いて、上手く喋れない。未知の状態に恐怖を感じていた。

「私は、貴方を招待しに来たんですよ」

招待。記憶の片隅の何かがその言葉に反応した。招待状。

「もしも招待を断るのなら、今のまま暮らしていただいて結構です。時間が経てば今見たものも、受け取った招待状も、記憶から消えるように出ていきます」

男は修一の反応を待つかのように、一旦言葉を切った。

何も答えなかった。答えようがない。男が続けた。

「絶望の現実を捨てて、新しい現実で一生を送る気があるのなら、明日、指定された場所へ来てください。詳しいことは、実際に会ってお話ししましょう」

男は修一に、一枚の紙片を手渡した。はがき程のサイズの、白い紙。そこには住所と地図が、不思議な光沢で書かれていた。

「そうそう、貴方が去る現実のことは気にしなくても大丈夫ですよ。アフターケアも完璧ですから。理想の現実を掴む決心が着いたなら、また会いましょう」

現実を去る。新しい現実。異なる現実。

千鶴が生きている現実。千鶴が死んでいる現実。

こいつだ。こいつが千鶴の居ない原因だ。こいつが、千鶴を俺の

『現実』から消した。

手を伸ばすが、男までは届かない。眩しい光が視界を満たした。目が眩み、咄嗟にまぶたを閉じる。平衡感覚が麻痺して、立っていられなくなる。どこまでも落下するように、意識が薄れていく。

目を開いた時には、ベッドの上に座り込んでいた。右手にオレンジ色の封筒を持ち、左手にははがきサイズの紙を掴んでいる。

頭ははつきりしていた。眠気もない。時計を見ると、十一時十分。今、十一分になった。

封筒を見つけてから、時間も経っていない。ついさっき、紙を掴み出した瞬間から、何も変わっていない。

先ほどまでの光景が、リアリティを伴って蘇る。夢でも空想でもない、今見たのは現実だ。その感覚を修一は信じた。

招待状。鉛筆やペンのインクとは違う、初めて見る不思議な光沢で、地図と住所がその紙には書かれていた。

この紙切れが、修一と千鶴の現実を繋いでいる。

あの男は明日、指定された場所へ来いと言っていた。一日の猶予を与えたのは、修一に決心を促すためだろうか。

新しい現実だって？ 何もかも捨ててこの世から逃げ出すっていうんなら、自殺と一緒にじゃないか。

明日、あの男に会いに行く。千鶴もきつと居るはずだ。あの部屋にも招待状があった。無関係なはずがない。

千鶴を連れ戻す。何もかも元通りになる。こんなバカげた話しは、それで終わりだ。

気が付くと、自分の腕が震えていた。

未知の事態に恐怖しているのか、それとも理想の現実に興奮したのか。自らのことなのに、理解が出来なかった。

風邪を引いた兄のために、八百屋でりんごを買おうと思った。昼夜を問わず働いている兄をたまには労っても良いだろうと、ちょっとした気まぐれだった。

病気の時に果物を食べさせるのは何でだろう。疑問に思いながら、一番みずばらしくて傷の付いたりんごを幸司は選んだ。

「おじさん、これ傷付いてるよ。他のと同じ値段じゃ売れないんじゃない？」

「コウちゃん、またそんなこと言って、若い時からそんなケチケチしてると立派な人物になれないよ」

顔なじみのおじさんが、苦笑いを浮かべた。

「父さんの遺言で、買い物をする時にはできるだけ値切らないといけないんだ」

「いや、そういうしつかりしたところは親父ってよりおふくろさんに似てるよ」

「いいじゃない、オマケしてあげなさいよ。一郎さんには散々お世話になったんだから」

恰幅の良い奥さんがバシン、と夫の背中を叩いた。おじさんは顔をしかめて背中をさすった。

「逆だ、逆。俺があいつの世話してやってたんだ。いつもいつも大酒飲んじやあふらふらになってよお」

「アンタも似たようなもんだろ。コウちゃん、そのりんごはあげるよ」

おばさんはけらけらと笑った。昔かたぎの良い人たちだった。

「ありがと、おばさん。また来るね」

駅の東口は開発され、すっかり大きなビルやデパートが立ち並んでいるが、放置されている南口には古くから続く商店街のアーケードがあり、八百屋や古本屋など、個人で経営している店がまだたくさん残っていた。

いずれはこの方面も開発されるのかも知れない。だけど今はまだ、ここは居心地の良い場所だった。

他のスーパーを何件か回って、今日の買い物はこれで終わりだ。

家計が苦しいから、高いものは買えない。だが、幸司と母のワガママで兄に店を継がせ、夜まで働かせているのだから、切迫した生活に文句は言えなかった。

店を潰してしまえば、兄はもつと楽になるだろう。だけど、父さんと母さんが何年も努力して、ようやく開いた店だ。幸司は絶対に潰したくないと思っていた。

幸司は生前の父から、店にどれだけの情熱を傾けているかを良く聞かされていた。反発ばかりしていた兄はきつと知らない。二人がどんな思いであの店を開いたのかを。

兄に話せば、絶対に店を継いでくれると思った。だからこそ、何も言わずに説得した。卑怯な気がして言いたくなかった。説得はするが、最後は兄自身の意志で決めて欲しい。

あるいはその方が卑怯かも知れないが、幸司にはそこまで考えが回らなかった。

「ただいま」

玄関でボロボロに履き潰したスニーカーを脱ぐ。広めの玄関には、いくつかの靴が置かれている。母さんの靴と、使われなくなった父さんの靴と、お洒落な兄の靴。兄の靴は先が尖っているデザインで、履き辛そうだと幸司はいつも思っている。

「あれ、兄ちゃん、寝てなくて良いの？」

居間では兄がソファーに座ってテレビを見ていた。いや、付けたままで画面を睨んでいると言った方が正しい。再放送のドラマがやっているが、ホームコメディを見ているにしては目付きがキツすぎる。だいたい兄がそんな表情をしている時は、セカイがどのとわけのわからない考えごとに熱中している。

「なあ、幸司」

ほらはじまった。いつももったいぶって言葉を切ってから、わけのわからないことを言ってくる。

「……なに？」

今日はいつもよりも間があつた。

「もしも、親父が生きてて、母さんが健康だったら、幸せだと思つか」

何だか、まともな内容だ。まともじゃない兄の言つた言葉だとは思えない。

幸司は一瞬だけ悩んだが、考えるまでも無い二択だ。

「そりゃあ、幸せだと思うよ。今が不幸って思ってるんじゃないけど」

「もしも、今居る現実を捨てて、そんな現実に行けるとしたら、お前は行くか？」

まともじゃない内容になってきた。結局いつもの兄のくだらないお話だ。幸司はいつものように、適当に相手にすることに決めた。

「多分だけど、行かないんじゃないかな。今居る現実を捨ててとか、何だか落とし穴がありそうだし」

兄は腕を組んだまま、何も答えない。満足したのか飽きたのか、とにかくこの話題は終わらしい。

買い物袋をテーブルの上に置いて、中身を冷蔵庫へと移す。

「ところでりんご買って来たけど、食う？」

「食う」

取り出したりんごを水道水で洗うと、幸司は果物ナイフを使って器用に皮をむき始めた。

後編

駅からわずか数分だけ歩いた場所に、置き忘れられたかのように自然が残されている。街の再開発計画が暗礁に乗り上げたらしく、森の入り口だけを切り開いて、あとは何もかも放置されていた。

自然と人工の境界線。街は夜中でも灯りが消えることが無いのに、森は昼間でも薄暗く、子供たちにとっては恐怖の的だった。

使い慣れないパソコンでわざわざ住所を調べて来た。(ググるってなんだ？ と幸司に聞いたら、また馬鹿にされた) 地図に指定された場所、書かれた住所はここで間違いない。

後ろを振り返れば、砂利道の向こうにはビルが並んでいるのが見える。目の前には落ち葉の散らばる道と、鬱々と広がる森への入り口。

「やっぱり、貴方なら来ると思っていましたよ」

昨日会ったあの男が、その場所には立っていた。

修一はできる限りの悪意を込めてその男を睨みつける。慣れない表情を作っているからか、顔の筋肉が引きつった。

「お前は一体何なんだ？」

男は芝居掛かったように両手を上げると、肩をすくめる。人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「不思議な質問ですね、それは。名前ですか、知りたいのは」

「別にお前の名前なんかどうでもいいんだよ。昨日のアレは……何だ。招待状ってのは」

千鶴がいなくなったのには、こいつが関わっている。

そう確信しても、わからないことが多すぎる。何を聞けばいいのか、はつきりと言葉にできない。

「招待状は、招待状ですよ。誰かをどこかへ招待するための、案内です」

修一を苛立たせるためのなのか、もとよりそんな人物なのか、とにかくカンに触る男だった。

「私は『案内人』です。名前は橘。そう名乗っています」

「へえ、案内人？ どこへ案内してくれるって？」

「不幸な人々を招待し、正しい世界へ、幸福な現実へと導くのですよ」

胡散臭い宗教家みたいだ。それが、出来の悪い詐欺師か。

「そりやずいぶんと素晴らしいお仕事だ。で、井上千鶴のこと、知ってるんだろ。あいつの部屋にも、あのオレンジの招待状があった。無関係ってことはないよな？ あいつはどこにいる。お前は何をしたんだ」

「順を追って話しましょうか。さて……井上千鶴さんですね。いますよ、彼女なら」

予想どおりとはいえ、修一はその言葉に息を飲んだ。千鶴は死んでなんかない。やっぱり自分が正しかった。

「彼女は幸せに過ごしています。と、口で言っても信じられないでしょうね。ついてきたらどうですか？ 実際に貴方の目で見れば、信じられるでしょう」

男は修一に背を向けると、歩き出した。こちらが付いてくるかどうかを確認する素振りすら見せない。来るしかないとタ力をくくっているのだろう。実際そのとおりなのが腹立たしかった。

修一は無言で男の後を追った。段々と森の奥へと入っていく。

異変にはすぐに気が付いた。進めば進むほど、森が深くなっている。頭上を覆う枝葉は厚く、太陽の光を通さない。昼間だというのに、辺りはすぐに真っ暗になった。

こんなに大きな森ではなかった。これでは樹海だ。いや、それよりも漫画やゲームで見たような森に近い。木々も見慣れないものが多く、ねじれた幹が壁のようにそびえ立っている。

「もうすぐ着きますよ。それから、なるべくなら私から離れないでください。二度と戻れなくなっても、責任は取れませんよ」

振り返りもせず、男は脅すような言葉を投げかけて来た。

返事はしなかった。修一は心臓の鼓動が高まるのを感じていた。見知らぬどこかへ進む時の高揚感。認めざるを得ない。自分はこの状況を楽しんでいる。

薄暗かった視界が、一瞬で開けた。

「ここが、私たちの住む場所。ターミナルと、私たちはそう呼んでいます」

そこはまるで、宇宙だった。頭上には星のような小さな光が無数に輝いている。色とりどりの光、天の川のように密集した光、大きな光、小さな光。乳白色の光が、空に絵の具を垂らしたように無秩序に広がっている。渦巻きのように光が螺旋を描いていた。オーロラのように波打つ光のカーテンもある。流れるように上下し、光の奔流を生み出していた。地平線は見えない。視界はどこまでも広がっている。遮るものが何もない。どこまでも真っ暗な宇宙に、無限の光が輝いていた。

気を失いそうになるほど、現実離れた光景だった。先ほどまでいたはずの森は跡形もなくなっている。

修一は見入ってしまった。映画の世界に入り込んだかのような、目を奪われる壮大な景観。

「名前が無いのは不便ですから、役割を端的に表しています。すべての世界へと繋がる発着駅。だからターミナル。簡単でしょう？」

男の言葉も耳に入らない。やるべきことも言っべき言葉も忘れ、ただ広がる宇宙を眺めていた。

「気の済むまで見とれていて結構ですが、置いて行きますよ」

いつの間にか男は先まで進んでいた。こんなところではぐれたら二度と戻れない。修一は慌てて後を追った。

どうやら、ここにはたくさんの人たちがいるらしく（こんな場所のどこで暮らしているのだろう）途中、何人かとすれ違った。みんな修一を奇異の目で見てきた。

見た限りでは、どこにでも居るような人々だが、彼らからは自分が特殊な人間に見えるのだろうか？

不思議なことに、彼らがどこから現れるのかはわからなかった。橋の後ろを歩いていると、遠くにぼやけた人影が見えることがある。目を凝らして見ると、突然その人影が歩いている人の姿として見えるようになる。

一度見えた人はいつまでも見えるのだが、ぼやけた人影のままだとやがて消えて、見えなくなってしまう。

疑問に思ったが、こんな現実離れした場所で、いちいち疑問を口にしていたらキリがない。修一は黙って歩き続けた。

大理石の床を歩いているような感覚はある。ただ、足音は響かない。頭上と違い、足元は暗かった。一步踏み出したら突然落下し、どこまでも落ちて行くのではないかという不安を感じる。足元を意識しないようにすると、自然と頭上に目が行ってしまう。

その光を見上げるたびに、夢を見ているのではないかと思う。

「招待を受け入れた人間には、すべてを話す義務が私たちにはあります。まずは、世界について。説明しましょう」

橋は速度を遅めず、話しながら喋り続ける。修一も歩く速度を速めた。

「人間はみんな無意識に、『世界とはこうあるべきだ』という概念を持っています。海があつて、緑があつて、太陽がある。太陽系は太陽を中心に回っている。そのような、誰もが持つ無意識の集合体で世界は作り出されます」

修一は言葉を挟まず、ただ黙って男の話しを聞いていた。

「ですが本来、世界というのはそこに住む人々の無意識の願いによって作られた『願いを映し出す鏡』です。人々が望むとおりの世界となっていくます。だから例えば、すべての人間が戦争のない世界を望めば、世界はそうに変わっていきます。信じられますか？」

そこで男は一旦歩みを止めて、手で周囲を指し示した。
「理解できますか？ かつて世界は地球を中心に回っていました。」

ですが、惑星が太陽を中心に巡ると『知った』人が現れたから、世界は姿を変えました」

橘の話は続く。そういえば、家を出る時にテレビの電源は切ってきただろうか。気になったが、どうしても思い出せない。電気やテレビを付けたままで家を出ると、余計な電気代が掛かると幸司がうるさい。

「世界には、多くの人間がいます。最も規模の大きな世界……貴方たちの住む世界では、七十億ほどですね。その七十億が無意識に願って、矛盾のないように平均化された世界に、貴方たちは住んでいます。強く願いを放つ人間の意志が現れると、世界はその人間が無意識に願うとおりに世界を変えます。銀河をどこまでも押し広げているのは人間の意志です。だから、誰もが願いを叶えられるワケではありません。ですが、もしこの世界に一人しかいなければ、どうなるかわかりますか？」

「え？」

橘が喋り始めて十秒ほどで、修一は理解するのを諦めていた。何を言っているのかまったくわからない。宇宙がどのと言われても、とても大きいことと暗くて寒いことしか知らない。

聞いていないのがばればれた。橘は溜め息を一つ付くと、考え込むように細いあごに指を当てた。

「いいですか、世界に一人きりになったなら、神様になれるとも思ってください。そして自分の理想どおりに世界を作り変えられる」修一は思わず笑い出しそうになった。

世界の次は神様か。宗教家でも詐欺師でもなく、こいつは変人だ。再び橘が歩き出す。遅れないように続きながらも、無然とした顔で考え込んでいた。

「だから、その世界だとか鏡だとか、俺と千鶴に何の関係があるんだよ」

意味のわからない説明だらけで、すっかり忘れるところだった。世界が何だろうと、修一や千鶴を連れて行く理由にはならない。

橋が立ち止まった。ぶつかりそうになって、慌てて修一も足を止める。彼が見上げる目の前に、巨大な球状の物体が浮いていた。

その球体は、頂上部から中心あたりまではほとんど真っ黒で、下方には輝く黄金色に輝く何か渦を巻いて、霧のようなものが発生していた。金色に明滅する何かは、とても美しく見えた。

どうやら、ここはロビーになっているようだ。球体を中央に、学校の体育館ほどの空間がある。

ロビーには、たくさんの扉が等間隔で並んでいる。真っ暗な床の上に並んだ扉は、何だか不気味だった。

当然のことだが、普通、扉は壁と接する場所に作られる。そうでなければ扉を作る意味がない。どこへも繋がっていないのだから、ただ同じ場所を通り抜けるだけだろう。

それなのに、どこにも繋がっていないはずの扉から人々が現れて、また別の扉へと潜っていく。

恐らくは、全員橋と同じ人間だろう。興味深そうに修一を見て、ひそひそと周りの仲間に耳打ちする者もいた。

「続けましょう。ここからは有名な話ですが、世界は可能性の数だけ無尽蔵に分岐していきます。貴方たちの生きる世界を基点として、無限に存在するんです。中には、人間が誰も存在しない時代から分岐した、生まれたばかりの世界もあります」

橋は頭上を見上げた。つられるように修一も視線を上へと向ける。楕円形の天井が広がっていた。天井には曇りガラス程度の透明感がある。支える柱も何もないのに、大きな空に浮かぶ円盤のように、微動だにせず浮いている。

もう不思議とも思わない。違和感の連続で、修一は感覚が麻痺していた。

眺めていると、段々と天井が透き通り透明になっていく。隠れていた星々が、また姿を現した。

「あの輝く星のひとつひとつが、分岐した世界です。まだ人の存在しない世界に、貴方や井上千鶴さんのような、現実に絶望した人間

を招待するんですよ」

「誰が絶望しているって？」

「誰もいない世界ですから、もちろん、世界には移動した一人しか存在しません」

聞き捨てならない台詞に修一が噛み付くが、聞こえなかったのかあえて無視したのか。橘は話しを途絶えさせなかった。

「さっきも言いましたが、何でも思い通りになるんですよ。たった一人のために『願いを映し出す鏡』が機能するのですから。願ったとおりの世界になります。一日を四十時間にもできるし、太陽が永遠に沈まない地球だって作れます。それによって問題が起ることもない。違和感すらないので。自分にとって都合のいい他人しか存在しませんし、誰とも一生会いたくないと願っている人の世界には、他人が現れません。願いの大小問わず、何もかも思い通りになります」

バカげた話した。くだらない妄想としか感じなかった。

だけど、今こうして自分が居る場所を考えれば、ウソみたいな話しだからと信じないわけにはいかなかった。

それに、招待状に触れた時に見たあの光景は、異なる世界での現実じゃないのか？

はつきりとした現実感を持った世界。あの光景を一度でも経験してしまえば、夢や妄想だったと一蹴することはできない。

「誰だって、思い通りにならない現実より、理想どおりになる現実が良いに決まっています。千鶴さんがそれを選んだように、貴方だって理想どおりの世界で生きる権利があります」

修一は不機嫌さを隠そうともせずに、言った。

「一方的に押し付けといて何が理想だ。俺はそんな都合のいい世界なんていない」

「みんなそう言いますよ。だけど、本心ではそれを望んでいない」
こちらの考えを見透かすかのように笑う橘の顔が不快だった。

「自分の夢に人生を賭けたい。本当は音楽だってやりたい。理想の

ために生きて、成功したい。それが貴方の願いでしょう」

言葉が喉に詰まり、何も言い返せなかった。それは考えないようにしていた本当の望みだ。

家族のことは大切に思っている。幸司と母さんのために働くのを、嫌だと感じたことは一度もない。

でも、自分のために生きたいと思う気持ちは、消せなかった。

「しっかりと考えてみてください。貴方が心から望むだけのことが起こるんですよ。努力と苦勞が必ず報われ、不安と達成感のバランスが取れた未来。それが約束された未来だと、気付かなければ受け入れることができるでしょう？ 私たちの招待を受けるつもりなら、いつだって歓迎しますよ」

一瞬だけ頭をもたげた感情を振り払うよう、修一は首を横に振った。

「家族も友達も置き去りにして消えろって？ バカバカしいだろ、そんなの」

「元々居た世界のことなら、気にする必要はありません。誰かが別の現実に移れば、元の世界で関わっていた人々の記憶は、不都合が生じないように改ざんされます。つまり、貴方はとくに死んだ人間になる。人の体が、傷付いた部分を自然と癒すように、世界は人が消えて生じる不自然を癒す力があります」

記憶の改ざん。誰もが千鶴は死んだと言ったが、修一ははっきりと彼女と再会したのを覚えていた。同時に、彼女が死んだことも覚えていた。

つまりはそれが、改ざんされた記憶なのだろう。もしも修一の記憶の中から、矛盾が完全に取り除かれていたらと思うと、恐ろしかった。千鶴の死を受け入れてしまうしかない。違和感が無ければ、悲しみをいつかは乗り越えて、何事も無かったかのように毎日を生きたはずだ。事実を忘れてしまうのだから、抗うことが出来なくなる。

「家族も、友達も、恋人も、貴方がいて欲しいと望んでいる人物は、

すべて新しい世界にも存在します」

「そんなの、二セモノだ」

「本物と二セモノと、どうやって判断するんです？ 枝分かれしている世界の中には、貴方や貴方の家族だって無数に存在しています。同じように考えて同じように行動する同じ人間を、一つだけは本物で、他は二セモノだと言い切れるのですか？」

言い争っても勝ち目がないことはわかっている。世界がどうのと言われたところで、修一には理解できない。修一にとっての世界は、自分を中心としたごくわずかな範囲でしかないのだから。

「悪いけど、どうでもいい。お前と口論するつもりもないし。千鶴はどこにいるんだよ。あいつ、ここのだっかにいるんだろ？」

「ええ、彼女は自ら選びましたからね。新しい現実で生きること」

千鶴も見せられたはずだ。自分にとって都合の良い光景を。そして誘惑に負けてしまった。

「場所を教えてください。あいつを連れ戻しに来たんだ、俺は」

「無理ですよ。理想どおりの現実に居るのです。今さら、戻ることはないでしょう」

「わかんないだろ、そんなの。説得する」

「そんな無駄なことに時間を使ってどうするんですか？ 本間修一さん、貴方のための世界もあるんですよ。辛い日々の仕事、家族の世話、自らの将来。先行きの見えない状況に絶望したはずです、貴方だって。忘れれば良いじゃないですか。貴方にとって幸福だけが待っている現実があるんですよ」

橘の言うことにも一理あった。体力的にも精神的にも辛い日が多い。自由に生きたいと願っているのも本当だ。

それでも、思い通りにならないからと逃げ出せるほど、現実には絶望はしてない。

「確かにキツいけど、勝手に不幸だなんて決め付けられるのは、気に入らない。くだらない言葉で惑わせようとしてるなら、やめろ」

橘は肩をすくめた。芝居掛かったその仕草に余計に苛立ちが募る。
「そこまで言うのなら仕方ないですね」

前方を指し示す。その方向を見ると、並列する扉の中に、一つだけ銀色をした扉が浮かんでいた。

「あの銀色の扉から、世界中を繋ぐ通路へと出られます。本当に千鶴さんを説得するというなら、好きにしてください。オレンジ色に輝く道を見つけ出せたなら、そこから彼女の世界へと入ることができます」

「本当か？」

「嘘を吐いても仕方がないでしょう？ 貴方を騙すことにメリットはありませんから」

胡散臭い笑顔だ。信用ならない。

それでも、橘の言葉を信じるしかなかった。

「私の申し出を受けなくなったら、いつでも言ってください。貴方が理想の世界に行くのだったら、いつでもお手伝いをしますから」
修一は橘に背を向けると、扉へと近寄った。軽い扉に手をつき、思い切って開け放った。

扉の先は、また未知の光景に繋がっていた。

淡い光に満たされた道が、どこまでも遠くまで続いている。見上げる空は極彩色の宇宙だった。

意を決して一歩踏み出す。ここまで来たんだ、今さら後に引けるわけがない。

扉を抜ける修一に向かって、橘が言葉を投げ掛けた。

「ターミナルには時間が存在しません。体感時間で何日でも、飲まず食わずで探し続けられますよ。まあ、無限の世界からたった一つの正解を見つけるなんて、何百年掛かっても出来ないでしょうね」
ガチャン。

背後で、扉が勝手にしまった。ギクリとして振り返るが、すでに扉は影も形も無くなっていた。

目の前には、白銀色にぼんやりと輝く道。それが延々と続いている

る。道の無い地面は乳白色のもやに覆われていて、まるで雲の上にいるようだった。空はたくさん絵の具を広げたパレットのように、虹色のコントラストに彩られている。その色も数秒ごとに入れ替わって、とても幻想的だった。地上と空の区別は無。どこまでも遠くまで、地上の白銀と空の虹色が続き、遙か遠くの地平線で交わっている。

途方もなく広がった世界に、修一は一人きりで立っていた。

好きな異性に想いを伝える方法はいくつかある。ラブレターなんてのは古典的過ぎて、今時流行らない。それでも、恋愛慣れしていない学生にとっては、今でも便利な方法かも知れない。

見知らぬ相手からラブレターを渡され、千鶴は困り果てた表情で何度もその手紙を読み返した。奇抜な内容でも恥ずかしい内容でもない。好感の持てる綺麗な字で、ただ千鶴を好きなこと、付き合っ
て欲しいことが簡潔に書かれていた。ご丁寧に電話番号とメールアドレスまで付け加えられている。

傷付けないように断るにはどうすれば良いんだろう。恋愛経験に乏しい千鶴にとって、それは頭を悩ませる問題だった。

十八年間、異性と付き合ったことがない。今回のように言い寄ってくる人間が居ないわけではなかったが、すべて断っていた。

千鶴が唸っていると、事情を知る友人が楽しそうに声を掛けてきた。いつだって人の色恋沙汰は愉快に違いない。

「ラブレター渡されたんでしょ？ 二組の元木に。また断るつもりなの？ 勿体無いなあ、あいつイケメンじゃん」

「うん、カッコイイけど……あの人がダメとかじゃなくて、付き合
うって気になれない」

「何で？ 他に好きな人いるとか？」

好きな人。想いを寄せる相手が、居た気がする。だけど、思い出

せない。

小さな頃に誰かを好きになって、忘れてしまったんだろうか。脳裏を何かが掠めるが、その影は掴もうとする前に掻き消えてしまう。千鶴は口ごもった。この感覚は説明がし辛い。

「凶星？ 誰？ 同じクラス？ イケメン？」

「別に、違うつて。誰もいないよ。本当に」

「だったら付き合っちゃえば良いのに。今年であたしら高校生活終わりじゃん。三年間独り身なんて悲しすぎる」

友人はまるでこの世の終わりかのように、悲壮感たつぷりに頭を振った。

千鶴は笑った。こうして親しい友人たちと一緒にいるのが、今は一番楽しい。

心の隅で何かが引つ掛かったが、考えないことにした。

どれだけ歩き続けただろう。何時間、何日？ ひよっとしたら、何ヶ月も経っているかも知れない。

風景はどこまで行っても変わらない。道は色とりどりに変わっていくが、オレンジ色の光は現れなかった。

奇跡のような光景ではあるが、現実離れた状況に気が狂いそう。だ。飢えも乾きも感じていたが、いつまで経っても限界を迎えることが無い。何度も休息を繰り返して、修一は進み続けた。

疲労しきった体の節々が悲鳴を上げる。横になって眠りたかった。できることなら暖かいベッドで、いつまでも眠っていたい。

橋の考えが読めて来た。延々と続く光景を彼に歩かせて、音を上げるのを待っているのだろう。これだけの苦痛を味わえば、理想の現実とやらの飛び付きたくなるのも無理はない。

「冗談じゃない」

かすれる声を修一は漏らした。

あいつの思い通りになつてたまるか。

ひたすら前を向いて歩き続ける。まだ、オレンジ色の光は見えない。

「よお、元気かい」

突然横合いから、その男は現れた。

禿げ上がった頭、厚ぼつたい眉に吊り上った両目をした男。睨み付けるような顔で、不気味に笑顔を浮かべている。どこからどう見ても悪人だ。太り気味の肉体と似合っていないスーツ姿のおかげで、滑稽な姿にも見えた。

修一は返事をしなかった。何も答えられないほどに疲れていたのもあるし、こんなところに人間が居ることに驚いて、声が出なかった。

悪人は手にした袋からビニールで密封されたドーナツを取り出すと、封を破る。大きな口を開けて頬張った。

「アンタ、アレだろ？ 女を捜しに来たんだって？ いやあ、良いね。そういうのはロマンがあるよ、うん」

もぐもぐと咀嚼しながら悪人は続ける。

見ていて不快だった。何か言い返してやりたかったが、答えたのは声ではなく腹の音だった。

音を聞いて、男が口を歪めてニヤリと笑う。殺人鬼が誰かを殺す瞬間は、きつとこんな顔をするに違いない。

「腹減った？」

しばらくためらってから、修一はうなずいた。

「ここで餓死する心配はないけどさ」

悪人は袋の中からドーナツと、水の入ったペットボトルを取り出し、修一に差し出した。

「食べな。せつかく面白くなって来たつてのに、ここでアンタに諦められちゃたまらないな」

差し出された食べ物と男を何度も見比べる。本当にいいのだろうか？ 修一が怪しんでいるのを感じたのか、男は無理矢理両手の中

にドーナツとペットボトルを握らせた。相変わらずの表情だったが、今はそれが天使の顔に見える。

この男は悪人じゃない。救世主だ。

修一は返事もせずに、手渡された水を飲み干し、ドーナツをががつと頬張った。

アツという間に食べ尽くして、修一はホッと息を吐いた。生き返るとはまさにこのことだ。

「どうも。助かりました。本当に。でも、何で俺を助けてくれるんだ？ あの橋って男の仲間だろ？」

「まあな。仲間っつーか……同類っていつのか。だから本当は、アンタを別の世界に連れて行かなきゃいけない。だけど、ずっと同じ仕事の繰り返しだね。少し退屈してるんだ。それに」

男はそこで一旦言葉を切って、意地が悪そうに笑った。

「俺、橋のヤツが嫌いなんだよ。だからアイツの思い通りにならないほうが楽しい」

そう言って豪快に笑う。修一は耳が痛くなった。

「ま、たまにはサプライズがあった方がいいだろ？ アンタ少し噂になってんだぜ。今までと違って楽しいことになりそうだし、ニイさんには期待してんだよ。俺が出来る限り助けてやるから、もう少し楽しませてくれよ、な」

バシン、と修一の背中を叩く。

痛みに顔をしかめると、叩いた当人はまた笑った。

「頑張りな。俺もサボってばっかいられないし、行くわ。アンタが困った時にや助けに来るぜ。そんじゃ、またな」

ぶらぶらと手を振って、名も明かさずに救世主は去って行った。ヒリヒリする背中をさすり、修一はまた歩き出した。飢えも乾きも、どこかへ吹き飛んでいる。不思議なことに、疲労感すらなくなっていた。

どうやらあの悪人相の救世主だけではなく、たくさんの人間がこの場所にはいるようだった。当たり前といえば当たり前だ。元々、

この場所は彼らが使うために存在するのだから。

だけど、何故さつきまでは気付かなかったのだろう。

大半の人は、修一の姿を見ると驚いて、道を退いた。話しかけようともしない。一度だけこちらから話しかけたら、逃げ出した奴ま
でいる。

さらに歩き続けると、道の途中に一人の老人が立っていた。灰色の山高帽に灰色のスーツ。顔はヒゲで覆われている。昔の映画にでも出てきそうな格好をしている。背筋をピンと伸ばしているのに、地面に杖を突いていた。真剣そのものの表情で目の前を見つめている。どこかで見たような顔だったが、思い出せない。

修一が近付いても、目も合わせようとしない。何かを考え込むように、じっと前だけを見つめている。何かあるのかと思って視線の先を追うが、何も変わらない乳白色の地面が広がっているだけだ。

相手もこちらを気につけないなら、わざわざ自分が気にする必要もない。

「どうして私たちが見えるようになったかと言うと」

突然、老人が喋り始めた。独り言かと思ったが、目をそらさずに修一を見ていた。

「キミが私たちがいることを知ったからだろう。つまり、キミが目を開けたからだ」

ボケているのだろうか？ 口調も見た目もそのようには見えないが、話に脈絡がなかった。

無視して先に進もうとしたが、こちらを見据えて話し掛けてくる以上、気にせずにはいられない。

「えっと……何の話ですかね？」

老人はじつと修一を見た。なんだか居心地が悪かった。ずっと昔にも味わったような感覚がして、気分が落ち着かない。

「キミはさつきまで一人きりだと思い込んでいた。世界には自分一人だけだと。だから私たちがいたことに、気付かなかったんだろ
うね」

どうやら老人は、ついさっき疑問に感じたことの答えをくれているらしい。

「はあ、そうですか」

正直に言つて、どうでもよかった。他に用事がないなら、さつさへ行つてしまいたい。

老人はニコリと笑つた。それだけで印象がガラリと変わる。

「知らないモノは見えないことが多い。たとえ存在したとしても。それに、存在していても見えないこともある……彼女を連れ戻したいと本当に願うなら、よくよく考えて行動することだ」

忠告をくれているようだ。何のことだかさっぱりだったし、ありがたいとも何も感じなかった。

「キミとは二度と会わないと思つていたんだが……まさか、招待を受けるとは。若者が絶望する世界は悲しいものだ」

また一人で話しを進める。痴呆の老人とは状況が違つようだが、厄介なことには変わりない。なるべく関わりたくないが、修一に向かつて話しかけてくる以上、無視するのも悪い気がした。

返事に困つていると、老人はそれ以上何も言わずに歩き出した。修一とは反対の方向へ。振り返りもせずに進む。杖の中ほどを手に握つたままだ。いったい何の意味があるのだろつ、本当に。

変なじいさんだな。

心の中で呟いて、修一はまた歩き出す。

またしばらく代わり映えのしない景色を歩いていると、道が枝分かれする地点に辿り着いた。

千鶴の居場所へ辿り着くには、オレンジの道を進む必要があると橘は言っていた。左の道は変わらない白銀色で、右の道は光が薄紫に変わっている。

彼の言葉を全面的に信じているわけでもないし、どちらにせよいずれかの道を選ばなければならない。修一は少し悩んでから、薄紫の道を進んだ。

突然、足元の感触が変わつた。歩いている道がコンクリートにな

っている。

いや、変わっているのは道だけではない。オフィスビルに囲まれた道路。立ち並ぶビル群。スーツを着込んだ人々が、蟻の行列のようゾロゾロと歩いている。

周りの風景が、現実のものへと切り替わっている。

見知らぬ場所。だが間違いなく、日本のどこかではあった。突然の変化に頭がつかないのか、軽く頭痛がした。

つまりこれが、別の現実に辿り着いたということなのだろうか。後ろを振り向く。大きな道路を挟んだ向かい側に、一際大きなビルが建っていた。先ほどまで見えていた景色はどこにも無くなっている。

ここに千鶴は居るのだろうか？ とりあえず、日本のどこであるかを知りたかった。東京近辺なら、電車を二時間も乗り継げば実家へと戻れる。

「あの、すみません」

通りすがりの中年男性に声を掛けるが、何の反応すら示さずに去ってしまう。突然声を掛けて怪しまれるだろうとは思っていたが、目も合わせてくれないとは考えていなかった。

忙しそうに歩いているところを話し掛けても、誰も相手にしてくれないかも知れない。それに、都会には突然声を掛けて勧誘するような、怪しげな業者もいる。だから無視されても仕方がないだろう。修一も上京した頃の頃に、絵画の無料展覧会をやっていると言われ、のこのこ会場へ入ったら、何十万もする絵画を売りつけられそうになった。手相を見せてくれと言われて話を聞いていたら、いつの間にか知らない場所へ連れ込まれそうになって、逃げたこともある。東京は怖い。

コンビニでも探して、最寄の駅までの道を聞こう。都会なら適当に歩いてもコンビニの一軒くらいは見つかるだろう。

「パパ！」

この場所に似合わない、小さな女の子の声が響いた。声の方向に

目をやると、高そうなスーツを着た若い男性の下へ、女の子が駆け寄っていた。

男性は満面の笑みで女の子を抱き上げた。そばにいる女性は、母親に見える。

忘れ物をした父親の会社へ、奥さんと娘が荷物を届けに来た。そんなところだろうか。微笑ましい光景だった。意識せずに眺めていると、子供を抱いていた父親と目が合った。修一は慌てて視線をそらす。じろじろと珍しそうに眺めるのは、失礼だ。

しばらく周辺をうろろして見たが、同じような光景ばかりが続き、すぐに迷ってしまった。通りを離れるとすぐに寂れた住宅街が続き、都会という予想も外れている気がする。修一の住む街と同じように、一部だけが突出して発達しているが、他は田舎、という状況だろうか。

目の前に大きなビルが現れる。最初に居た場所から見えた、ガラス張りのビルだ。完全に迷子になってしまった。千鶴も探せないし、ここから出ることも出来ない。

「ひよつとして俺、ヤバイんじゃないか」

修一が困ったように唸っていると、目の前から誰かが近づいて来る。先ほど、「パパ」と呼ばれていたサラリーマンだ。

まさか、自分に用事というわけでもないだろう。だが男性は修一と目が会うと笑みを浮かべた。間違いなく修一に近付いてきている。絵画の無料展覧会の会場でも紹介されるのだろうか。

「あのさ、キミ」

声を掛けられた。修一が警戒していると、それに気付いたのか、微笑みながら男性は続けた。

「えっと、聞きたいことがあるんだけど、キミは、どこから来た？」
「言われ、修一は返答に窮した。どこから来た？ 町名を言えば良いのだろうか？ 世界の外から歩いて来ましたとは、まさか言えない。」

「別に怪しんでいるわけじゃないんだ……ただ、キミを見ていたら

思い出して」

微笑んだままだったが、どこか男性の顔には翳りが見えた。疲れ
ているのだろうか？ 悲しんでいるようにも見える。

「僕はどこか別の場所から来たんだ。もつと遠いところから、この
現実へ。キミも、同じなんだろう？」

その言葉で理解した。つまりこの『現実』は、目の前の男性のた
めに用意されたものらしい。

招待を受けたのなら、元々居た現実で何らかの絶望を味わってい
たに違いない。

「俺は、知り合いを連れ戻しに来たんです」

正直に話すことにした。どちらにせよ邪魔をするつもりは無いし、
男性に干渉しなければ、相手も修一の邪魔はしないだろう。

「連れ戻しにね……はは、まあそうだろう。いくら幸せだって、消
えてしまう世界だからね」

男性は自嘲気味にそう言った。

消えてしまう？ 言葉の意味が理解出来なかったが、また嫌な予
感がした。心臓の鼓動が早くなる。

「キミの知り合いがどうかは知らないけど、僕はこの世界に残るつ
もりさ。戻って、長い苦しみを終えるよりも、ここで幸せなまま消
えていった方が良い」

「消える、って何ですか」

裏切って欲しい予想が、いくつも浮かんでは消えていく。

「聞いてないのかい？ 十分に幸福を味わったら、僕らは死ぬんだ。
世界ごと消えてね。幸せに包まれたまま死ぬなんて、良い終わり
方だと思うけど。僕は満足してる。だからきつと、もうすぐ終わ
りが来る」

最悪の予想の一つだった。疑問に感じていたが、あえて考えなか
った問題。

何の代償も無く幸福が与えられるわけが無い。古典的な物語では、
願いを叶える引き換えに悪魔は魂を奪っていく。現実的に考えれば、

タダより高いものはない。何であれ、必ず代価を支払わされる。

あの橘たち『案内人』が、何の見返りもなく人間を別の世界、幸せになれる現実へ連れて行くとは考えていなかった。必ず行動には理由があるはずだ。彼らにとって、修一たちを死なせることが目的なのだろう。

「死ぬだなんて……知らない、そんなの冗談じゃない」

千鶴が、本当に死んでしまう。何のために自分はここまで来たのか、わからなくなる。

「俺は、絶対に連れて帰ります。冗談じゃない。あなただって、現実の家族や友人が居るんじゃないんですか！」

語気が荒くなってしまう。結末を受け入れて、達観しているような男の態度に腹が立った。

「いるよ。家族も友達も。全部、ここにね。この世界にいるみんなだって二セモノなんかじゃない。本物の人間なんだよ、全員。僕の言葉で笑ってくれるし、怒らせてしまう時もある。家族を幸せにしてやりたいし、友達ともいつまでもいたい。そんな些細な願いが、ここでなら叶うんだ。いけないことかい？ 現実を選択する権利があるなら、僕はここを選ぶよ」

反論はできなかった。男性は自らの意志で選んだんだ。事情は知らない。どうして元々居た世界を捨てたのか、そこで何があったのか。何も知らない修一に、彼を責める権利は無かった。

「俺は……嫌だ。千鶴が死ぬなんて嫌だ」

「キミも、選べば良いじゃないか。ここに居るってことは、キミも招待されたんだろう？ 新たな世界への移動を受け入れれば、その子だって、キミの前にまた現れるよ」

「そんなのは絶対にイヤだ！ 俺の都合どおりに動く他人なんていない！」

自らの都合で何もかも上手くことが運ぶ世界。誰がそばに居たって、怒るのも笑うのもすべて、自分が無意識にそれを望んでいるから。いくら精巧に出来ていたって、全部二セモノだ。

修一の言葉に、男性は少し傷付いたようだった。目を伏せて言う。

「何もかも上手くいかないより、何でも思い通りになった方が、幸せなんだよ。大切な人たちも守れない現実よりも、幸せな今の現実を選ぶよ。誰だってね……僕はもう行く。さようなら。話しが出来て嬉しかったよ。でも、きっともう会うことはないだろう」

背を向けて、男性は振り返らずに歩く。

彼は、どうなるんだろうか？ このまま、消えてしまふのだろうか。

去っていく男性に、何も声を掛けられなかった。

軽いめまいを感じて目を閉じた。右手で額を押さえ、倦怠感の波が去るのを待つ。

目を開くと、白金色の道の上だった。極彩色の宇宙。何事も無かったのように、今までと同じ景色が続いている。それでも何故か、不気味に感じた。

修一は息を吸い込んで、大声で叫んだ。

「橘！ 聞こえるか、聞いてるんだろ！ 出て来い、どこだ！」

まるで山彦のように、声は何度も反響した。返答は、すぐに訪れた。

「大声を出さなくても、聞こえますよ」

振り返る。橘が平然と立っていた。半ば予想していたので、驚きもしなかった。

監視していたのだろう。修一がこの場所を歩き疲れて、精神的に衰弱した時、すぐに彼を別の世界へ移せるように。

「怒っているんですか？ 私ははじめに言いましたよ。招待を受け入れた人間にはすべてを説明します。貴方は受け入れなかった。だから説明も省きました」

今さら善人ぶる必要も無いからか、嘲るような口調だった。

「ふざけんな！ 千鶴も俺も殺すつもりだったのかよ！」

頭に血が昇る。掴みかかって、殴ってやりたかった。

「そんなに怒鳴らないでくださいよ。別に隠すほどのことでも無いですからね。知りたいのならすべて教えましょう」

付いて来いということか、橘は扉の先を指で示した。彼に続いて扉をくぐると、その先はターミナルへと続いている。球体のある口ビーだった。

金色の粒子が渦巻き、球体が輝いている。時々、お湯が沸騰するように粒子が弾け、きらきらと光る飛沫を散らせて、消える。

「世界は『願いを映し出す鏡』だと言いましたね。世界が生まれ、願いを実現させるためには、エネルギーが必要なんです。十分にすべての世界にエネルギーが行き渡っているかを監視するのが、本来の私たちの仕事でした」

球体の中の上半分は、真っ黒な塊だった。黄金の輝きは、半分も満たされていない。

橘が、その球体に近付き、掌でなでるように触れた。遠近感が掴めず、球体の大きさがいまいち実感出来ていなかったが、橘と比べてみると、球体は半径だけで数十メートルはあるような、巨大なオブジェクトだった。

「エネルギーが、枯渴しかけているんです。この物体は、そうですね、エネルギーの貯蔵タンクでしょうか。金色に輝いているのが、世界全体に流れるエネルギーです」

きらめく粒子は、太陽の光に照らされる波を思わせた。一瞬ごとに形を変えながら、光を照り返していく。

元々どれだけのエネルギーがあつたのかはわからない。半分にも満たない今の状況がどれだけ危険なのか、判断のしようがなかった。「エネルギーがなくなれば、当然すべての世界が活動できなくなります。その結果がどうなるかは、私たちにもわかりません。どう転んでも、愉快な結末にはならないでしょうがね」

そこで橘は、再び上を見上げた。無数の星が輝いている。赤や青、緑や黄、様々な色に輝く、異次元の星々。

今、薄紫に輝く星が、一際大きな光を放った。一瞬の放出の後、星は宇宙に溶けるように消えた。その後には、ぽつかりと黒い穴が空いている。

遙か遠くの空に、輝く流れ星が飛んでいた。ゆつくりと宙を旋回していたその光は、粒子を撒き散らしながら、広場の球体へと吸い込まれていく。

「世界を作り、活動させるエネルギーは、人間が一生を終えた際に蓄積されるんです。今のを、見ましたね。死んだ人間が感じていた幸福が大きければ大きいほど、エネルギーは大量に生まれます。ですが、不幸を感じたまま人生を終えた人間は、エネルギーになりません。むしろ、マイナスのエネルギーを発揮し、正常なエネルギーを消してしまいます」

つまり、今見えた金色の輝きは、人が死んだ際に生み出されたエネルギーか。まるで人間の魂のようだと思った。

人間が食事をしてエネルギーを得るように、世界は人間の魂を食べて活力を得る。体に悪い魂を食べれば、体調を崩すというわけだ

……

「昔は、プラスのエネルギーは大量に得られました。私たちは世界をただ見ているだけで良かった。それが私たちの仕事だった。順調に、何もかが上手く回っていました。ですが、貴方たちの生きる世界は、ここ数百年ほどで、著しく多いマイナスのエネルギーを放つようになった。かつてないスピードで、世界からエネルギーが奪われています」

それは、不幸な人生を終える人間が増えたということだろう。一体何が悪いのか、修一にはもちろんわからない。

「このままではいつか、エネルギーが枯れ果ててしまう。だから私たちは不幸な状態で人生を終える人間を減らし、エネルギーをプラスに転じようと考えました」

今度は真剣に説明を聞く。ようやく修一にも、彼らの意図が見えてきた。

「人生に絶望した人間を、別の世界へ案内する。招待された一人だけの願いを世界は映し出します。都合よく作り代わり、最も幸福な状態、理想どおりの現実を維持する。そして人生に満足しければ、やがてその世界は消失します。そこに居る人間も命が消え、多くのエネルギーとなって還元される。そうすれば世界は再びエネルギー満ちる」

つまり彼らは、はじめから修一たちを死なせるのが目的なのだ。エネルギーを得るために、わざわざ回りくどい方法で自分たちを『招待』した。現実には絶望している人間を連れて来る。都合のいい現実を受け入れやすいように根回しをして。

彼らの行いが間違っているのかは、誰にもわからない。ここは日本では、いや地球ですらない。法律も常識も無い場所で、善悪の判断が人間に下せるわけがない。

神様がいたとしたら彼らを責めるだろうか？ それとも、修一を罰するだろうか。往生際の悪い奴、素直に幸せになつて死んでしまえ、と。

だけど、どんな理屈だろうとこのまま千鶴を死なせるのなら、修一にとつては悪だ。

「一人の世界で消滅すると、貴方たちの世界で消える何万、何十万人分ものエネルギーになるんですよ？ 良い手だと思いませんか？」
「お前たちのやってることは、人殺しと同じじゃないのか」

目的のために誰かを殺す。修一には、橘の話をそうとしか受け止められなかった。世界がどうなると言われたところで、実感しようがない。

その言葉を冷ややかに笑い飛ばし、橘は毒のある笑みを浮かべた。まるで得体の知れない化け物のように、恐ろしく感じた。

「かも知れませんか。ですが、世界というのはとても不安定で、壊れやすいものなんですよ。放っておけばすぐに壊れてしまう。だから私たちが管理して、保護しているのです。すべての世界を正常に保つために、私たちは働く。貴方たちは幸福な一生を送れる。誰が

苦しむんですか、それで」

人の死によつて世界が生きるのを、橘は常識として目にしてきたのだらう。それがいつからなのかは知らない。彼らにとって、誰かが死んでエネルギーになるのは歓迎するべきことであり、死は恐怖や忌避の対象と為り得ないのだ。

死の概念がまるで違う。

「どうするんですか？ 私たちの招待を受け入れるか、受け入れずに元居た世界へ戻りますか」

バカにするように笑つて、橘はその後を続けた。

「それとも、無駄な努力ですが彼女を探しますか？ 貴方が疲弊しきつて諦めるまで、いつまでも無駄な足掻きを続けていいですよ」
「言われなくたってそうしてやる！」

橘の言葉に怒つたわけではない。修一は元よりそのつもりだった。たつた今くぐつた扉を通り抜けて、再び修一は世界を繋ぐ通路へと出た。

時間が存在しないと橘は言った。だが、千鶴が幸福を感じて、満足したら、死んでしまう。そうなれば、自分がここに居る意味がない。

もう二度と、千鶴に会えないかも知れない。修一は焦りと恐怖を感じ始めていた。

「予想以上に頑固な人だ」

橘は溜め息と共に吐き出した。遠巻きに彼らを眺めていた仲間たちをジロリと睨むと、彼らは慌てて仕事に戻り出した。

ターミナルと現実を行き来して、招待状を送るのは誰にでも出来ることではない。ターミナルに生きる人間のほとんどは、世界の管理をするための知識しか持っていない。だから、次はどんな人間が来たのかを好奇の眼差しで見ってしまうのも無理はない。特に、今回

のようなパターンははじめてだ。

今まで彼が連れて来た人々の中の誰一人、本間修一ほど強く反抗をする人間はいなかった。

誘いを拒否する人間なら何人も居た。未知への恐怖や、元々の世界に残した人への心配。だが、現実では叶えられない幸福を味わい、後顧の憂いも無くなれば、簡単に誘いを断れなくなる。

元の世界に戻れば、いつ死ぬかわからない。だが案内人が用意した世界なら、死にたくないと思う限り生き続けられる。体感時間で何十年でも何百年でも。擬似的な不老不死だ。

誰だって現実には絶望する。現状に不満が無く、安定した日々を送っている人の中にも絶望は潜んでいる。避けられない不幸、変えられない過去、見えない未来。絶望はそういった不安に付け入り、表に出ようと鎌首をもたげている。些細なケンカや病気をするだけでも、人間の心が屈服するには十分だ。

そんな時に理想通りの現実というエサをちらつかせれば、誰もが飛びついてしまう。人は、楽な方へ流されてしまう生き物なのだから。

特に橘たちが連れて来るのは、元々どうしようもない現実を抱えている人々。そんな人たちが、甘い現実逃避に逃げるのは必然だ。

それなのに、あの本間修一は受け入れない。絶望していることを認めようとしらない。

橘には、彼という人間が良くわからなかった。元々、ターミナルで生きる人間と世界の中で生まれた人間では、価値観や考え方がすべて違う。時計で測るなら、千年以上生きている橘だが、いまだに人間の考えはわからないことだらけだ。

「辛気臭い顔だなあ」

声が出た方向に振り向くと、悪人面をした小男が立っていた。

橘と同じ案内人、城島。二人は、最も古くからターミナルに生きる案内人だった。

時間が存在しないのと同じように、ターミナルには誕生と死亡が

存在しない。気付いた時には、橘はターミナルに居た。案内人たちはみんなそうだ。いつから居るのか知らないし、いつまで居るかも知らない。『はじまり』と『おわり』が無い。変移や成長もしない。

「何か用事ですか？」

冷たく返しても、城島は気にした様子もない。

「別に、なんもねーよ。ちょっと気になっただけさ。なんであの男、招待したんだ？」

ターミナルの管理や世界を保つのは、案内人なら誰にでも出来る。だが、招待状を出せるのは彼ら二人しかない。

「絶望なんてこれっぽっちも感じてないって目だったぞ。あんなの呼んだって、マトモに仕事になるわけねえだろ。楽しいから俺は良いんだけどよ」

城島が招待状を出していないのなら、橘が出したことになる。言われて、はじめておかしいと気が付いた。

「彼を呼んだのはアナタでしょう？ 私は、招待状を出していませんよ」

「何だって？」

城島が驚いたのはじめて見た気がする。嬉しくともなんとも無かったが。

「だってお前、迎えに行ったじゃないか。招待状を出した人間が迎えに行くって約束だろ」

「それはそうですが。アナタが迎えに行かないから、てっきり忘れていたのかと思ったんですよ。バカだし」

「おい、てめえ」

隠そうとも思っていないが、彼は城島が嫌いだった。

だいたい、井上千鶴を招待したのはこの男だ。それなのに、自分ばかり目の敵にされて、本間修一に噛みつかれる。

「アナタじゃないとしたら、一体誰が招待状を送ったと言うんですか？」

うなるような城島を無視して、橘は考える。

一見無秩序に見えるターミナルという世界にも、ルールがある。死んだ人間が生き返らないことや、こぼれた水が戻らないのと同じ、自然法則。

案内人たちは成長しない。自分という存在を知覚した瞬間から、必要な知識はすべて持ち合わせている。勉強や経験から知恵を身に付けるわけではない。時間が存在しないから、新たな知識も吸収されず、考え方も変えられない。消える瞬間まで変わらない。

直接世界に出向いて、招待状を作り出せるのは、生まれつきその方法を知っている橘と城島の二人だけ。それも法則の一つだった。招待状を受け取った人間を、彼らは知覚することが出来る。直接監視して、招待を受け入れそうにもない人間だったら、また新しいターゲットを見つけるために奔走する。

橘が修一を見つけたのは、単なる偶然だった。招待状を受け取っているのはすぐにわかった。だが、絶望しているとは思えないその姿を見て、また城島が適当な仕事をしたのだと思っていた。

不可解な状況を前にして、城島だけは楽しそうに笑っていた。

「さあな、あのジジイはどうなんだ？ あいつ、真面目に働かないだけで、多分俺らより知識持つてるだろ？」

橘が黙っていると、城島は鼻を鳴らしてその場所を離れた。ターミナルに用意された『部屋』の一つへと入っていく。

ターミナルには目的ごとにたくさんの『部屋』がある。城島が入っていったのは、それぞれの世界を繋ぐ道をモニターするための『部屋』だ。

また野次馬根性を発揮して、本間修一の様子でも見ているのだろう。そんなに気に入ったのなら、井上千鶴のいる世界まで案内すればいいのだ。中途半端に手を貸すくせに、役に立つことをしない。城島は誰に対してもそうだ。だから橘は彼が嫌いだった。

城島が入ったのとは別の扉を開く。最も大きな世界へと通じる扉。まだまだエネルギーが足りない。もっと絶望する人間を探さなければ

ばならない。

他にやらなければならぬことがたくさんある。不可解な謎も気に入らない男のことも、彼はひとまず考えるのを止めた。

大見得を切ったのは良いが、どうすれば良いんだろう。本当に闇雲に探し回るしかないのだろうか。

白金色に輝く道を歩きながら、修一は考えた。

何日も何日も歩いた気がする。それだけ頑張つて、辿り着いた世界はたった一つ。

死ぬことが無いとしても、不可能な話じゃないか？ たった一つの正解を見つけ出すなんて。

どうして、千鶴のためにそこまで頑張る？ 幼馴染で、確かに昔から面倒を見てきたけど、結局は赤の他人じゃないか。あいつが選んだことで、俺が苦しむ必要があるのか？

考えるまでもなかった。答えはすぐに出た。

ある。あるに決まってる。小さい頃から一緒に居て、家族と同じなんだ。こんなところで見捨てられない。俺のためにも連れて帰る。どれだけ時間が掛かっても、絶対に千鶴のところに行つてやる。

金色の道が四つにわかれている。修一は特に悩みもせず、右から二番目の坂道を進んだ。他の三つは上り坂だったから、昇りよりは降りの方が楽だろうと、そんな単純な決め方だった。

しばらく、道が螺旋階段のようにぐるぐる回つて続いた。直線に戻ると、足元の色が変化している。鮮やかなオレンジ色だ。

橘の言葉に偽りがないとすれば、千鶴の居場所を見つけるには、オレンジ色の道を進む必要がある。

この道が、千鶴の世界へ続いているのだろうか。まさか、いきなり正しい道を見つけたのか？ いくら何でも都合が良すぎる。

期待と不安で胸の鼓動が早くなる。駆けるような速度で進んだ。

突然何かに足を取られ、目の前に現れた植え込みに倒れこむ。細かい枝が引つ掛かり、手の甲に小さな引つかき傷を作った。

悪態を吐きながら立ち上がる。土と葉っぱを手で払った。

辺りを見回すと風景が一変していた。どこか見覚えのある景色。どうやらまた、ターミナルから別の世界へ辿り着いたらしい。坂道の途中に修一は立っている。下の方向へは小さな林と、その先には住宅街が見渡せた。遠くの方で電車が走っているのも見える。上方にはいくつかのマンションと、広い公園がある。更に昇っていけば、学校があるはずだ。

自分の居場所が突然変わり、歩道のわきに作られた植え込みに倒れこんでしまったらしい。

すぐ近くを女子高生が歩いて来る。ひょっとして今を見られていたのだろうか。修一は慌てて道のはじに退いた。何事も無かったかのように、女子高生は修一の脇を通り抜ける。まるで、彼の姿が見えていないようだった。

何人かの生徒が、まばらに坂を下っていく。その制服にも見覚えがあった。修一が通っていた高校だ。千鶴が通っている高校でもある。

ここに、千鶴は居るのだろうか。修一は逸る気持ちを抑えきれずに、坂を駆け上がった。今の時間なら下校前の千鶴に会えるかも知れない。

赤信号を無視して、道路を横切る。校門へと至る最後の坂を昇り切った。誰かに見とがめられはしないかと、校門をくぐった時に一瞬だけ気に掛かった。

関係者を装って堂々としていれば、怪しまれたりはいしないだろう。誰かに何かと聞かれたら、母校を訪れたOBだと言えればいい。まだ卒業してから四年も経っていない。修一を覚えている教師もいるはずだ。

生徒が次々と昇降口から出て来るが、修一を気に掛ける生徒は一人もいなかった。ちらりともこちらを見ない。視界にすら入ってい

ないように振舞う。怪しまれないのは楽で良かったが、不自然な状況を疑問に思った。

千鶴は部活に入っていない。運動神経には自信があったし、何人かの友人に誘われはした。それでも、放課後にみんなで遊ぶ楽しみを削りたくなかった。

「駅前にさあ、服屋出来たじゃん。行ってみようよ、安いらしいし」「うん、いいよ。すぐ行く?」

彼女を中心として友人たちが集まり、グループが出来る。千鶴はいつでも明るく、誰とでも仲良くなれた。誰もが、彼女と一緒にいることを望んだ。小さな頃からそうだったから、いつも友人がそばにいた。幸せで有り触れた、日常の光景だった。

一緒に買い物に行くのも楽しいし、ゲームセンターで時間を潰すのも良い。教室で、こうやってただ話してるだけでも満足だった。みんなで話し込んでいると、下校時間を迎えてしまうこともある。そうしていつも担任の先生に怒られてしまうのだ。

学校では友達たちに囲まれて、家に帰れば、大好きな両親が居る。他に望むべきものはない。彼女は幸福を感じていた。

幸福が一生続くと信じて、疑いもしなかった。

他愛もない話で盛り上がりながら、昇降口まで降りる。そこに、一人の男性が立っていた。校舎の中をのぞき込んで、通り過ぎる生徒を目線で追っている。誰かを探しているかのように。

靴を履き替える生徒たちも、一緒に居る友人たちも、誰一人として彼の存在を気に留めない。

誰だろう。どこかで会った気がする。だけど、思い出せない。

心の奥底で、何かが蠢いた。胸の奥、触れられない部分をくすぐるような感覚に戸惑いを覚えた。千鶴は無意識に制服の襟元を掴みながら、彼を見ていた。

男性の視線が、千鶴とぶつかる。

彼は一瞬だけ不可解そうに眉根を寄せて、それから驚いたように目を見開いた。

「千鶴！」

この世界には居ないはずの、修一の声。幼い頃から聞き慣れた声を聞いて、千鶴は瞬間的にすべてを思い出していた。

運動も勉強も苦手で、愛想も悪く友達はいない。それが本当の私だ。今ここに居る井上千鶴は、自身の理想が作り出した二セモノだ。友達なんて一人もない。両親は、十年以上前に死んでいる。彼女の居場所はどこにもない。ここは、彼女の居た現実じゃない。

一生続くと信じていた借り物の幸福は、あっという間に消え去っていた。

修一が知る千鶴とは、まるで別人のように見える。外見は何も変わっていない。それなのに、一目見て彼女だと気付けなかったほど、雰囲気が変わっていた。満面の笑顔。明るい声。自信に満ちた姿。頭が悪く愛想も悪い、修一が知っている千鶴はそこにはいない。きつとこれが、橘の言うところの『幸福』と『不幸』の違いなのだろう。

あんなに輝いている笑顔は見た記憶が無い。それだけではない。今、怯えるように修一を見る千鶴の顔も、彼の知っている姿とはかけ離れていた。

あからさまな拒絶の意志を感じる。修一が現れたことに失望をしているのは間違いない。

「帰ろう」

彼女に向かって何を言えば良いのか思い付かず、修一はそう呟いていた。それが最も状況に合っている言葉だと思ったのだ。

帰ろう。彼らが元々居た世界、現実へ。

「どこへ……どこへ帰れば良いの」

怯えるような声だった。修一が一步近付くと、彼女はそれと同じだけ退いた。

周りの人間は、誰一人動かない。一時停止をされたDVDのように、行動の途中で止まっていた。昇降口に置かれた時計も、動きを止めている。

「決まってるだろ、俺たちの居た場所へだよ。ここがおかしいって、気付かないか？」

焦りを感じていた。どうやって説得するつもりだったのだろうか。

何も思いつかない。簡単に考え過ぎていた。

元居た現実に絶望をしていたはずだ。だから千鶴は招待を受けて、今ここにいる。自分のやろうとしているのは、彼女を幸福から引きずり下ろし、拒絶した辛い現実へと押し込めることだ。

「帰りたくない」

それは当然の答えだった。千鶴は元の世界に戻るのを望んでいない。修一の居ない場所を選んだ。今ここにある世界を、どんな願いも受け入れてくれる現実を選んだ。今さら、どうやって連れ戻せば良い。まさか、無理矢理に引っ張っていくわけにはいかない。

「お前……ここに居たら、死ぬんだぞ。説明聞いたんだろ。お前と一緒にこの世界が全部消えるんだ。それで良いのかよ」

昔とは違う。自分が千鶴を好き勝手に連れ回していた頃とは。あの頃は、千鶴が楽しめるように考えていた。今は、自分の都合しか考えていない。

自分の都合で彼女を連れ戻そうとしている。それなのに、まるで彼女のために来ているような、恩着せがましい言葉しか浮かばない。「でも、ここは私の思い通りになる。なんだって上手くいくもの。

誰も私を傷付けないし、欲しいものは全部ある」

「それがおかしいって言うてるんだ！」

「おかしくたっていいよ。何もかも上手くいかないまま生きるくらいなら、ここで一生を終えたほうがいい！」

「ふざけんなよ、本気で言ってるのか！」

焦燥感は苛立ちに変わる。つい声を荒げてしまった。

ダメだ。自分はいつたい何を言っている？ 言い争ってどうする。怒っても意味がない。怒鳴るなんて、逆効果だ。わかっているのに、上手い言葉が出てこない。

ただ何も言わないで黙っていたら、永遠に彼女を失ってしまうような気がしていた。だから、何か言わなければ。

千鶴は顔を真っ赤にして、涙で潤んだ目をしている。

「本気だよ。シュウちゃんに私の気持ちなんて、わかるはずない。私はここなら何でも出来るんだから。絶対帰らない。一人で帰って」彼女の言うとおりだった。何を考えているのか、わからない。小さい頃から千鶴を見てきて、根本的な部分でお互いにわかり合えていると思っていた。

今は何もわからない。彼女をこんなにも遠く感じたのは、始めてだった。

苛立ち、不安、恐怖、たくさんの感情が絡み合って、言葉が見つからない。

焦りが思慮の無い言葉を生む。何かを言わなければいけない。深く考えもせずに、ただ思いつくままに言葉を投げ付けた。

「誰のために俺がこんなところまで来たと思ってるんだ！ いつも人も人に迷惑ばっかかけて！」

本当に言いたいことは、そんなことではなかったのに。

「お前一人じゃ何も出来ないクセに！」

血の昇っていた頭に冷水を浴びせられたように、最も愚かな選択をしたと、気付いた時には手遅れだった。

千鶴の両目からは涙が零れていた。唇を固く結んで、嗚咽を噛み殺している。彼女が泣くところは何度も見てきた。だけど、自分が彼女を苦しめているのははじめてだ。こんな泣き顔は、はじめて見た。見たくはなかった。胸を突き刺されるような、鋭い痛みがした。違う。そんなことを言いに来たのではない。ただ自分は、千鶴と

……
「私は、幸せで居られる場所を見つけたの！ もう邪魔をしないで！」

視界を眩しい光が貫いた。目が眩んで、開けていられなくなる。強く風が吹いているのを感じる。立っているのも辛い、修一は膝を地に付いた。

脳を強く揺さぶられるように、グルグルと世界が回る。とうとう修一は倒れこんだ。

再び目を開けると、見慣れた天井がそこにはあった。

木目の浮かんだ茶色の天井。しばらくは呆然と見上げていた。軋んだ足音が、廊下から聞こえる。窓の外からは、唸るようなエンジン音。壁の時計がカチカチと一定のリズムを刻んでいる。

立てかけられたアコースティックギター。埃だらけの机。たくさん書物が詰め込まれた本棚。ガラクタだらけの乱雑な室内。

間違いなく、修一の部屋だった。

一瞬、夢を見ていたのかと思った。いや、そう思ったかった。さつきまでの出来事が現実であるはずがない。橘なんて男は実在しない。ターミナルなんてくだらない妄想だ。

それに、自分は千鶴を傷付けたりしない。

携帯で日付を確認する。修一が橘に会いに行った、あの日のまま。時刻は午前六時。修一が家を出る十時間前だ。

やっぱり間違いない。くだらない夢でも見ていたんだ。

右手を明かりにさらして見る。土で汚れた手のひらと、引っかいたような傷が残っていた。

いくら言い聞かせても、どうしても否定できない。今まで見てきたものは、現実の光景だ。

失敗した。千鶴を連れ戻せなかった。それどころか、彼女を余計

に苦しめてしまった。

千鶴は苦しんでいるなんて、一度も言わなかった。自分が一番そばにいたのに、現実を捨てるほどに絶望していたことに気が付かなかった。苦しんでいる素振りを見せていただろうか？ 今はもうわからない。

ただの幼馴染じゃないか。結局は赤の他人だ。苦しんでいる時に心も打ち明けられないような他人。一緒にいた時間は絆の深さには関係ない。

両親を亡くした可哀相な女の子を相手にして、自己満足に浸っていただけだ。自分より弱い相手を、哀れな女の子を大切にすることで、まるで自分が立派な人間になったように思えて、調子に乗っていた。

千鶴のため、彼女のために、そうやって言い訳していた。全部ウソだ。本当はすべて自分のためなのに。

引っ込み思案で考えていることもろくに言えない、頭が悪くて愛想も悪い女の子。それでも自分にだけは心を開いていると思っていた。誰かに必要とされたかった。自分は頼りになる人間だ、誰かに必要とされる人間だと信じたかった。だから、自分を必要としてくれる千鶴のそばにいた。

きつとそうして、誰かを助けることで優越感に浸りたかったのだろう。自分の能力をひけらかして、良い気持ちになっていただけだ。昔から修一は何でも器用にこなしてきた。正反対に、千鶴は一人では何もできない、困った時にはすぐに修一を頼ってくる。そう信じていた。ただの自惚れだ。彼女は誰にも頼っていない。ずっと一人で苦しみを抱え込んでいたのだろうか。

あまりにも利己的だった。気付いてやれなかった。千鶴が彼を置いて消えたのも、当たり前だ。

もう諦めよう。もういいだろう。あいつが幸せだっていうなら、無理に連れ戻すこともない。家族を養うためにやらなければならぬことはたくさんある。自分の将来だって考えなければいけない。

千鶴のために時間を使つてばかりもいられない。

またウソを並び立てて、自分に言い聞かせた。

自己嫌悪と後悔の波に襲われる。もう、千鶴とは会えない。彼女は、自らが生きる現実を選んでしまった。

ラーメン屋は相変わらず客が来ない。退屈な時間は苦痛だった。千鶴のことを考えてしまう。

夜、工場で働いている時間だけが救いだった。きつい肉体労働は、細々と考え事をする余裕をなくしてくれる。

それなのに、工場での勤務は今月で最後だと言われた。まだ働き始めたばかりだというのに、突然の減産で、たくさんの従業員が解雇されるらしい。つまりは、リストラだ。

何人かの従業員は、交渉を続けて寿命を少しだけ引き伸ばそうとしていた。自分や家族の生活が掛かっているのだから、当然かも知れない。

必死になる彼らを、修一は冷めた目で見ていた。バカバカしい。どうせ終わりなら、今すぐに終わればいい。

何日も何日も、気分が晴れることが無かった。母さんも幸司も修一を心配したが、「疲れてる」とだけ言って、二人ともなるべく顔を合わせないようにした。

一度だけ、黒田から電話があつた。無視して出ないでいると、すぐにそれはメールに切り替わった。

『今度休みの日でもパークと遊びに行かない？ 臨時収入あつたんで、おごりますよ！』

どうせ幸司が気を回して、黒田にでも伝えたんだろう。余計なことを。

修一はそのメールも無視をした。今は何もしたい気分になれない。誰ともいたくなかった。

一週間が過ぎ、二週間が過ぎ、気付けば工場勤務が最後の日になっていた。

交渉も無駄に終わったらしい。みんな自分のことで精一杯な中で、竹中だけは修一を心配してくれた。

休憩時間、ベンチに座って休んでいると竹中が横に座った。軋むような音をベンチが立てた。

「どうしたのさ、暗い顔しちゃって」

「そりゃあ……クビですから、へこみますよ」

本当の理由は言わなかった。誰かに理解されるような苦しみではないし、してもらいたいとも思っていない。

アンタだって解雇されるのに、よく笑ってられるな。

心の中でそう呟いた。愛嬌のある笑顔が、今は気に食わなかった。「確かになあ。困っちゃうよなあ。社食の不味いカレーがもう食べないかと思うと悲しくて……。でも僕あこれをチャンスだと思ってるよ。本間くんも何かやりたいこととかあるならさ、これを機にやってみればいいじゃない」

的外れなアドバイスに、思わず修一は苦笑した。

「こいつ、ずいぶん的外れなこと言ってるやがるな。って顔してるけど」

「いや……全然、まったくそんなことは思っていないです」

内心を言い当てられ、ヒヤリとした。竹中は気付いたのか気付かなかったのか、二重アゴを震わせて笑った。

「無駄にキミより長く生きてたわけじゃないよ。こう見えても人の心配ごとを解決するのは得意なんだ。何かあるなら、言ってくれば力になるけど」

「いったい誰が力になれると言うのだろう？ 正直に言って、一人にして欲しかった。」

しばらく考えてから、修一は言った。

「幼馴染の女の子がいたんですけど、そいつ、一年前に死んだんですよ。事故で。それを今さら、思い出しちゃって」

「なるほど……なるほど、それは……」

何度も頷きながら竹中は考え込んでいるようだった。

どうせ、誰も力になれはしない。わかったなら、さっさと一人に
して欲しい。

「力になれないな」。前向きにもしてあげられないし、同じ目に遭
ったことないから気持ちもわからないし、僕は何て言って慰めれば
いいかもさっぱりわからないよ」

ずいぶん正直に言う。ありきたりの言葉で同情や理解を示される
よりは、よっぽど良かったが。

「でもね、黙ってた時よりは楽なんじゃない？」

竹中はまた笑った。贅肉で膨れた腹をパシパシと叩いた。

「そうっすね……」

修一は小さな声で返すだけだった。

その日の仕事が終わったあとに、みんなで酒を飲んだ。竹中が知
り合いが経営する店を貸し切ってくれたのだ。名目は『解雇記念』
と、不謹慎極まりなかったが、竹中に言わせれば「新しい門出に乾
杯」の一言で済むらしい。

「ところで本間くんはさ、次の仕事決まってるわけ？」

隣に座った竹中が聞いてくる。妙に修一を気にかけるのは、休憩
時間の話を気にしているからだろうか。

「いや、何も決まってるないっす。竹中さんはどうなんすか？」

ふふん、と自慢気に鼻を鳴らす。言いたくて仕方なかったのか、
多少興奮気味になっていた。

「実はね、僕はずっと夢だった自分の店を持つことになったんだ」
「店、ですか？」

禿げかけた頭と、丸々した体に短い手足。愛嬌があるから、居酒屋
の店主でもやれば似合いそうな風貌だ。

「うん。バーのマスターをやるんだ」

予想外の答えに思わず失笑してしまった。カウンターの向こうか
ら手が届くのだろうか。

「共同経営だけだね。そこでキミに相談なんだけど、バーテンとし
て働く気ない？　うちの店で」

最後の一言を強調するように竹中は言った。

「むさいおっさんが二人でやってる店よりは、若い人がいたほうがいいし、イケメンが一人でもいれば女の子受けするしさ」

やりたいとも思わなかったが、悪くない誘いだ。また明日から職を探すよりは、ずっと楽でいい。

「しばらく考えさせてください。すぐには、決められないんで」

咄嗟にウソを吐いた。今は、何も考えたくない。自分の将来も家族のことも、どうして考えなければならぬのだろうか？

「うんうん、やる気になったら電話してよ」

その日は無理をして浴びるように酒を飲んだ。結局、どれだけ飲んでも気分が晴れることはなかった。

仕事や学校へ向かう人の波に逆らって家へと帰る。平日の朝から酔っ払ってふらついている修一を、何人かが眉根を寄せて見た。睨み返すと、慌てて顔を逸らす。

自分の部屋へ戻り、倒れこむようにベッドに横たわった。

気持ちが悪い。頭の中身をかき回されているような感じがした。

しかも千鶴のことが頭から離れない。最後の会話が、いつまでもこびり付いている。

千鶴は死んだ。もうこの世には居ない。

いくら自分に言い聞かせても無駄だった。本当のことを知ってしまった。千鶴が死んだのではないと覚えている。誤魔化しが効かない記憶に、どうしようもない現実。

修一はため息を吐いた。気分の悪さは少しも解消されない。

眠りに落ちる直前、部屋の扉が、強くノックされた。陰鬱な気分を逆なでするような音を聞かされ、思わず舌打ちする。

「兄ちゃん？ いるの、入るよ」

こちらの返事を待たず、幸司が部屋に入ってきた。ベッドに横たわったまま睨むように見るが、幸司は気付いた様子もない。

「ねえ、これ見てよ。今月の家計簿。ヤバイって、支出ばかり増えて収入が減ってて、このままじゃまた食っていけなくなるよ」

放っておいて欲しい。一体何を心配しているんだ。

「うるさいな、金なら稼ぐから大丈夫だよ。来週には夜勤の給料も入るだろ」

つい冷たい言い方になってしまふ。苛立ちが抑えられない。

「収入が増えたって、支出も増えたら意味ないよ。兄ちゃん」
返事をする気分にもなれなかった。

幸司の言っているのは大事なことだ。しっかりと考えなければならぬ。

だからどうした？ 今はそんなこと、どうでもよいとは思えなかった。

そんな修一の様子に気付いたのか、顔色を伺うように幸司が言う。
「酒飲んでるの？ 今日の夜も仕事でしょ？ 大丈夫？」

「今日も明日も仕事なんてねえよ。昨日で最後だ」
修一が言つと、幸司は驚いたようだった。

「なにそれ、どういうこと？」

口を滑らせた。修一は舌打ちする。あとで説明をするつもりだったが、言ってしまったものは仕方がない。

「リストラだよ。役に立たなくなったら捨てられるんだからな、バカバカしい」

自嘲するように続ける。

幸司は口をへの字に結んで、困った時の口調で言った。

「兄ちゃん、ホントにどうするんだよ、今働けるのは兄ちゃんしかないんだから」

「わかってるよ、いちいち言わなくても」

言葉を止めることは出来なかった。苛立ちばかりが高まって、まったく気分はよくならない。

「だいたい、店を潰して働けばもっと稼げるんだよ。誰のために店続けてると思ってるんだ」

「そんな言い方……」

「必要ないだろ、あんな店。さっさと潰せば良かったんだ」

幸司は傷付いた表情で、修一を見た。

小さな棘が刺さるように、胸がちくちくと痛んだ。思いつくまま口にしたことを、修一はすぐに後悔をした。

最終的に、店を継いだのは、自分の意志だ。幸司や母を言い訳に使すべきではない。

「お父さんが大事にしたものぐらい、なんでわかってあげないんだよ！」

すぐに謝れば良いのに、修一は背を向けたまま何も言わなかった。言えなかった。間違っているのは自分なのに。間違っているのがわかってからこそ、言葉が出なかった。千鶴を相手に過ちを犯したばかりだ。それなのに、また同じ失敗を繰り返している。

幸司はそれ以上何も言わず、部屋を飛び出した。足音が遠のく。建物を震わすかすかな震動から、幸司が外へ出て行ったのがわかった。

修一は悪態を吐くと、拳で壁を殴った。手がじんじんと痛んだ。それだけだった。気分は少しも晴れなかった。

もういいだろう。どうしてがんばる必要がある？ 何で俺が昼も夜も働かなきゃならない。何で死んだ幼馴染のせいで苦しまなきゃならない。バカバカしい、俺の知ったことか。結局無駄だったじゃないか。

どんなことだって、諦めなければ上手く行く。ずっとそう考えて生きていた。失敗を繰り返しても、必ず最後には上手くいく。事実、今まで何だって彼は上手くやり遂げた。

無意識に唇を噛み締めていた。悔しかった。こんなにも世の中が思い通りにならないとは、感じたことがなかった。

心が折れた気がした。格好付けて誰かを助けたいなんて願っても、大切な人を誰も、それどころか自分一人救えない。

枕元に置かれていた、オレンジ色の封筒。乱暴に開けられたそれを、修一は無意識に触れていた。

橘は言っていた。絶望する人間を招待していると。今の自分には

ぴったりじゃないか。

自嘲的な考えを捨てられなかった。肉体的にも精神的にも疲れていた。ただ眠りたい。そう思っても、意識はなかなか眠りへ落ちていかない。

もしもあの場所、ターミナルで橋の誘いを受けていたら、こんな苦しみを感ぜずに済んだのだろうか。どんな願いでも叶う世界で、幸せに生きられるのだろうか。

抗いがたい誘惑だった。あの時の、もうひとつの現実で味わった高揚感が蘇る。

そうだ、ずっと熱中できる何かを探してきた。何か夢を持って、そのためにだけに生きたいと願っていた。夢と希望に溢れた現実。家族と友人に囲まれ、栄光と幸福の未来だけが待っている。今の現実とは比べ物にならない幸せ。

千鶴もこんな気持ちを味わっていたのだろうか。

それを望んで、何が悪い？

その日の夜、修一は再び森の入り口を訪れていた。招待状に記されていた、あの場所を。

満月だった。雲ひとつない冬の空に少しだけの星が輝いている。星座の正しい形を、オリオン座だけは覚えている。小さな頃から星は好きだった。小学生の頃、夜中に家を抜け出して空を見上げたことがある。何時間でもそうしていられた。ただ夜空を見上げるだけで楽しかった。幸司と千鶴を一晚連れ出して酷く怒られたのも、今では昔の話だ。

今は空を見上げて何も感じない。星座の名前も忘れてしまった。「ニイちゃんには期待してたんだけどなあ」

彼を迎えに現れていたのは、あの凶悪な顔つきをした男。ニコニコと笑顔を浮かべているが、歪んだ悪人面は恐ろしいだけだった。

「でも、いいのかい？ あんたにだって家族がいるんだろ。残して行っても後悔しないの？」

「もういいんだ」

誰でもよかったし、ここではない現実へ連れ出してくれるなら、どこだっていい。

自分が消えたところで、いったい誰が困る？ 母さんは幸司を連れて、生家へ戻るだろう。そこでなら、金の心配も、明日の食事の心配をする必要もない。最初からそうして、親戚を頼っていれば良かった。くだらない意地を張らなければよかったのだ。

「俺が残る必要がない。はじめっから俺がいなきゃならない理由がなかった」

「そうかい。まあ、どうでもいいか。付いて来な。しけたツラしてんじゃないよ」

何もかもが上手くいく世界。そこでならきつと、この陰鬱した気分も消し飛ばしてくれるんだろう。

世界中からすべての人が消えていた。理由はわかっている。彼女が一人でいたいと考えているからだ。

何も起こらない。何かをしようという気にはなくなっていた。本当の自分を思い出してしまったから、何もかもがバカバカしく思えた。

一人で椅子に座っていた。今朝までは楽しいはずの記憶に包まれていた教室で。

本当は千鶴にとって学校の教室は、苦い思い出しかない。

この現実で手に入れた新しい記憶は、楽しい時間ばかりだった。夕焼けに染まるグラウンドをぼんやりと眺めていた。何時間か、変わることもない景色を眺めている。涙は乾いて気持ちも落ち着いていたが、沈んだ心はとも戻せそうもない。

どうして修一は現れたのだろう。せつかく諦めていたのに。

あのスーツを着た怖い男は、千鶴は誰の記憶からも死んだことに

なると言っていた。だから、後に残す者たちを考える必要は無いと。修一の記憶の中で、千鶴は死んでいたはずだ。

「何も望まないのかい？　なんでもキミの思い通りになるのに」
教室の入り口に、老人が一人立っていた。灰色の帽子と灰色のスーツを着ている。ここに現れた以上、怖い男の仲間だろう。

今は一人でいたい。あの老人が何者だろうと、出て行って欲しかった。そう思っても、口に出せない。

そうだ、本当の自分は、イヤだと感じてても何も言えないほどに臆病だったんだ。

「彼は、キミの友人だったんだろう。いいのかい、あんな冷たいことを言つて」

一部始終を見ていたのか、老人はそう言った。

「あなたには関係ない」

千鶴に言える精一杯の言葉がそれだけだった。

「うん、そうだ。私には関係ない」

老人が椅子の一つに腰掛けて、千鶴を見つめる。優しい微笑みを浮かべていた。千鶴はむしように泣きたくなった。

「長く生きすぎて忘れてしまったのだけど、私もキミと同じようにいつかの時代を生きたことがあるんだ。その時にはたくさん失敗もしたし、後悔もした」

相槌も打たずに千鶴は聞いていた。それでも老人は、優しい声で千鶴に語りかけた。

「年寄りのおせっかいだと思ってくれていいよ。キミに私と同じ思いはさせたくないと考えている」

どうして見ず知らずの老人が、私を助けようとしているのだろう。ああ、そうか。私が幸せなまま死なないと、この人たちは困るんだった。

「本当にキミが望むものは？　無意識の望みじゃない、キミが望むものを口にするといい」

「私が望むもの……？」

この世界には、死んだはずの両親がいた。存在しないはずの友人がいた。誰からも好かれる自分がいた。誰もが彼女を必要として、彼女と一緒にいたいと願ってくれた。どこにも無かった居場所が見つかった。本当に嬉しかった。

千鶴が心から一緒に居たいと望む人物は、この世界にも必然的に現れる。そうも言っていた。

だけど、修一だけはどこにもいなかった。

だったら、彼の存在を必要としていなかったのだろうか？ 彼女の胸は罪悪感でズキズキと痛んだ。

「お母さんもお父さんもいて、誰とでも仲良くなれて、頭もよくて運動も出来て……」

修一は優しくかった。両親が亡くなって、泣いてばかりだった自分のそばに、ずっと居てくれた。友達の居ない彼女を遊びに連れて行ってくれた。困った時には、いつでも相談に乗ってくれた。

「いつも明るくって、面倒見もいい、そんな人になりたかった」

「それはつまり、彼のようになりたかった？」

どんな時でも明るくて、誰からも好かれる。勉強もスポーツも得意で、友達も多い。修一と自分は正反対だと感じていた。

千鶴は肯定するようにうなずいた。

「憧れていたわけだ。好きだったんだね？」

もう一度、黙ってうなずく。

「好きだったよ、ずっと。だけど、そんなこと言って困らせたくない」

出来の悪い幼馴染としか見られていない。幼馴染だから、修一は優しいから、だから連れ戻しに、追いかけて来てくれたのに。

「どうして彼が困ると思う？ 言ってみなければ、わからないのに」

今度は首を横に振った。言わなければわからない。でも、伝えて、それで嫌われたら何もかも終わってしまう。

どっちにしろ、手遅れだ。こんなところまで追いかけてきてくれた修一に、酷いことを言ってしまった。彼は元居た世界に戻った。

もう何も、伝える術がない。

老人は相変わらず優しい口調だった。だけど千鶴は、尋問されているようでイヤだった。

「彼と共にいることがキミの望みなら、どうしてもキミにとって都合のいい彼が、この世界には居なかったのだろうね」

それ以上は聞きたくなかった。

修一と居ると、妬んでしまう。自分も彼のように明るく生きたいと考えてしまう。

『どうしても私はあんな風に来れないのだろう。どうしても私には暗いんだろう。どうしても私は……』

うらやましいと感じて、嫉妬する自分の汚さを意識して、劣等感の塊だと気付いてしまつて余計に苦しくなる。

だから一緒に居たくない。

今まで散々利用して、本当は一緒に居たいと思っていなかったなんて、私は最低だ。

「もう、いいです。一人にしてください」

千鶴は逃げるように席を立った。老人は追いかけてこなかった。

どこまで行っても一人だった。帰り道にも、商店街にも、どこにも人影がない。普段は人気の多い駅前が無人になっていると、余計に静かに感じる。夕暮れのまま止まった世界には、彼女一人しか存在しなかった。

家に戻っても、両親はいない。彼女は一人きりの家で、自分の部屋へこもった。

忘れよう。この世界でなら友達も、暖かい家庭も何でも手に入る。望めばいいんだ。もう一度強く。そうすれば、すぐに友達も両親も戻ってくる。

修一のことは、忘れてしまえばいい。彼だつて、千鶴という幼馴染のことはすぐに忘れるだろう。過去に死んだ人間の一人に、千鶴が加えられるだけだ。そうしてきつと、未来に目を向けて生きていくはずだ。

いい考えだと思った。どちらも幸せで居られる。だから私は間違っていない。

なのに、なんでこんなに寂しいんだろう。

千鶴は流れる涙を抑えることができなかった。

「それでも彼は、キミを見つけた。キミは彼に会いたいと願い、招待状は彼に届いた」

老人の呟きは届かない。少女は目を閉じて、耳を塞いでしまった。「一度出来たことだ、もう一度出来ないと思うかい？」

それでも老人は続ける。誰かに伝えることだけが彼の望みだった。もうどれだけの時間が経っているのだろうか。かつて老人は、どこかの街で古書店を営んでいた。

愛する妻に先立たれ、老人は男手一つで愛する娘を厳しく育て上げた。誰よりも子供のためを想い、教育を施したのだ。だが、娘は父親の考えを理解せず、反発した。

毎日のように親子喧嘩を繰り返し、とうとう娘は家を飛び出した。その直後、彼女は交通事故に遭ってこの世を去った。

後悔はいつも、手遅れになってから始まる。大切な一人娘を失い、老人は抜け殻のように毎日を過ごした。

意味もなく日々を過ごし、十年が経ち、二十年が経った。老人は病に倒れ、自らの死期が近いことを知る。

死を目前に控えて、ようやく彼は気付いたのだった。他人の考えを理解出来る者などいない。想いは言葉にしなければ伝わらない。願いは、願わなければ叶わないのだ。

気付いた時には遅すぎた。老人の心は絶望に支配されていた。

そんな時、老人の下へ一通の招待状が届いた。

「望むものがすべてあり、望むとおりの人生が送れる。ただし、最期には命は世界に吸収されて消える」

案内人の説明を受けた老人は、二つ返事で招待を受けた。
だが、老人の願ったものは『自分にとって都合の良い世界』ではなかった。

誰かに伝えること。自分と同じように後悔する者を減らすこと。
気が付けば、老人は案内人になっていた。彼らと同じで、極めて異質な存在。

時間の概念が存在しない世界の中で、老人はたくさんの人々と出会った。誰もが絶望し、だからこそ心から幸せを願っている。

老人の言葉に耳を傾ける者は、誰一人としていなかった。
それでも老人は続ける。誰かに伝えることだけが、彼の望みだった。

どれだけ強く願っても、もう何も起こらない。

千鶴は意味もなく街中を歩き回った。どこにも、誰もいない。人々の話し声も足音もない。いつもはうるさいと思っていた車のエンジン音もしないのは、妙に寂しい。風の音すら聞こえない。

夕焼けのオレンジ色の中で、いつまでも街は沈黙している。時間すら流れなくなった。

何もかも諦めて、このまま消えてしまってもいいかも知れない。
はじめからその覚悟があつてこの招待を受け入れた。十分に夢を見たし、思いつくことなんて何もないはずだ。

消えてしまいたい。

だけど、嫌だ。

人は矛盾する。嬉しい。悲しい。逃げたい。そばに居たい。消えたい。消えるのは嫌。そうやって、自らの本心でも、矛盾したいくつもの感情を含んでいる。

単純に一つだけの願いを持てる人間はいない。叶えたい願いが矛盾しているから、そのどちらも叶えられない。結局、何でも望みど

おりになる世界など、存在自体が嘘と矛盾の塊だ。

そんな世界で、本当の望みが叶うわけがないんだ。一時の夢だった。最後にはこうして、何もかも失ったまま動けないでいる。

シュウちゃんという時だけが楽しい。だからそばにいて欲しい。シュウちゃんに惨めな自分を知られたくない。だから一緒にいたくない。彼に本心を打ち明けたい。だけど言いたくない。何でも上手くこなす彼と一緒にいると、劣等感に苛まれる。私には何もできない。私の前に現れないで欲しい。私一人では何もできない。だから私と一緒に居て欲しい。見捨てないで欲しい。

「もう一度だけ、シュウちゃんに会いたい」

それが本当の願いなのかはわからない。

だけど、嘘じゃない。誰にも叶えられない望みを千鶴はつぶやいた。

足元に、一枚の封筒が落ちた。どこかで見た覚えのある、オレンジ色をした無地の封筒。招待状だ。封は切られていない。

これが、シュウちゃんの所に届けば、もう一度来てくれるかも知れない。

千鶴は願った。本心かどうかは関係ない。ただ一つ自分が選んだ願いごと。

もう一度だけ、幻じゃない、本物のシュウちゃんに会わせて欲しい。

ツアー最終日。東京、日本武道館。チケットは即日完売、会場にはすでに一万を超えるファンが集まり、ざわめきと熱気が控え室にまで伝わってきた。

プロの歌手としてデビューして、まだ三年しか経っていない。こんなに早く武道館での単独ライブができるなんて、夢にも思わなかった。

それなりに下積みの苦労はしてきたが、波に乗ってからはあつという間に、何もかもが上手く進んだ。上手くいき過ぎて怖いくらいだった。

デビュー直後から、音楽活動はもちろん、テレビのゲストとして招かれ、エッセイの出版の仕事が舞い込み、映画への出演を依頼されるなど、修一は訪れたチャンスのすべてで成功を収めた。あらゆる分野で多才を示す彼の名を、テレビで聞かない日はないほどだ。

「シユウさん、緊張してる？」

口元をにやにやと歪めた、いつものわざとらしい笑顔で黒田が尋ねた。

「少しだけな。お前だってさっきからトイレに行ってばかりだよ」

「俺は少しじゃなくてすげー緊張してるもん」

「ああそう。ステージでびびって漏らすなよ」

軽口を叩き合うが、緊張しているのは修一と黒田だけではない。

バンドメンバーの全員が緊張を隠し切れていなかった。

本番が始まるまでの数十分。完璧になるまでリハーサルを重ね、別の会場でなら何度もライブを経験している。それなのに、いつだって本番前は緊張してしまう。

だが、緊張以上に、全員興奮の色が見て取れた。何度経験しても飽きることもない、本番の高揚感。彼らの歌と演奏にあわせて、圧倒されるほどの人波が一体になる瞬間の興奮。ステージ上から見る観客の姿は美しささえ感じる。経験した者にしかわからないあの瞬間のために、人生のすべてを捧げていると言っても過言ではない。

緊張と興奮の入り混じった控え室に、携帯電話の着信音が響いた。「おい、切つとけよ、もうすぐ本番なんだからな」

興を削がれた気分になり、修一は多少厳しく言った。自分がリーダーなのだから、こういう場面ではしっかりと言わなければならない。本番前の集中を高める時間を邪魔してはいけないのだ。それぞれが好きな方法で、本番に備えているのだから。

「修一、こつち」

背後から声を掛けられ、振り向く。メンバーの一人が彼に向かって携帯電話を投げてよこした。

「お前のだよ、アホ」

手の中で振動している携帯電話は、間違いなく自分のものだった。投げ渡した当人は修一をバカにするようにニヤニヤ笑っている。

「先輩、そういうのカッコ悪いっす」

黒田が追従するように修一に言った。

彼は気恥ずかしくなり、慌てて電話を切ろうとした。液晶画面に映し出された名前は、本間幸司。

今まで一度も、幸司がライブ直前に電話を掛けてきたことはない。今日がライブだと知っているはずだ。それなのに連絡をしてくるなんて、何か緊急の、よくないことでもあったのだろうか。

「気になるんなら出りやいいじゃん。さっさとしないとライブはじまるぜ」

「……そうする」

仲間にそう言われ、修一は少しだけみんなから離れた場所で、通話のボタンを押した。

「もしもし、幸司？ 何かあったのか？」

「あ、もしもし兄ちゃん、今日何時ごろ帰ってくる？ 母さんが帰りに卵買ってきてって……」

修一は返事をせずに電話を切った。ついでに電源を切って、携帯電話を机の上に放り出した。

一瞬で電話を終えた修一を、みんなが不思議そうに見ている。説明するのもバカバカしくて、笑いたくなった。

気付けば緊張は消えている。ステージに上がる直前、彼の心には高揚だけが残っていた。

会場の明かりが消え、いよいよ彼らの入場の瞬間が来た。観客席から、一際大きな声援が上がる。

ステージまで駆ける。リハーサルで何度も練習した、定位置へと

立つ。心臓の鼓動が跳ね上がった。ぞくぞくと興奮の波が血管を駆け巡り、鳥肌が立った。

ステージから客席を見上げる。ファンで埋め尽くされているはずの会場は、無人だった。

困惑して、辺りを見渡す。誰もいない。ステージ上に立っているのが、修一だけだった。

何かがおかしい。そこはライブ会場ではなかった。彼は間違いないステージにいるというのに、客席があるべき場所には、薄汚れた灰色の建物が見えた。修一の頭上には、武道館の天井からぶら下がった日本の国旗が見えるのに、その先の天井は切断されたように消えて、晴れ渡った夕暮れの空が見える。

まるで二枚の写真を合成したような景色だ。

目の前の建物には、どこかで見覚えがある。彼がかつて通っていた高校の、昇降口だった。こんな状況でも、頭の隅では冷静にそうと気付いていた。

修一はステージを飛び降りると、繋がっている二つの風景の境界線へと歩いた。会場に敷かれた絨毯が突然途切れ、でこぼこしたコンクリートの道へと続いている。

昇降口から、一人の女生徒が姿を現した。

「……千鶴？」

井上千鶴だった。彼の幼馴染で、今日のライブにも来ている。いつも笑顔で、明るい彼女。

いや、それは修一の理想が作り出した千鶴だ。

目の前にいる彼女は、泣き腫らした、沈んだような表情をしている。彼の理想どおりではない、かつて知っていた幼馴染の、愛想が悪く後ろ向きな井上千鶴だった。

「シュウちゃん？」

驚いたのは、この異質な景色を見たからではないだろう。いるはずのない修一を、見つけたからに違いない。

修一はすべてを思い出した。本当の現実、選んでしまったもう一

つの現実。

あの時別れてから、いつたいどれだけの時間が流れているのだろう。まだ千鶴は泣き顔のままだった。

千鶴の世界と、修一の世界が繋がった。それはどちらかの願いが叶えられた結果なのか、偶然なのか、他の誰かの意思によるものなのか。今さら誰かに説明を求めるつもりもなかった。

理由がどうであれ、二人は再会した。

報告を受けて、橘は怪訝そうに顔をしかめた。

二つの世界が繋がっている。無限にある世界の中の、たった二つ。ちっばけな数ではあるが、無視しておくわけにはいかない。

予測できない事態が次々に起こっていた。こんなことははじめてだ。

あの本間修一という男がいると、イレギュラーばかりが起こる。

送られていない招待状を受け取り、招待を拒否した拳句、無限に存在する世界の中から、井上千鶴を簡単に発見した。

今度は、彼らの世界が変質し、繋がっている。

このままではいけない。彼らには幸せなまま死んでもらわなければならない。

橘は無尽蔵の知識の中から、このような事態に対抗する手段を見つけ出そうとした。

今まで一度も、こんなことは起こらなかった。

「変質する時が来たのかも知れないな」

老人が呟きを発した。彼の名前は、橘も知らない。彼自身も覚えていないと言っている。

「変化なんて、私たちには縁のない言葉でしょう」

時間が存在しない場所にいる彼らは、成長も変化もできない。存在を自覚した瞬間に持っていただけの知識と記憶がすべてなのだ。

定められた行動だけを繰り返し、未来を選べない存在だったはずだ。

「さあ、どうだろうね。元々、若者の絶望を利用しようとしたこと自体、悪い方向への変化だったのではないかな」

「必要な措置です。そのための知識が私にはあった。変化ではなく、隠されていた本質の一つですよ」

老人は苦々しく笑う。橘は不快に思った。

城島といいこの老人といい、自分の周りにはろくな人間がいない。案内人が普通の人間と違うとすれば、それは役割を与えられていることだ。

生まれて、成長して、未来を選ぶ人間とは違う。存在自体に意味を与えられている。

それは舞台上の役者であり、小説の登場人物であり、ドラマの中の俳優であるということだ。役目を果たさずに勝手に動き回れば、世界自体が成り立たなくなる。

それなのに、自分だけだ。しっかりと役割を果たしているのは。

「……千鶴？」

何もかもが消えた世界に、変化が訪れた。もう一度だけ会いたいと願った修一が、そこにいる。

彼女は覚悟を決めた。どうにもならない現実から逃げて、そこがどんな場所だつて、自分の願いが叶うわけがない。立ち向かおうとも変わろうともしないで、周りの状況が自分を助けてくれるように願っているだけで、一体どんな未来が待っているというのか。

みんなが私をバカにする。勉強も運動もダメで、学校に一人も友だちがいない。たった一人の家族も信じられなくて、家にも居場所がない。助けて欲しい、こんなところからはいなくなりたい、ただそう思うだけだった。私をバカにする人からも、不幸な出来事から

も、逃げ出すことだけを願った。私が変わらなきゃ、何も変えられないのに。

世界は元々、人間の願いごとを叶えてくれるようにできていると説明された。もしもそれが本当だったなら、千鶴が逃げたいと強く願ってたから、叶えてくれたんだろう。だから逃げ出すことしかできなかった。

それじゃあダメなんだ。変わらなきゃいけない。逃げちゃいけない。

逃げ出して、傷付けてしまった人がいる。私にとって大切な人なのに。

何を言えばいいのだろう。もう一度会えたら伝えたいと思っていたことがたくさんあったのに。上手い言葉が浮かばない。何を伝えたらわかってもらえるのだろう。あの時、再開した時の彼もこんな気持ちだったのだろうか。

『本当にキミが望むものは？ 無意識の望みじゃない、キミが望むものを口にするといい』

老人の言葉を思い出した。

必要なのは自ら選び取ることだ。自らの意思で選んだ未来だけが、自分の前に現れる。それが幸福でも不幸でも。

千鶴はためらいがちに言った。

「シュウちゃん、私と一緒に帰ろう」

これは現実だろうか？ 修一があの時聞きたかった言葉を千鶴は口にした。彼の理想が作り出した千鶴ではない、本物の千鶴が。

うなずけば、全部解決だ。ただ一言、一緒に帰ると伝えれば。千鶴と元の世界に帰って、何事もなかったかのように明日からも生きる。何もかも元通りになる。必死で働き家族を養って、時々友達とバカな話をして。修一が元々持っていた本当の生活へ、戻れるだろう。

う。

それでも修一は、首を横に振った。

「もう無理だ。悪いけど、手遅れなんだ」

きつと元の現実へ戻れば、何もかもなかったことにして、今までと変わらない生活を送れるのだろう。

だけど、母と弟を見捨てたことに変わりはない。修一自身が諦める道を選んでしまった。例え現実が戻ったところで、もう取り返しがつかない。

「俺、母さんも幸司もどうでもいいって思ったんだ。お前のことだ。全部諦めて、投げ出してきたんだよ。今さら戻ったところで、二人に会わせる顔がない。もう元通りになんかならないだろ、俺たちも」

「元通りには、無理かも知れないよ。でも、元通りになったら、何も変わらないから」

千鶴の顔をまともに見れなかった。偉そうなことを言っただけを連れ戻そうとしたクセに、結局はこうして逃げてしまった。

口ごもりながら千鶴が続ける。

「逃げ出した私が言えることじゃないけど、全部忘れて新しい世界で生きれたって、本当に変えたかったものは変わらないから、だから……」

今までに聞いたことのない真剣な声。

修一の知っている千鶴は、頭も悪くて運動も出来ない、不器用で不真面目で、一人では何もできない女の子だったはずだ。

「だから、あの……色々考えたよ。考えがまとまらないけど、何をしなきゃいけないのかちゃんと考えて、それで、少しだけわかった気がしたの」

話しをするのだって苦手だ。その千鶴が、必死になって修一に何かを伝えようとしていた。

「何かに変わって欲しいって、何かを変えたいって思ったら、逃げないで自分が選ばないと……いけないんだと思う」

逃げ出したことで見つかった答えが、今の言葉なのだろうか。

自分は、最後まであがいて、結局逃げ出すことを選んでしまった。間違っていたのには気付いている。だけど、過ちを認める勇気が無かった。千鶴が消えて、ずっとそばにいたいと思ったのに、口に出せなかった。くだらない意地を張って、彼女を連れ戻すチャンスをつみ損ねた。そのせいで失ってしまった。

「だから、私と一緒に帰ろう。私、変われるように頑張るから」
永遠に会えない、彼女が死んでしまったと受け入れるしかない。心が沈んで、もう戻れないと思った。一度壊れてしまったら直せないと思ってしまった。だから簡単な道を選んだ。つまり、逃げ出すことを。

「だから私と、一緒に居て欲しい」

お互いに間違いだらけだったのだ。修一は千鶴を信じきって、彼女の気持ちを考えようとしなかった。千鶴は修一を信じることができず、修一が何を考えているのかを怯えながら知ろうとした。そしてお互いに過ちに気付いて、手遅れだと思ってしまった。

まだ変われるだろうか。今からでも、正しい選択ができるだろうか。

顔を上げて千鶴を見た。彼女はもう泣いていなかった。怯えたような、すぎるような瞳で、それでも真っ直ぐに修一を見ている。

「俺は……」

ギシリと、木造の建物が軋むような音が聞こえた。

突然、強風が吹いた。真っ直ぐに立っていられないほどの暴風。

修一はよろめいた。真正面から吹く強い風のせいで、まともに目も開けられない。

バキバキと、木の板を無理矢理引き剥がすような音。破碎音が聞こえる。

後ろを振り返ると、さきほどまで会場があった場所が、ぽっかりと空洞になっていた。底の見えない巨大な穴倉のように、真っ白い空間が続いている。突如、一際強い風が吹いた。空気が吸い出され

るように、強風が空洞に向かって吹き荒れる。修一は何とか耐えながら、穴へ引き込まれそうになりよるめいた。

「シュウちゃん！」

千鶴の背後にも、同じように空洞が迫っていた。いや、背後だけではない。空はひび割れ、ジグソーパズルが崩れるようにバラバラに落ちていく。もはや校舎も原型を留めていなかった。

「千鶴！」

引き摺られるように背後へと滑っていく彼女を捕まえようと、手を伸ばした。

目の前にいるのに、届かない。地面の揺れと吹き荒れる風の強さで、立っていることすら出来なかった。

千鶴が修一に近付こうと、一歩足を踏み出した。手を伸ばす。届かない。引き寄せられる力に抵抗して、修一も少しずつ進んだ。あと少しで、二人の指が触れ合う。

一際強く風が吹いた。わずかな距離は縮まることなく、二人は暗闇へと引きずり込まれた。

もはや手遅れだった。誰も彼らを救えない。帰りたいという二人の願いを叶えるために、絶対に作り出せない『元々の世界』へと変質しようとした。存在の矛盾に耐え切れるほど、世界が持っているエネルギーは大きくない。繋がった世界は壊れてしまった。

いまや、ターミナル中の案内人たちが自らの仕事も忘れて、世界をモニターする部屋に詰め掛けていた。

多くは好奇心から、ただ周りがそうしているという理由だけでその場にいる者もいるだろう。

頭上に大きく映し出される、繋がった世界の光景。黒と白で埋め尽くされている。黒く空いた穴が、真っ白に何も無い状態へと消えていく。

「本当にやばいんじゃないのか、これは」

城島は慌てているようだったが、橘は安堵したように溜め息を吐いた。

やれやれ、ようやくこれで安心できる。

世界は消える。彼らも消える。何も変わらない。案内人たちの日常は続く。世界中のエネルギーが枯渇すれば、きっと目の前で広がる光景が繰り返されるのだろう。だからこそ世界を安定させるために、エネルギーを管理しなければならない。

何も変わらない。それでいい。変われないことを知っているのだから、期待をするだけ無駄なのだ。

「それでも、もし彼らが助かったなら。どうなる？ 私たちも、何かが変わるだろうか」

老人が呟く。誰も何も答えず、ただ不安と好奇心の入り混じった表情で頭上を見上げていた。

そこは、まるで宇宙だった。

眼下にも頭上にも、三百六十度、パノラマに展開する無限の宇宙。きらめく大小の星々が視界を埋め尽くしている。小さなものは地上から見える星と同じサイズだが、巨大なものは目算でも直径十メートル以上はありそうだった。赤く光るものや黄色に光るもの、青色のものもある。光が渦巻く霧のように広がる箇所もあった。真っ黒で何もない部分もある。距離感が掴めなくて、すべてが目の前にあるようにも見えたし、ずっと遠くにあるようにも見えた。上下の感覚も前後の感覚も無い。目が眩み、圧倒されるような景色だった。

修一はしばらくの間、流れるその風景に心を奪われていた。

「まいったなあ。どこだよこー」

不安を感じないよう、わざと声に出していった。耳の奥に何かが終わまっているかのように、自分の声が遠く、小さく聞こえた。

「どうなっただよ、チクショウふざけんな。誰か出て来い。おい」

悪態を吐いても、どうにもならない。

自分はどうなるのだろうか。あの時、世界が崩れた時に、一緒に死んでしまうのかと思ったが、そうではないらしい。生きているとはいえ、こんな場所に放り出されるとは思いもしなかったが。

このまま何も起こらず、永遠に漂っているのだろうか？

水に浮かんでいるように、しっかりと歩けない。立っている感覚すらない。修一はもがいてみたが、どこにも足場になりそうなものも見つからなかった。

「大丈夫だよ。なんとかなるよ、きっと」

その声は、自分の言葉よりも近い場所から聞こえた。

どこにも姿は見えない。それでもその声は、間違いなく千鶴のものであった。

「千鶴？」

指先に暖かな感触。手が触れ合っている。姿は見えなかったが、存在を感じることが出来た。

「二人でなら、きっと帰れるよ」

「お前なあ、何言っただよ。こんなわけわかんないところに連れて来られて、どうやって帰るんだよ」

「とりあえず、真っ直ぐ進んでみようよ。ほら、あそこの一番光つてるところまで、行こ」

「行こうったって、立てもしないんだけど」

手を引かれる感覚がした。無意識に足を前に踏み出すと、土を踏み締めたような感触が伝わる。修一は転びそうになりながら、何とか歩き始めた。

「ほら、大丈夫そうでしょ？」

少しずつコツを掴んで来た。足元の感触が、土から固い床、絨毯、レンガと、ころころと変わる。不思議だったが、慣れてしまえば気にならない。

しばらくの間、二人は無言で歩いていった。重苦しい空気はなかった。心地良いほどだ。疲労も感じなかった。

修一は千鶴へ言いたいことが山ほどあったが、今は黙っておくことにした。

元いた場所へ戻れるのだろうか？ 戻れたとしても、待っているのはまた辛い現実だけだ。それでも、気分が沈むことはなかった。家族がいて、友達もいて、それに今度は千鶴もいる。それだけでも十分に幸せだ。

「そうだ、ここから戻れたらさ、うちの店に来いよ」
「店？」

相変わらず、千鶴の姿は見えない。声だけははっきり聞こえた。自分の姿さえ曖昧にぼやけて、消えかかっているように見える。

もしも一人だけだったら、他人の存在を感じられなかったら。自分がここにいることすら信じられなくなったかも知れない。

「親父のラーメン屋、俺が継いだんだ、一応。人気はないけどさ。でも、今なら美味しく作れる自信がある」

「ホントに？」

「ホントだ。色々工夫したら絶対親父より上手に出来るはずなんだ。たった今、美味しく作れる工夫を思いついた。だから、俺が作ったラーメン、食べてくれよ」

「うん、行くよ。約束する」

不安はなくなっていた。約束。元の現実に戻ることを、その言葉が保証してくれるようだった。

「美味しいもの食ってれば、みんな笑ってられるんだってさ」

それは父の言葉だった。

『美味しいもの食ってれば、みんな笑ってられるんだよ。俺の美味しいラーメン食った人は幸せになれるし、俺たち家族も儲かって幸せ。世界中が幸せだ。どうだ修一、いい仕事だろ？ 父さんの仕事は』

開店した直後に、よく聞かされた。親父は仕事に誇りを持っていた。親父ほどになれなくても、自分だって、誰か一人くらいは幸せ

にできるかも知れない。

どれだけ進んだのだろうか、やがて一際大きな光の眼前へと辿り着く。光は二人を包むように広がった。

窓から差し込む光が眩しい。修一は寝返りをうつてまぶたに刺さる明かりから逃れようとしたが、ダメだった。

段々と意識が覚醒してしまい、夢が遠のいていく。目覚まし時計は鳴っていない。まだ眠っていていいはずだ。

それでも再び眠りに落ちることができず、修一は諦めて起きることにした。

眠気は無いの、頭にはもやが掛かったようにふらふらした。長い夢を見た後みたいだ。

時計を見ると、昼をとくに通り越して、十六時を回っていた。窓からは西日が差し込んでいる。

「止まってんのかな？ 寝坊したなら幸司が怒鳴り込んでくるはずだし……」

そこまで考えて、思い出した。昨日、いや正確には朝からだ、仕事が終わったあとに酒を飲んで帰ってきて、酔った勢いで幸司とケンカした。

そのまま眠ったのだ。起こしに来るはずもない。

自分のバカさ加減に呆れ果てた。頭痛がするが、二日酔いとは違う。

三つも年下の弟を相手に八つ当たりをしてケンカして、情けない兄貴だ。そもそも、何にそんなにイライラしていたのだろうか？

思い出せなかったが、ケンカの原因なんてそんなものかも知れない。

「謝るか……」

悪いのは自分なのだから、気が重いなどと言っていられない。

すぐに立ち上がって幸司の部屋へ向かう。

「幸司？ ちょっといいか？」

ノックをする。弟の部屋はすぐ隣だ。学校から帰って来ていることは、物音や気配ですぐに分かる。だが、もしも返事がないようなら、後にしようと決めていた。

「うん、いいけど」

沈んだような返事。修一は軋む木の扉を押し開けた。修一の部屋と違い、キレイに片付けられた部屋。布団は丁寧にすみのほうに畳まれている。親父が日曜大工で作ってくれた本棚には、大きさに本が並べられ、ホコリもたまっていない。部屋の中央に置かれたテーブルの上にも不要なものは一つも乗っていないかった。電源の入っていないノートパソコンだけが置かれている。

幸司は絨毯の上に座り込んで、雑誌を読んでいた。

何と言って謝ろうかを考えていると、幸司が先に口を開く。

「兄ちゃん、あのさ、店のこと、もういいよ。昼も夜も働いてたんじゃ大変だろうし。兄ちゃんがそんなに疲れてるとか考えてなくて。ごめん。僕も進学しないで働くから、家計のことは何とかなるよ。専門学校にいかなくても、調理師免許は取れるし」

いつも感じていたことだが、弟のほうがよっぽど大人だった。情けなくて笑えて来た。

「なに生意気なこと言ってるんだよ。俺は体力には自信があるから、そんなに疲れたりしない」

「でも……」

「だいたい、お前は色んな技術を勉強してからうちの店を継ぐんだろ？ 調理師免許なんか持つてただけじゃ美味しい料理は作れないんだ。だからちゃんと学校行って勉強して、どうしても働きたかったら、バイトでもして遊ぶ金だけ稼げ」

幸司に反論させないように、修一は続けた。

「俺のほうこそ、あれだ……なんだ、昨日は悪かったな。ちょっとイライラしてただけで、店を続けるのがイヤだとは思ってない。親

父と母さんががんばって開いた店だしな……」

父が自分の店を持つためにどれだけ努力をしていたか、幼い頃ではあったが、修一はちゃんと知っていた。母が無理の出来ない体を酷使して、あの頃はよく駆け回っていた。

母さんを大切にしない親父に、当時は反感を覚えた。母が寝込みがちになったのもそのせいだと、ずっと思っていた。今にして考えれば、店を開くのは二人の夢だったのだ。だから二人は、お互いに無理をしても夢を叶えようとした。

きつと幸司は、そんな両親の気持ちに気付いていたのだろう。修一よりもずっと早く。

「それに今までだって、家族三人食っていただけだろ？俺に気を使うんだったら、さっさとこの店継いで、繁盛させて、俺と母さんを養ってくれよ」

幸司は照れたように笑った。

「うん、わかった。ありがとう」

すっかり忘れていたが、小さい頃はくだらないことで何度もケンカをしていた。それでも、元々仲の良い兄弟だったから、すぐに仲直りが出来た。修一と幸司がケンカをすると、いつも一緒だった千鶴が泣きそうな顔で親父に言いつける。怒られるのが怖くて、親父が近付いてくると二人は笑って何事もなかったように装う。それでも親父にはバレバレで、二人ともゲンコツで頭を殴られるのだ。

当たり前過ぎて見えなくなっていた。家族を見捨てようとしたことを、修一は恥じた。

恥じてから、たった一日仕事をサボっただけで、見捨てるなんて考えるのは大袈裟過ぎるかと思った。家族を置いていなくなったわけでもないのに。

「お前が店を継ぐより早く、俺のラーメンで店が繁盛したらごめんな」

「それはないから大丈夫」

朝六時。目覚まし時計が鳴るよりも三十分も早く、井上千鶴は目を覚ました。

普段ならそのまま二度寝をするところだが、不思議と眠気はすぐに消えていった。やけに長い時間、夢でも見ていたような気がする。でも、布団に入ったのが一時だから睡眠時間はいつもより短いはずだ。

この時間なら、まだ叔母の佳代子が家に居る。一階に降りて顔を合わせれば、朝からお互いに気まずい思いをしなければならない。そう思いながら、千鶴は階段を降りて行った。

いつもは出来る限り叔母さんとの接触を避けるようにしていたのに、今日に限ってそんな気分ではなかった。

「おはよう、おばさん」

キッチンで朝食を用意していた叔母さんへ声を掛けた。

「あら、おはよう」

チラリと千鶴を見ただけで、それ以上何も言わずに叔母さんはフライパンに向き直る。

千鶴はその後姿を眺めながら、しばらく沈黙していた。言葉を掛けようと口を開いては閉じ、漏れるような声を何度か漏らす。

「あのさ」

それでも意を決して、話しかけた。

「なんでたった一言話すだけで、こんなに緊張しているのだろう。」

「今日って、何時ごろ帰ってくるの？」

千鶴が尋ねると、叔母さんは驚いていた。こんな時間に起きてくるのだって珍しいのに、何より自分から話し掛けるなんて、何年もなかったことだ。驚かれるのも無理はない。

「そうねえ、早ければ六時には帰るわよ」

「あの、今日、私が夕飯作っておこうか」

叔母さんが手を滑らせて醤油のパックを落とした。慌てて雑巾を

持つてきて、床を拭く。千鶴も手伝った。

「ご、ごめんね、驚いちゃって」

引きつった笑みを叔母さんは浮かべた。

仕方ない。千鶴は今までそんな言葉を口にすることはなかったし、どうして言おうと思ったのか、自分でもわからない。

「でも、料理なんてしたことないでしょ？ 大丈夫なの？」

叔母さんは、純粹に千鶴を心配して言っているようだった。なぜか、それに気付いた。

泣いてばかりで心を閉ざしていた幼い千鶴に、叔母さんはどう接していいかわからなかったのだろう。

千鶴自身も、腫れ物に触れるかのような叔母さんの態度に、きつと自分は扱いに困る邪魔者なのだと感じていた。

お互いに距離感が掴めないまま時間だけが過ぎてしまった。ただ、それだけのことだったのに。

「うん、でも、平気。このまえ家庭科で野菜炒め作ったばかりだし、多分」

だから今から、少しずつ距離を縮めればいい。ぎこちなくて、上手くできないかも知れないが、何もしなければ、何も変わらない。

叔母さんは困惑しながらも、嬉しそうに目を細めて言った。

「何かいいことでもあったの？ 今日朝から雰囲気が違うわね」

「そう？ あったかな……何か。別に特別なことはないけど、たまには私も手伝おうかなって」

普段の感謝の気持ちを込めて、なんてまだ気恥ずかしくて言えない。本当は、素直にありがとうと言いたかった。

自分でも不思議で仕方がない。どうして突然、そんな風に思ったのだろうか。

いつもと同じ通学路でさえも、今日は違って見えた。

冬の朝は寒いし、寒がりの千鶴にとってわずか二十五分の距離でも辛い。だけど、空気が澄んでいて、空が綺麗に見える。学校は高台の上に建っているから、坂の途中で空を見上げると視界を遮る建

物が何もなく、本当に広く見えた。雲ひとつない、真つ青な空。もう三年も通っている道なのに、今まで気付きもしなかった。

「お、井上」

ボロボロの白い乗用車が止まった。開いた窓から玉木が顔をのぞかせている。

「おはようございます」

「おはよう。珍しいな、こんなに早く登校してるなんて。まだ八時になってないぞ」

「そんな気分だったんです」

「雪でも降らなきゃいいけどな。できればこれから卒業まで、毎日遅刻せずに来てくれよ」

「考えておきます」

玉木は苦笑いをして、車を発進させた。遠ざかっていく白い車を目で追いながら、本当に遅刻しないように来るのも良いかと思った。クラスのみんなはきつと、突然落ちこぼれが危機感を持ったとか、そんな風に思うかな。

でも、バカにされてるのだろうけど、みんなと話すきっかけにはなる。

千鶴は首をかしげた。ありえない。今さらクラスの人たちと話しなんかできるはずがない。

私は何を考えているんだろう？ 何だか、今日は朝からおかしい。長い坂を上りきると、冬でも汗をかくほどに疲れてしまう。いまだにこの坂だけは慣れない。あと何回、この坂を上るのだろうか。もう卒業まで半年もない。

さきほどよぎった考えがまた、彼女の頭を支配した。

みんなと親しくなって、最後の何ヶ月かを楽しく過ごせるように頑張るのも、悪くはないかな。有り得ないかも知れないけど。

教室へ辿り着く。扉を開けると、女生徒が一人だけ居て、本を読んでいた。

西村だ。彼女は振り向くと、千鶴を見てとても驚いたようだった。

口をぽかんと開けて、幻でも見ているかのような表情になる。

「あ……お、おはよう」

ぼそぼそと呟くように口にする。

「え？ あ、うん。おはよう……」

それきりまた本に向き直ってしまった。千鶴はホッと息を吐いた。今まで一度も話したことのない相手だから、千鶴のことを気にせず本でも読んでもらってた方が嬉しい。

十分ほど過ぎて、廊下から話し声が聞こえてくる。

「ちゃんと謝ろうぜ、絶対俺らのせいだし」

「わかってるよ、ついが一番悪いのは奈良橋じゃん。なのにあいつだけバックレとかマジでありえねー、ヘコむわ」

ガラリと、扉が開く。千鶴と目が会うと、村松は驚いたように時計を見て、それからもう一度千鶴を見た。

西村といいこの男といい、大袈裟に驚きすぎだ。

気まずそうに、チラリと背後の生徒を見る。後ろに立っていた男子も、千鶴を見るとバツの悪そうな顔をした。秋田だった。

彼らはカバンを机に置いてから、ヒソヒソと何か言い合っていた。

「お、おはよう、井上」

「え？」

秋田が千鶴の前に立って、そう言った。

今朝の叔母さんの気持ちがあった気がする。話しかけてくるはずのない人物から、声を掛けられた。

千鶴は驚き、返事ができなかった。

「あのさ、ちょっと話があるんだよね」

今度は村松だった。バツが悪そうに視線を伏せたままで、眉間にシワを寄せている。

「いいけど……何？」

普通に言っただけだったが、冷たく聞こえたのだろうか、村松が気落ちしたのが表情でわかった。こちらに目を合わせようとせず、村松は続けた。

「こないださあ、財布がなくなっただって騒いでたじゃん。俺、絶対誰かに取られたんだって思って、奈良橋がパクられたんだとか言うから、それである日、一組の友達に金返しに行ってさあ、あ、朝ね。一組の河野。あいつケチ臭いヤツでさ、すぐに返さないと利子付けるとか……まあいいや。で、朝そのまま話しこんで、気付かないでそんな時に財布落としてたみたいで、一組の室井先生が拾ってくれた。落ちてたの教室だし、何も名前わかるもの入ってなかったから俺のだって室井先生もわからなかったらしくて、あと俺も絶対落とすわけないって思ってたから、だから、えっと、誰かに盗られたとかそんなんじゃないかって、だから疑ってごめん」

村松はそう言って頭を下げた。

早口で聞き取りづらい上に、まとまりのない内容だった。つまり、盗まれたと思い込んでいた財布が見つかったらしい。

「お前テンパってねーでちゃんと謝れよ。悪いの俺らなんだから」
「わかってんようるせーなあ、っーか秋田も謝れよ、お前だって疑ってたじゃん」

秋田が千鶴へと向き直った。睨むようなその目付きは、どうやら怒っているのではないらしい。

千鶴への疑いが晴れたということだろうか。

「悪かった！ 本当にごめん！ 頼む、許してくれ！」

頭を下げて、耳が痛くなるほどの大声で秋田が言う。手を後ろで組んで足を広げ、まるで応援団の挨拶みたいだ。

へこへこ頭を下げながら、村松が続けた。

「マジでごめん。俺、絶対悪いこと言っただと思って、超へこんで謝らなきゃってずっと思ってたんだ。奈良橋は今日サボってるけど、絶対謝らせるから。もしこれで井上が休んだりしたら絶対俺のせいだって思って、ホントに死ぬしかねーとか考えてたんだって」

「お前な、謝る時はちゃんと謝れって」

「何だよ、マジだって、マジで本心から謝ってたよ。絶対、嘘とか口先だけとかじゃねーから」

「お前の絶対は信用できないんだよいつも」

二人のやり取りを見て、千鶴は思わず笑ってしまった。

「いいよ別に、許してあげる。良かったね、財布が見つかった」

笑顔で言う。本当にもう気にしていなかった。傷付いて苦しんだのは確かだが、本人たちがこうして謝っているのだから（ふざけているようにも見えるけど）許してあげようという気になっていた。

呆氣にとられたような顔で、二人の男子は千鶴を見た。

「え？ あ、ああ……ありがとう」

時間が経つに連れて、少しずつ生徒が集まってくる。二人は律儀にも、誰かが来るたびにあの日の結末を語り、「井上は悪くない、あいつはむしろ良いやつだ」と、罪悪感からか千鶴へのお世辞を織り交ぜて説明をした。話を聞いたクラスメイトたちは、村松をアホだのバカだのと思い思いに罵った。村松は言われるたびに慚然としながらも、疑われた張本人の千鶴が笑って許したからか、口元が緩んでいた。

「良かったね、井上さん」

「私は最初っから井上さんはそんなことしないって信じてたけど」
今まで一度も会話をしたことのないようなクラスメイトたちも、笑って千鶴に話しかけてきた。その言葉が本当でも嘘でも、どちらでも良い。みんなが自分を嫌っているように感じていたから、ただ誰かにそう言ってもらえるだけで嬉しかった。

元々、人と話すのは苦手だ。だけど今日は、苦痛には思わなかった。

大半の生徒は、事情を説明されても興味なさそうに頷くだけだった。もうすぐ一ヶ月も経つのだから、当事者でない彼らにとっては過去の出来事で、どうでも良かったのだろう。隠しもせずに千鶴の悪口を言っていたわずかな生徒は、気まずそうに千鶴と目を合わせないようにしていた。

学校にいて、一日中気分が沈まないなんてはじめてだった。

今日は珍しく、帰り道も一人ではなかった。下駄箱で、女生徒に

声を掛けられて一緒に帰ることになった。

クラスメイトの西村と、彼女の友人の三波。

話題に上がったのはやはり村松たち、男子のことだった。

「有り得ないよねー、勝手に犯人って決め付けて」

「うん、でももう、気にしてないから」

千鶴を非難していたのは、むしろ女子の方が多かったが、そんなことは棚に上げて話しは続く。本気で責めているわけじゃない。ただきっかけになっていただけだ。

誰かと話したり、笑いあったり。出来ないと思いこんでいた。きっかけさえあれば良かったんだ。

途中、いつも一緒にいる三人組の女子を見掛けた。誰かを待っているのか、三人は寒そうに身をすくめて立っていた。

彼女たちは千鶴に気が付かなかった。いや、一瞬だけチラリと目が合った。千鶴が一人でいなかったので驚いたのか、こちらを指差した後、声を潜めて何か話している。

心臓を締め付けられるような、イヤな感じがした。

私一人が攻撃されるのはいいけど、せっかく仲良くなれそうだったクラスメイトまで何か言われたら……

結局、心配していたようなことは何も起こらずに三人の前を通り過ぎた。

「私、あいつら嫌い」

しばらく進んでから、つぶやくように西村が言った。

「一組の三バカでしょ？ めっちゃ嫌われてるよね」

有名なのだろうか、あの三人は。千鶴がきよんとしていると、三波が言った。

「何か、気の弱そうな子見つけて陰険にイジメたり、生意気な男子に彼氏使ってカツアゲしたり、結構してるみたい」

最近はまだ千鶴が標的になっていただけで、日常的に誰かを貶めて楽しんでいるらしい。

千鶴の顔を見て、西村が言った。

「え、ひよつとして何かやられたことあるの？」

「うっん、何も」

誰かに伝えなくてもいいことだ。ウソを吐いて誤魔化した。そんなことで心配はさせたくない。

「そういえば、先週あいつら教室にいた。朝早く。そうだ、村松が財布なくなっただって騒いでた日と、その次の日。私いつも朝は一番に来るから、覚えてるもん」

西村の言葉で思い出した。あの日、三人組を廊下で見掛けた気がする。

教室で何をしていたんだろう？

「あいつらが盗んだんじゃない？ 村松の財布。それで空っぽだったから、一組で捨てといたとか」

悪意の混ざった推測を三波が口にする。さすがにそれは間違っている。と千鶴も思ったが、一つだけ思い当たることがあった。

あの日の落書きは、ひよつとして彼女たちだろうか。

これも悪意のある憶測に過ぎない。でも、もしそうだとしても、不思議と怒りはわかなかった。

彼女たちは自分に似ている。西村と三波だけでなく、他のクラスの生徒たちからも嫌われて、疎まれていられるらしい。

きつと、一人ではいられないのだろう。周りのすべてが敵に思えて、親しい三人でいるか、彼氏といるか。そうしていないと自分が出せない。だからいつも一緒にいる。

私と良く似ている。そう思ったからか、あの三人に対して怒りよりも同情を感じていた。

「じゃあ、また明日ね」

「ばいばい」

「うん、またね」

駅の改札で二人と別れる。奇妙な感覚だった。誰かと「また明日」と言っただけ。こんな経験は今までなかった。悪い気はしない。むしろ嬉しかった。どうしてもっと早くに、こんな簡単なことがで

きなかつたんだろう。

タイミングを見計らったかのように、携帯電話の着信音が鳴った。千鶴は慌てて携帯電話を取って、着信音を止める。一通のメールが来ていた。差出人は『本間修一』

『美味しいラーメン食わせてやるよ。急いでうちまで来い』

短い内容だった。千鶴は思わずクスリと笑った。

いつも突然で強引で、シュウちゃんらしい。

急いで修一の家まで向かう。小さい頃から、何度も遊びに行っている場所だ。もう何年も行っていないけれど、道は覚えていた。

厨房で腕を組みながら、修一は考えた。

高校を卒業してから二年以上、親父の下で働いてきた。調理師免許も取った。それでも働き続けているうちに、このまま寂れたラーメン店の店主として一生を終えるなんて、いやだと思った。

だから東京に出て、やりたいことを見つけようとした。今でもその選択が間違っていたとは思わない。だけど店を継ぐことになるのなら、もう少し真剣に親父の教えを聞いておくべきだったかも知れない。

幸司は店の座敷を掃いている。ホウキを使って、丁寧に隅々まで掃除をしていた。

店内の掃除は、普段は幸司ひとりで行っている。仕事をサボったバツとして、今日は徹底的の掃除をすると幸司が言い出して、手伝いをさせられていた。

「幸司、俺は決めたぞ」

「何を？」

「俺が親父を越えるラーメンを作る。そしてこの店を日本一の繁盛店にしてやる」

「冗談はいいから手を動かしてよ」

弟は振り返りもしない。本気で言ったわけでもないが、あつさと流されるのは釈然としなかった。兄の妄言には慣れている、とても言いたいのか。

「でも、真面目に考えてもみるよ？ 俺が美味しいラーメンを作ればだな、俺たちも儲かって幸せだし、美味しいもの食べれて他人も幸せだし、世界中が救われるぞ」

「兄ちゃんが真面目に掃除してくれたら、世界でたった一人の弟が救われるんだけどな」

冷たく返され、渋々と厨房の床磨きを続ける。

親父は衛生にうるさかった。口に入るものを作る厨房が汚かったら、お客さんは絶対に気分が悪くなる。カウンターから厨房が見えるようになっているのは、常に清潔だつてことをアピールするためだと、よく言っていた。

その影響か、幸司は綺麗好きだ。厨房も店内も、自分の部屋も、普段から清潔に保たれている。

「あ。今より美味しいラーメンを作る方法を思いついた。ホントだぞ。冗談じゃないからな、今度は聞きたいか？」

「そう？ 一応、聞きたいなそれは」

流石に少し興味を引かれたのか、ちらりと視線がこちらを向いた。「料理の最大の調味料は、愛情だ。愛情を注いでラーメンを作れば、絶対美味しくなる」

「それで？」

「つまり愛情を注いだラーメンを作れば俺のだつて売れるわけだ」

「だから？」

「世界一なんだよ。そうしたら」

「はいはい、売れるねそれは」

「おい、バカにしただろ今。生意気だぞ」

取り合おうともしない幸司を睨みつけたが、弟は気にもしていないようだった。

「店は僕が繁盛させるからいいって、それより、お金をどうにかし

ない」と

現実的な話しに引き戻される。こうしてくだらない話しをしていられるのも、生きるだけの余裕があるからだ。本当に金がなくなってしまうば、笑っていられる余裕なんてなくなるだろう。

本間家でまともに働けるのは修一しかない。幸司が心配するの当たり前だ。

どこことなく不安げな弟に向かって、胸を張って言う。

「心配するな。もう次の仕事は見つかった」

「え、ホント？ 早くない？ 昨日仕事終わりだって言っただけなのに」

実を言えば、つい先ほど決まった話しだった。だけどそれは黙っておくことにした。

「俺は常に先のことを考えながら行動してるんだよ。次の仕事、バーテンダーなんだ。カッコイイだろ？」

「うっそ、兄ちゃんにそんなカッコイイ響き似合わない」

「おい、バカにしただろ今」

「違うよ褒めたんだよ」

適当に答える弟に、釈然としないものを感じる。だが無視して、先を続けた。

「決まったけど、まだ面接にも行ってないんだ」

「は？」

意味がわからない、というように幸司が声を上げた。

「工場で働いてた人でさ、今度バーを開くって人がいるんだ。で、一緒に働かないかって誘われてたから、さっき電話で返事しといた」

「なんだ、コネじゃないか、結局」

「コネでもいいんだよ。世界はそういう人と人の繋がりで出来てるんだ。ほら、アレだ。因果応報だ」

「慣れない言葉使う時は、使い方間違っていないか気を付けたほうがいいよ」

夜から朝までの仕事で、給料も工場勤務に比べて大幅にアップす

る（竹中がそれなりの給与を約束してくれた）願ったり叶ったりの条件だった。

修一は調理師免許も持っているし、竹中の顔見知りにはバーテンダーの仕事を誘えそうなめばしい相手がいなかった。幸運だけで見つかったような仕事だが、役に立つところを見せ付けられればいいのだ。「でもさ、面接にも行っていないのに合格ってホントに決まったの？」「心配か？ 間違いないって。電話したのはついさっきなのに、契約書とか用意してあるから、もう今日の夜から来いって言われてるし。オープン前から仕事は山積みなんだってさ」

竹中はよくわからない人ではあったが、そんなウソを吐いて修一を騙すような悪人ではない。それは間違いないと信じていた。

当面の心配の種がこれで一つ減ったわけだ。幸司もさっきよりも表情が明るくなっている。

「ほら、いつまでも話しないで掃除するぞ、掃除。さつさと終わらせないと日が沈む。ただでさえ遅くはじめたのに」

誰のせいだ、と言いたげな表情で幸司が修一を睨む。修一はそれを無視した。

ようやく掃除が終わった頃、ガラガラと音を上げて、立て付けの悪い扉が開いた。店の入り口には『閉店』の札が掛かっているから、客ではない。

振り向くと、入り口に千鶴が立っていた。

「遅かったな」

「急いで来たよ。学校終わってすぐ」

足を踏み入れた千鶴が、懐かしむように店内を見渡した。

予想外の人物に、幸司は驚いたようだった。目が会うと、ぎこちなく千鶴が笑った。

「何か、久しぶりだね」

「ああ、うん、そういやずっと会ってなかったっけ」

幸司も気まずそうに返事をする。

何だかおかしくなって修一は笑った。

「好きなところ座れよ。約束どおり美味しいラーメン食わせてやるから」

掃除道具を幸司に押し付ける。厨房に戻ると、修一は念入りに手を洗った。

「ほら、これからラーメン作るんだから、汚い道具を店に置いておくなよ」

嫌そうな顔をしたが、幸司は何も言わず掃除道具を持って二階へと戻っていった。

「すぐ作るから、ちょっと待ってるよ」

調理をしている間、二人は無言だった。修一は調理にだけ集中している。麺を茹で上げるタイミング、湯切りの仕方、スープの分量、親父がやっていたことのすべてを思い出そうと、集中力のすべてを傾けた。教わったことと教わらなかったことを思い出す。きっと自分にも出来るはずだ。

千鶴も黙ったまま、興味深そうに眺めている。

付けっぱなしにされたテレビだけが、沈黙を破っていた。

「できた。食ってみ」

熱いラーメンの入った器を、カウンターにそつと乗せる。

湯気で曇らないように、千鶴はメガネを外した。

「うん、それじゃあ、いただきます」

今までも、手を抜いて仕事をしていたわけじゃない。だけど、本気でやっていなかったのも事実だ。

あと数年の間だとしても、この仕事を続けるなら全力を注ぐべきだ。

本気で作ったものは、一番に千鶴に食べさせようと思った。理由は、忘れてしまった。

現実はどうにもならない。明日にはまた、辛いことが待っている。不安や心配は尽きない。いつまで経っても同じだろう。過去は消えないし、未来は見えない。

ケンカもするし誤解もする。些細なことで人は傷付いてしまう。

どれだけ相手を思いやっているつもりでも、互いに理解しあえることとはない。人と人が同じ世界で生きる以上、それは避けられないことかも知れない。

麵を一口すすって、彼女の手が止まった。

「美味しい。ホントに」

千鶴が笑った。

久々に見た気がする、満面の笑顔だった。

「な？ 言ったとおりだろ？」

それでも、きっと明日からも笑っていられる。今はそう信じていた。

後編（後書き）

（2010/04/15 追記）

前編・後編ともに文章の言い回しなど、多少変更と修正を加えました。

ところで、完成した小説に手を加えるなんてやってはいけない行為ですよ。

とかいいつつどうしても気になった点だけ直してしまいました。

約一年前のこの時期に書き上げた小説です。

見返してみたらやっぱり足りない部分も多いと思うのですが、個人的にはお気に入りのテーマでした。

いつか同じテーマでまた小説書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6459j/>

プロミスワールド

2010年10月8日14時52分発行